霊剣歴程

kadochika

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霊剣歴程

【Ｎコード】
Ｎ０１６０Ｙ

【作者名】
ｋａｄｏｃｈｉｋａ

【あらすじ】
潜在的に魔女の素質を持ちながら、魔女を弾圧する王国に生まれてしまった青年グリュク。
意志を持つ剣ミルフィストラッセと出会い、兵員選抜試験の会場を襲った怪物を倒すが、その返り血を浴びてしまい、本当に魔女の力が覚醒してしまう。
剣と剣士は弾圧を逃れるために、東にあるという魔女の国へと向かう。

（※）申し訳ありませんが、縦書きｐｄｆでの表示推奨かも知れません。ご注意ください。

1. 東部への列車

大陸東部の妖魔領域は、有史以前から存在していました。
呪われし不朽の身体と、人類が持たない超自然の魔力に対して、父祖たちがささやかながらも力の限りの抵抗を続けてきたことは、誰もがご存知の通りです。
神の遣わした天使たちの教えで、人類は暦と銃と聖典を手にしました。戦いは続きます。
どうか国民の皆様、信徒であられる皆様。
彼らの導きの下に、更なる輝かしき勝利を、後の世代へ。

――国王即位演説より抜粋。

思い起こしてみれば、しばしばまともな時間の感覚を見失っていたことに気づく。
人だった頃の記憶は残っていた。戦友との思い出も。今ではこのような有様なので時間の感覚こそ曖昧になったが、幸い、さほど長くこのままだった訳でもないらしい。
この先の保証はないが。
いつの頃からか……少なくとも、この世に存在を命じられた時から。
ひたすらに待っていた。
出会うべき主を。

列車に乗せられて三日目の朝。
東部に向かう選抜訓練参加者を乗せた騎士団の列車は、森の中の鉄軌の上で朝日に向かって気の抜けた突進を続けている。
目覚めてみれば、伸びが目立つ己の髪がグリュクの目に入った。そろそろ切るかまとめるか。髭も剃れないのでそろそろ鬱陶しい。車中の匂いは昨日よりやや強まっている。自分も含め、車内に敷き詰められたようになっている男たちは、衛生については濡らした雑巾で体を拭くことしか出来ないのだから当然だ。シャワーの付いた鉄道など、彼は見たことが無かったが。着替えなどもなく、ほぼ全員が初日から着のみ着のままの私服で乗車生活を送っていた。彼を含めて、乗っているのはそのような男たちだ。

「うぅ……」

生来寝覚めは良い方だったが、グリュクは配布された薄手の毛布をどけると、上体を起こして背を伸ばした。赤みの強い髪に、深い色の碧眼。垂れた目尻だが弱弱しくは無い。貸与されていた薄い毛布はやや小さく、身長は１８０ｃｍを越えて筋量も少なくは無い彼にとっては物足りない大きさだった。
列車の車内には王都圏の旅客車に備わっているような椅子などは無く、家畜用車両の製造過程に少し手を入れて転用したものらしい。洗面所については各車両の前後に二つあるので用足しについては問題ない（清潔さが保たれているとはいえないが）。乗車密度は詰め込まれたと辛うじて表現できるかどうかといった程度で、体躯の大きいグリュクでも膝を曲げれば横にはなれた。騎士はどうなのか知らないが、従士では選抜訓練の時点で既にこの扱いだ。選抜訓練が終われば、いつ戦闘地帯となるか分からない東部のどこかの基地で

任務に就くのだろう。

見渡せば周囲の男たちは殆どがまだ眠っており、近い場所で気の合う時間に目覚めた何人かが小声で何かを語り合っている。年齢はややバラつきがあるが、募集要項には２８歳までとあったので、それが上限だろう。立って窓から手を出し煙草を吸っている者、ボリボリと固形糖を齧っている者もいた。

車両後方の扉が開くと、配膳の台車がやってきた。２m近い高さの台車が何台も、鉄道局の制服に前掛けを垂らした年配の係員たちに押され、車両の通路を無造作に進行していく。はみ出した足はこれまた無造作に押しやり（車輪が小さく、はみ出した就寝中の男たちの足がひき潰されることは無かった）、二台が車両の大体中間の地点に止まると、ぶっきらぼうな係員二人の声を合図に配食が開始された。眠っていた者たちも体を起こし始める。床に足を畳んで黙って順番を待っていると、誰かが声を上げて嘆いてみせるのが耳に入った。

「まぁた挟むのを変えただけかよ！」

笑い声とも溜息とも取れない呻き声の輪が車中に広がる。配食係たちは慣れたもので、そんな呆れたような罵声に顔色を変えることも無く、盆を配ってゆく。彼らとの付き合いも早三日目ということになる。

渡された盆の彩りは、最近グリュクの故郷でも普及し始めた紙のカップに注がれた熱いスープと、切れ目を入れて肉を挟んで紙で包んだパン。これが朝食だった。パンのボリュームだけはちょっとしたものだが、配食用の盆も、予算が無いのか目に見えて古びたものが多い。

人工肉サンドを手で掴んでようやく気づいたが、三日目に至ってもこのようなメニューばかりなのはフォークやスプーン、皿すら省く為らしい。盆があるだけ善良な処置か。別に受刑者を輸送してい

る訳でもないのにこの待遇は、この先の選抜訓練に合格しても食生活には期待はしない方が良いということだろうか。

「（そもそもこの盆だってまともに洗ってるのかも怪しいもんだ……）」

グリュクも一通り心中で毒づくが、中々に空腹でもあった。特に悪く匂う訳でもないので、パンを齧り、スープに口をつける。決して、口にした途端に吐き捨てたくなるような酷い代物ではない。だが、ややとろみのあるスープは具が全く無く、また無理矢理栄養素を添加されて混沌とした味を更に塩と香料で誤魔化しただけで、滋養は確かなのだろうが積極的に飲みたいものでもなかった。パンに至っては生産性最優先の無発酵で、肉は啓蒙者たちが工場で生産した合成食肉だ。昨夜は同様のパンに魚の切り身のようで少し不自然に線が入った何かが挟んであり、昨日の朝はすこし筋みを増して鳥皮のような膜状のもので包んだ肉――それぞれ魚肉や鶏肉を再現したつもりなのだろう――が挟んであった。昼だけはチョコレートから甘みをすっかり抜き取ったような固形の板状の食品も一緒に配られた。どれも同様、味が悪い。味を大目に見たとしても、人間には満足な食事が続くと同じメニューには飽きが来るということを啓蒙者の司祭たちは想像したことも無いらしい。彼らはあくまで善意でやっているようだが。

食料の生産はその啓蒙者たちによるものだが、実際の配給、調理や配膳など、それ以外はほぼ全て人間がやっている。意欲に乏しい担当者がやっているのか、何度か味わった合成食肉の調味加減には酷いむらがあった。スープの方もあまりのんびりと啜っていると添加された神聖な香料とやらでむせ返るので、グリュクはパンを片付けると意を決して、やや冷め始めた（冷めてしまうともっと飲みづらい）スープを食道に流し込んだ。じわじわと喉を上ってくる僅かな吐き気から注意を逸らすように、改めて車内を見回す。

車内の左右各側で、彼を含めた志願者達は全員、空間の許す限りに思い思いの姿勢で座っている。短い毛の生えた方形の断熱マットを敷き詰めた安物ではあったが床は剥き出しではなく、洗浄もそれなりにされたようだった。だが、家畜車両同様に窓を小さく取った作りが、申し訳程度の強さしかない冬の朝の光を更に弱めていた。飢えは無いことと、暖房だけはそれなりのものが機能していることとが救いだ。

「まぁ、最初はこんなん寝れっかって思ったけどなぁ。慣れってこえーな」

初日は皆強張っていたが、既に談笑する者さえいる。列車の関係者を除けば（いや、彼らもそうなのかも知れないが）程度の差こそあれ、恐らく全員が食い詰めた失業者なのだ。選抜といっても、ただ地上騎士団に入団して騎士より下の階級である従士になるだけなら並の基礎体力さえあればいい（というのが、非公式ながら知れ渡っている王立地上軍の方針だった）。そして、従士だろうと着任すれば最低限の生存は保証される。慢性的な不況に喘ぐ王国にあって、不人気ではないという程度の志望者はいた。例え選抜会場への列車便がこの程度の代物だったとしても、まだまだ下があるのだ。それが、宗教軍事王国スウィフトガルドの社会の一断面だった。

訓練期間が始まるまでは楽な時間が続くと見込んでいるのだろう。選抜参加者はみなそれぞれに、朝食を終えてまた眠っているか、馬の合う相手と郷里の愚痴や他愛も無いゴシップに打ち興じていた。

王国政府は公式には否定しているが、啓蒙者たちが今次の征伐軍についてかなり真剣に最終戦争だなどと意気込んでいるのを、多くの巡礼者たちが目の当たりにしているらしい。自分たちが選抜に参加するのも厳しい前線で欠員が多く生じた（もしくは生じる見込みが高い）からだということはさすがに誰もが意識しており、日中は

それなりに喧しい車内にあってもそこだけは話題に上がることがなかった。
グリュクに関して言えば、率先してその手の話題に参加する性分ではないので、結果、暇になる。
特にやることも無いので、もう少し眠ることにした。

2．選抜訓練開始

王国では、魔女狩りというものが重要な習慣だった。

啓蒙者たちより授かった検知機材を使用し、異端審問官や地域の教会が定期的に――時には抜き打ちや政治に関わる目的で突発的に――活動し、僅かでも魔女の因子を持つ者を摘発し、「駆除」するのである。

魔女としての能力と因子の多寡は必ずしも比例せず、因子が確認されても魔女としてはなんら無力であることも少なくない。

例え両親に因子がなくとも、成長に従って発覚するというケースがあり、出生時から成長期を過ぎるまで、何らかの形で検査が行われる。

グリュクの母も、そういった潜在的な魔女の一人だった。

当時既に一部で知られていた隔世遺伝という現象だったらしいが、審問官に賄賂を渡した嫌疑まで掛けられ、当時は官民を問わず、王国世論が大いに揺れたものだった。

幸い、反応が出なかった幼いグリュクは教会でも最穏健として知られる一派の庇護を受けることが出来たが、両親と、母に連なる一族はそうは行かなかった。陽性の反応が出たため啓蒙者に直接”処分”された母を除く全員が、汚染種庇匿罪による悔悟刑処分。王国には国教と法に定められるところの”啓発教義”に基づき、単純な死刑ではなく、それより”上位”とされる酷虐的死刑が存在していた。名付けられる前に親元から引き離されたことを含め、彼は何も覚えていなかったが。

”穏健派”たちによって徹底的に審問の目から秘匿されながら育ってきた彼がそれを知らされたのは、１８歳を迎えた年、審問法に定められた最後の魔女反応検査が無事に終わったその翌日だった。

秘境同然の僻地にひっそりと立っていた故郷の教会が、穏健派が政争で劣勢になったことで周辺開発とあわせて人員を刷新すること

となり、それがグリュクが外の世界に出る契機となる。
そして、3年ほど、東部の地方都市をさまようように転々とし、挙句の果てに自分の母と母の家族を皆殺しにしたという教会の、その手先となる騎士団に入団するために、こうして列車に揺られている。
彼にとっては、もはや己がどう生きればいいのか見当が付かないというのが正直なところだった。
かといって、生きるのを止める気にもなれないのではあるが。

四日目の朝、列車が会場近くの貨物駅に到着すると、身動きもままならない車内に飽き尽くしていた志願者たちは率先して駅に下りた。駅といっても貨物駅でプラットホームなどがなく、志願者たちは側面の運搬口から思い思いに飛び降りる形での降車だが。暖房でふやけた肌に、東部の冷たく湿った風があたるのが心地良い。
駅の出口の受付で配られた小さな紙切れを見ると、地図だった。印刷機が古いのか図がかすれがちで読み辛いが、少し歩いた開けた場所で選抜を開始する旨が記してある。
駅を出ると、来場者などの担当者と思しき、眼鏡の娘が多少気の抜けた声で通告してきた。

「それでは選抜参加者は地図の所定の場所へ移動をお願いしま～す」

女気の無い道程もあってか、口笛を吹いて色目を送るものもいる。
降りてからは更に歩き、簡素な二階建ての軍施設と思しき建物が添えられた運動場のような場所までしばらくかかった。周囲は申し訳程度の鉄条網以外はグリュクの見慣れない東部の樹木で溢れており、国境近くへとやってきたという実感を強めた。
選抜志願者は千人ほどもいるか。出発前の測定検査で撥ねられた

極少数以外は心身両面で問題もなく、列車に揺られての長旅でも脱落者は無いらしい。多かったのは愚痴だけだった。

全員集まりきったかという頃合に、騎士団の野戦服を着た騎士たちの一段が現れ、運動場の入り口から志願者たちを挟んで反対側へと回っていった。

志願者たちがうろたえる間もなく、その中から出てきた軍の礼服を着た士官が、カツカツと木製の指揮台に上った。

「えー、本日は地上軍従士選抜試験へようこそ、歓迎いたします。わたくしは王国地上軍、東部方面第２１６騎士団教練騎士長、ウィレル・アルモリア一等重騎士です」

物腰からして十分に年季と軍歴を兼ね備えた軍人でありながら、なにやら風采の上がらない役人めいた出だしですらすらと述べたて始めると、志願者たちは聞き逃したら不味そうな気配を察したのか、整列こそしないものの指揮台に向いて直立した。グリュクもつい習う。

「みなさんには当基地の教練騎士隊が付き添いますので、彼らの指示に従って選抜過程に進んでください。みなさんが栄光ある教会地上軍として共に戦う戦士となれることを願っております、それでは、選抜開始とします。以上！」

そう言い切ると彼はそそくさと指揮台を降り、騎士集団と敬礼を交わし、足早に施設の方へ歩いていき、そこへ繋がる階段の向こうに消えた。

「やたら手短だなおい……」

「立ち続けなくていいのは助かるけどこれはこれで釈然としない……」

気構えの肩を透かされたのか、志願者たちの輪に半ば呆れたようなざわめきが広がっていった。

騎士の辞では選抜後のことや脱落者の扱いなどは一切触れらていない。野戦服の騎士たちに聞けばいいのだろうが、このような東部の小規模な拠点ならば、レジュメを作って配る程度のことをやらせる閑な人員などいくらでもいそうなものだ。

周囲の意見に心底同意し、グリュクは騎士たちが選抜試験のための列を作るよう始めた指示に従った。

あれから、水の入った水筒を配布され、森の中を二時間ほど歩いた。到着から数えて太陽が昇りきりつつある計算だ。道は一応の舗装を施されて幅は１０m程度、大型の軍用車両でも行き交えそうではある。ただしひび割れの補修が追いついておらず、そこから草が生い茂っていることも度々だった――どこもかしこも東部はくたびれている。思い出したように古ぼけた水銀灯や測量用の標識が設置されているだけで、ガイドレールなどは無い。道は曲がりも少なく森の中を奥へ奥へと続いており、両側を覆いつくす森は極相に達しつつある林冠から光が差し込み、腐葉土に覆われた地面をかろうじて照らしていた。

そんな道をほぼ真っ直ぐ歩き、グリュクの場合は志願者同士の間隔がかなり延び、脱落者も出たのではないかと訝る頃に到着地点にたどり着いた。山の麓がそこだけ切り開かれており、千人ほどの志願者たちが十分な間合いで広がっても騎士達が全員を視認できる程度には広さがあった。こういった選抜試験や訓練などで使うために整備されたのだろう。

そこで到着できた志願者たちは思い思いにぐったりと尻を土に下ろし、先に手配しておいたらしい輸送車の荷台から、騎士たちが何

やら袋を配っていた。

「……腹減ったなぁ」

彼も体力には少々自身があったが、さすがに朝から飲まず食わずで二時間の歩行は堪えた。一時間も経った頃から抗議を続けていた腹の虫をなだめつつ、背後の幌の輸送車に大量に積まれた袋の中から一つ、騎士から受け取る。背負ったり腹に巻きつけるためのベルトが付いており、くすんだ緑の色からして、恐らく行軍用の背嚢だった。呼びかけられている説明によると、どうやら、これを背負わせて選抜を続けるらしく、その前にこの中の糧食で腹を満たせということらしい。

力の入らない腕を叱咤して背嚢を開いている場所に置き、両掌に乗るほどの大きさの角ばった缶を取り出して、ピンを回してこじ開けると、四日ぶりの人間の食事が顔を出した。

全て加熱などされておらず冷たいものの、中身は牛肉のシチュー、塩味の効いた茹で豆、味は無いものの歯ごたえは小気味良いビスケット、干し葡萄。水出し用の穀物茶バッグ（水筒の水を使うらしい）までであった。全て耐水袋に入れられており食器などなかったが、量は十分、味もこの空腹なら文句など無い。先ほどから周囲で先着の志願者たちが無言でガツガツと煩く貪る音がしていたが、グリュクは心底から納得した。啓蒙者たちの栄養食などより遥かに素晴らしい。全て平らげ、水筒の水でトドメを刺すと、思わず溜息が漏れた。

「ふぅ……」

人心地ついて冷静さが戻ったグリュクが来た道を見ると、まだ志願者の到着は続いていた。みな人並みの体力はあるはずだが、空腹のままの二時間歩行では倒れる者もいただろう。そこでそれを放置するような無道な軍ではないはずだが（批判も多いが、彼らとて教

義の守護者たる騎士だ）、グリュクは少々、不安を感じた。感じたところで何か出来る訳ではないのだが。

「背嚢を受け取って、中の食料で昼食を取ってくださーい！　空け方の分からない人は聞いてくださいねー」

缶詰も普及していないような地方、あるいは属領から来ている者もいるのだろう。定期的にそうしているのか、騎士の一人がそう呼び掛けていた。

それとは無関係に気づいたのだが、もう四日も同じ服を着て、汗もかいている。さすがに着替えたくてたまらない。

到着できた全員が食事を終えると、そんな希望を打ち砕いて班編成が始まった。二時間で結構な振るいが掛かったようで（並の体力があれば入れるという噂は疑わしくなってきた）、約二十人ごとに一班、併せて三十前後の班にしかならなかった。様子を伺うと、体力の平均が近くなるように集めているらしい。

一人一袋、配られた背嚢はかなり重い。改めた限りは水筒の他、あと5食分の食料、吊り下げ型の懐中電灯、止血消毒などの簡易医療用品や薄手の毛布、ライター、飲料水調達用の濾過フィルター、多用途ナイフ、呼び笛などが入っていた。騎士ならまだしも、従士はこれを（実際の戦闘ではこれに銃や予備の弾丸が入り倍以上の重さになる）己の足で運ぶのだ。広大な戦線でこれを背負い、下手をすれば何百ｋｍも戦場を移動するのだろう。ここで脱落しても再び食い詰めるだけなので、とにかく啓蒙者たちが魔女たちに戦を仕掛けないことを祈るしかないが。

そして、誰に合図するとでもなく行軍が始まった。分けられた従士志願者たちが騎士に付いて山道へ入り始め、山道を曲がって消えて行く。班に番号が振られているのかどうかは分からないが、グリ

ュクは先頭近い班に入れられた。空腹が満たされたとはいえ、疲労も癒えきってはいないのだろう、後ろからは言葉はほとんどない。騎士たちも、何か符丁のようなものを交し合ってからは各々の班を率いて無造作に足を運んでゆく。

グリュクも流れに応じて足を踏み出した。

3. 襲来

私物にも支給品一式にも時計はなかったが、日が沈んでくればそれも容易に知れた。ここは東部なので、時差を考えれば西部の都市圏や更に西の王都は恐らくまだ明るい時刻だろう。

太陽は沈んだので、とっくに暗い。各々が指示通り、首から懐中電灯を下げていた。懐中電灯といっても、戦闘服などに吊り下げてスイッチなどの切り替えで信号などにも用いる様式で、平たい縦長の形状をしている。

最後の食事から既に五時間以上は経っているだろう。一時間ごとに小休止を繰り返しながら歩いて来たことを反芻していると、前方に灯火が見えてくる。それが何なのか判明するより前に、先頭の騎士たちが後ろ向きに歩きながら笛を鳴らして、号令する。

「それでは、この地点で簡易キャンプの設営に入ります。志願者の皆さんは我々の指示に従い、設営に取り掛かってくださーい」

懐中電灯のカバーを持ち上げて前方を照らしている志願者をみて、グリュクも同様に前方を照らした。どうやら広い平地になっているようだ。昼に到着した場所より少々規模が大きい。後続の班も遠慮なく入ってくるので、立ち止ることなく先に従い、開けた場所を進んでゆく。やはり指示に従って班ごとに間隔をあけて待機していたが、グリュクは回りを照らすとテントや釜などがないことに気づいた。毛布を被って野宿をする覚悟を固めたところに、輸送車が5両到着し、そこかしこで安堵の声が上がった。本来なら物資を積載した輸送車（場合によっては馬車などだろうが）と共に行軍するのだろう。

予告なしに訪れた転調に戸惑いつつも、疲れ、あるいは飽きていた志願者たちは騎士たちの指示を受け、灯火やテント、釜の準備に

取り掛かっていった。

合わせて野戦服も支給され、こちらも軽く歓声が上がった。恐らく新品などではないのだろうが、汗と垢に塗れた服を着替えられるだけでも福音というものだ。

設営が終わり、食事――昼のものと少し内容を変えただけだったが、慣れきるまでは疲労と空腹もあって今少し感動できるだろう――、今後の予定についてレクチャーを受け、選抜の残り期間がさほど長くないこと（恐らく、背嚢の食料が尽きるまでこのまま歩き続ける）が匂わされて、最後に当番制で睡眠を取ることなどが告げられると、班を三分割した編成を決めた。

くじ引きに敗れ、グリュクはあとニ時間起きていなくてはならないこととなった。

「……」

本来なら銃と兜、場所によっては胴鎧などを身につけて立つのだろうが、そういった役回りは随伴の騎士たちがやっているため、グリュクは野戦服に切り落とした太い枝を手斧で削って整えた短棍という、少々心もとない武装で騎士たちに習うように警備に当たっていた。

「（正確には警備の真似事だけどな……）」

そういった事柄は正式に入団してから教えられることになるだろう。そもそも東部とはいえ、人に危害を加えられるほどの脅威的な妖獣などは先の大戦以来出現した記録に乏しく、例え何かの偶然で現れても啓蒙者の戦力が直々に誅滅してしまう。元々が妖族たちによって領域の奥地から連れてこられるものが多いため、彼らが申し

込んできた（と、王国は主張している）休戦をこちらから破るような事態が来ない限りは死ぬ危険などは少ないだろう。音声放送などを聴く限り、最近議院は強行派が優勢らしいが……

「なぁ、何か揺れね？」

唐突に話しかけてきたのは同じ班の、確か、サージャンという名前だった。中肉中背、黒髪黒目の軽い雰囲気の男だ。行軍中に他愛もないことを少々喋り合った程度の仲だが、嫌な相手ではなかった。

「揺れ……？」

「遠くでズーンズーンて響く感じなんだが……しないか？」

訊かれて、出来る限り耳を澄ます。さほど耳に自信がある訳ではない。

「……言われてみればそんな気もする」

告げてふとあたりを見まわすと、騎士たちが少々慌しく言葉を交し合っている。

何人かは騎士たちのテントの中の無線機に集まって、どこかと通話しているようだ。知る由もないが、出発地点のあの拠点だろうか。

「何か慌しいな。魔女どもが休戦協定でも破らかしたのかね」

「……」

気の効いた返答もできずに黙っていると、騎士の一人が周囲の志願者に指示を出してキャンプ地の中央に集まるよう広め始めた。慌しくも何とか全員が集まったのか、騎士の中で最も階級の高そうな男が拡声器で告げた。

「候補生の皆さん、急ですがお聞きください、現在推定ですが、大型妖獣がこのキャンプ地の方角に進行中という情報を得ました！繰り返します――」

王国よりはるか東の妖魔領域と呼ばれる、人類の住む生態系と異なる広大な異界的環境に生息する獣を妖獣と総称する。少々漠然とした分類であり、魚に似ていれば妖魚、鳥に似ていれば妖鳥と呼ばれる。ただ、いずれも大型のものは各種建築物に匹敵する巨体であり、兵器で以ってしても未だ対抗が難しい存在だった。過去の大戦で人類側を苦しめた大きな要因の一つでもあり、この場の従士志願者の群れでどうにか出来る相手では絶対にない。

常に何人かの騎士がやや離れて周辺を警戒しており、それで早期に発見されたのだろう。拡声器を通じた衝撃的な内容に、場が騒然とする。

「静かに！！　仮にも王国地上騎士団への入団を志した諸君が、この程度で慌てて貰っては困る！　まさかここで我々だけで戦う訳はない！　妖獣の相手は最寄の騎士団が急行します！　諸君は我々と共に、一刻も早くこの場から離脱します。各員、背嚢だけまとめて騎士の指示に従ってください！　設備は一時放棄！　それでは、指示に従い離脱準備開始！！」

拡声器のスイッチを切ると、騎士は通信機のあるテントへ足早に歩いていった。

輸送車の一台が動き始め、放棄する積荷の代わりに体調を崩した者、怪我をした極少数の者などを優先して積み込み、発進して行く。不測の事態を想定して輸送車に積んででもあったのか、騎士の中には榴弾砲を組み立てて照準を確認している者もいる。

グリュクはサージャンたち他の班員と共にテントに戻り、背嚢を

まとめると班を率いる騎士の指示に従った。

「最悪、覚悟しとくべきかもな……」

「食い詰めて歩かされて最後は化け物の餌か……」

微かに諦念の混じったその呟きに冗談のつもりで返すと、サージャンが呻いた。

「さすがに洒落にならん」

体力の低いと判定されたものから優先して輸送車の後部に載せられてゆく。全部で三台、残り二台は騎士たちがこの場で持ち合わせていた数少ない武装のほぼ全てを載せて、妖獣に対して囮となるべく地響きのほうへ発進して行った。三台では、詰めに詰めても百人程度しか運べなかった。

「乗れない志願者の方は申し訳ありませんが、しばらく徒歩で逃げてください！　安全地点で乗員を下ろしたら、すぐに回収に向かいます！」

サージャンが恨めしげに鼻を鳴らす。

「だってよ。救援の手際次第じゃ見込みのあった奴から生贄になるらしい」

「……順番を逆にしたら尚更非道な話になるじゃないか」

「交代番で貧乏くじ、撤退で逆差別……そろそろ不幸の底も抜けて良さそうなもんだ」

グリュクと違って本音らしく、表情はかなり険しい。言いあいつつも、二人とも速度は緩めず足早に進んだ。当然ながら、歩くこと

になった志願者たちの列には日没前の雰囲気は全くない。何人か抜けた班と共に、腐葉土を蹴り、半ば走るような勢いの騎士たちに遅れまじと、不運な従士候補生たちはやや先ほどよりかなり近づいてきた地響きを背に、夜の山道を歩き続けた。

追い風が吹いており、それだけがわずかな慰めだった。

4．目に見えぬ無音の気体は

後方で、爆音が響く。

恐らく先ほど二台の車輌で足止めに行った騎士たちが交戦に入ったのだろう。報道で聞いたことがある程度だが、妖獣の種類によっては携帯の榴弾砲ではまったく威力が足りないこともあるらしい。岩石射出架や火打石銃で立ち向かっていた中世から、人類の火力も格段に上がっているのだが。

直後にいくつか爆音や銃声、衝突音が響き、そして静寂が訪れた。

「……終わったのか？」

サージャンの言ったとおり、爆音や銃声はおろか、響いていた妖獣の足音までもが消えていた。

「案外弱い奴だったのかな」

安全が確認されるまではこのまま歩き続けることになるだろうが、一先ず状況打開を喜ぶような溜息がそこかしこから聞こえる。だが、それがすぐに動揺に代わる。

「……っ！」

背中を押していた風が正反対に向きを変え、図らずも足が鈍った。埃が目に入り、反射的に顔を背ける。その時目に入ったものに違和感を覚えてグリュクが訝りながら胸の電灯のカバーを空けて後方を見やると、混乱が見えた。

「ぐが……！？」

「うぁ……あ……らぁ……」

２００ｍほど後方から、視界に入る限りの最後尾まで、選抜志願者たちがうめき声を上げながら倒れている。正確には、頭を押さえたり足元がふらつく程度で済んでいるものから後ろに行けば行くほど有様が重篤になり、泡を吹き出して痙攣している者、ここからでは確認できないが、恐らく死んでいる者までいる。

「……！？」

「っ、何だ……何だぁ！！？」

「走れ、ただし冷静に！」

騎士の一人が叫び、候補生たちが従う。

ただ、冷静にという訳には行かなかった。候補生たちが堰を切ったように走り出す。グリュクやサージャンだけでなく、無事な列全体が動揺していた。妖魔領域には物理法則に従わない”妖術”と呼ばれる力が存在し、妖獣の中にはそれを扱えるものもいるという。前方の生き残った候補生たちの列の反応は単にすぐ近くで出た犠牲に対する恐怖であり、妖術がどうこうと冷静に分析できた訳ではないだろうが。グリュクも、得体の知れない脅威を相手に歩く気にはなれず、走った。歩き通しのために足腰にだいぶガタが来ていたが、それでも恐怖には抗えない。

被害を免れた前方の騎士たちが事情を把握しようとして、走ってきた候補生の一人に問い質していたが、”妖獣のせいだと思う”以外の情報が分かる筈もなかった。

搬送や陽動で半減し、二十に満たない人数で恐慌に陥った多数の候補生たちを止められるはずもなく、山道を疾走する集団から身を護るように、騎士たちが道の脇に固まって警戒しながら進んでいるのが見えた。それにグリュクとサージャンが追いつくと、既に大半

は先へといってしまっており、比較的冷静さを保っている少数の候補生たちが息切れしないようなペースで、銃を構えた騎士たちと合流しているのが見て取れた。

「騎士さんたち、俺らどうすりゃいいんスか！」

サージャンが抗議するように呼びかけると、副教練騎士長だという男が口を開いた。

「とりあえず地響きは今は収まっているようだから、妖獣の歩みは止まっている！　私たちに従って慌てずに進んでくれ！　我々もわからないんだ、後方の騎士が発光信号も寄越せない事態に遭遇したらしいということ以外は……」

「先に走ってった他の連中に聞いたんでしょ！？　後ろの方の連中が見えない何かでバタバタ死んだのを！」

サージャンが畳み掛けると、騎士たちに食って掛かる程度の平静は保てたらしい他の候補生たちもそれに習った。

「妖獣がどんな奴だか知りませんけど、先に仕掛けた騎士を全滅させて、それで追い討ち掛けてきたってことなんでしょ！？」

「だから早く山を降りようとしている！　救援は既に呼んだがこの短時間でこんな山奥までは来ない！　先に行った連中のように闇雲に走って降りられるほど分かりやすいつくりじゃないんだこのあたりは！」

互いに仕方ないのだが、両者共に殺気立ってきていた。もちろん歩みは止まっていないのだが、選抜する騎士たちも選抜を受ける候補生たちも、辺境基地での従士選抜試験でこんな事態に陥るとは夢にも思っておらず、そしてどちらも迫りつつある危機に対して確実

な対策を持たない。騎士たちの武器は見る限り銃だけで、人間相手であればともかく質量の違いすぎるであろう（そして恐らく携帯型榴弾砲程度の戦力は返り討ちに出来る）妖獣相手に効果は期待すべきではないだろう。

恐らく騎士たちの言うとおりにとにかく山を下りるしか手がないが、状況への耐性は候補生たちの方が低かった。彼らの方はやや実感が薄く、事態を明瞭に確認することを求めている。

グリュクは何も言わずに随行しながら状況を傍観していたが、その時変化があった。

「……また揺れた？」

誰ともなくつぶやく声。妖獣の――当然だが、この場に件のそれを直接見たものはいない――足音の地響きが再開され、それどころかこちらに接近してきているように感じられた。さすがに早足のまま言うわけにも行かず、全員が急いで走り出した。

グリュクがつい後ろを振り返ると、その視線の先に、山道のカーブから小山のようなものが姿を現した。

いや、動いている。あれが妖獣だろう。やや遠いが、頭部の形状は角のない龍、目はよく分からない。胴体からは平原の獣のような強靭そうな四肢が下方に垂直に伸びて重量を支持しており、その体表全体で硬度を誇示する岩肌のような表皮――というか、もはや装甲板、そう見えるものに覆われているようだった。推定するに、高さは１０ｍ近く。四足歩行でこれは驚異的といってよいだろう。見かけよりは素早く思える動きで、ドシドシと舗装も怪しい山道を踏みしめながらこちらに走ってくる。暗闇の山で彼らの懐中電灯の光を浴びて浮かび上がるその姿は――恐らく日中に遠くから見ればさほど恐ろしくはなかったのだろうが、正しく悪夢だった。

（右手だ！　急だが斜面を駆け上がれ！！）

「……！！」

突然、脳裏に明らかの自分の意図していない言葉が浮かぶ。信じがたい事態にたじろぐが、それ以上に暗闇の山道を突進してくる圧倒的な質量に気おされ、グリュクは煙にでもすがるような気持ちで右手の森の暗がりへと走り出し、低木を掻き分けた１０ｍほど先にあった急な斜面を駆け上がった。手や足腰の痛みも忘れ、両腕が塞がりカバーが下がったままで前方を照らしてくれない懐中電灯の光を頼りに手探りで木の根や幹をさがして足をかけ、無我夢中でひたすらに登る。悲鳴やますます近づく地響きが耳を射抜くが、それでも足は止めなかった。

ふと気づけば、足元が水平になっている。とにかく斜面を登りきって、何やら獣道らしき所に出たらしい。我に返って背後を振り向くと、林冠が目に入った。山道から２０ｍほどの高さか、先ほどグリュクがいたであろう地点を見遣ると、木々の枝葉の間の明滅で妖獣の動く影が窺えた。夜闇でよくは見えないが、懐中電灯の光のいくつかが、やや大きい光点となって周囲を照らしているのだ。動いているものは一つもない。妖獣が動きを止めて何をしているのかが、湿った音で察せた。

「……！！」

グリュクは足腰から力が消えるのを感じ、声にならない声を漏らすことしか出来ず、後ろに倒れこんだ。食料の入った缶や水筒が背嚢の中から背を打ち、何とか我に返る。夜の木々の向こうでよく見えないのがまだしも救いと呼べるだろうか、惨事がすぐ傍で起きている。先ほど倒れた大勢の候補生たちも、同じ末路を辿ったのだろうか？　林を隔てたすぐ向こうの出来事と、今の自分がそれを免れ生きていることとの落差が、強烈に胸を締め付けた。体を跳ね上げ、グリュクは喉の奥で膨れ上がった痛みを吐き出さざるを得なかった。

逃げ切った者がいるのかどうか分からないが、生きていれば逃げるにせよ戦うにせよ、何らかの形で抗うはずだ。この場で生きているのは彼と、妖獣だけということか。むせ返る鉄の臭いと酸の味が五感に焼きつき、尚も胃の中を吐き出し尽くしてから突っ伏した。

安堵と失意に挟まれて、再び、自分の意図していない言葉が脳裏に浮かび上がって消えた。

（こちらだ、来たれ）

半ば自棄になって立ち上がると、懐中電灯のカバーを持ち上げ、細い獣道を歩き出す。斜面を駆け上がる時に捨てたのだろう、短棍は紛失していた。声の指し示す方向は、不思議と理解できている。ほどなく、木々の群れの中に違和感を見出し、近寄ってみると、グリュクの背丈よりもやや小さく、斜面を掘って屋根付き天窓のように形作られた人工物だった。簡素な板材と石材の組合せで、図面などを引いてあるようには見えないが、それでも細長い引き戸や紐で束ねた草本、そして供物らしきものなどを備えていた。王国でよく見られるような様式とは異なるが、祠なのだろう。

何故そうと分かるのか、それこそ理解しがたいことではあったが、ともあれ言葉の主はここにいるようだった。恐る恐る、扉を引く。砂埃に顔をしかめつつ力をこめると、扉が開いた。

5．霊剣の求め

現れたのは、刃を下に、鎖によって岩盤から吊るされた一振りの剣だった。懐中電灯で照らすと、柄に幾つか意匠と思われる穴が開いており、それに鎖が通っている。古いものなのか、所々表面が腐蝕していた。

「……！？」

三歩ほど後ずさり、全体を照らし出す。無根拠極まることだが、脳裏に浮かぶ声の主がこの錆びかけた剣であることが、はっきりと分かった。

（意志の名の下に、吾が銘を示そう）

「……！！？」

距離はそのまま、電灯のカバーを持ち上げ、鎖で吊られた剣を凝視する。

理由も分からないのは不本意だが、彼に語りかけているのはこの剣であるのは間違いない。伝承に聞く、意思ある剣というものだろうか。思索にかまわず、それは語りかけてきた。

（吾が銘、ミルフィストラッセ）

「……」

剣が声も使わず語りかけてくるという極めて客観性に乏しい事態にただただ驚愕していると、剣は先を促してきた。

（？　御辺の名を聞かせてくれ）

「あ、ああ。……グリュク……カダン」

随分と古風な二人称だ。思わず口に出して名乗ったが、剣はこちらの心境などは読み取れないのか――もしくは知りつつ無視しているか――、淡々と先を繋げた。

（よろしく、グリュク・カダン。早速だが、奴はアヴァリリウス。妖魔世界の奥地に生息する巨大恐蜴＞きょうえき＜だ）

「……！」

一瞬、思わず自失する。

剣は不気味にさえずるどころか、彼らを襲った妖獣の名を特定してみせた。被りを振って、それに応じる。

「……名前はともかく、妖獣だなんてのは見れば分かるだろ。何で国境から離れたこんなところにいるんだ、そんなのが」

（恐らく、先の戦いで前線に連れてこられた個体が、何らかの事情でそのまま近辺で仮死状態となり、連れ帰られることなく今まで休眠していたのだろう。そして、御辺は与り知らぬであろうが、奴は動物の神経の働きを阻害する気体を分泌腺から放出する生態を持つ。御辺の国では神経ガスと呼ぶものだ。向こう側ならともかく、こちらの生態系でそんな代物に生身で対抗できる陸生動物は有り得ぬ）

神経ガスについては、魔女や妖魔を速やかに「倒し」、味方の安全を高める新兵器という売り文句で王国が盛んに広報を行っていることで良く知られていた。ただし、実態については機密が多く、どのようなものかを知る者は少ない。そんな兵器を身一つで生み出す怪物が実在するという言葉に、グリュクはただ戦慄した。

「……それが巡り巡ってサージャンたちを殺したってのか……！」

厳密に言えばサージャンはその死を確認した訳ではないが、とてもではないが確かめに行く自信はなかった。数日とはいえ行動を共にしていてそれなりに親しみも覚えていた者たちを襲った理不尽に、呻く。神経をやられたのでは、今際の際に何も分からなかっただろう。アヴァリリウスという妖獣にとっては、仮死から目覚めた空腹を満たすための当然の行動だったのだろうが、グリュクの胸中からはそのような取り澄ました視点は跡形もなく消えていた。悔恨と怒り、無力感が、己だけ生き残り、それに安堵してしまったという事実によって押し広げられてゆく。

（早速ではあるが、吾人の望みを聞き入れてはくれぬか？　その代わり、御辺の望みを聞こう）

「……？」

沈黙を肯定ととったか、剣は続けた。

（御辺には、吾人の主となるべき異能の才がある。吾人を帯びて、共に使命を果たしてもらいたい）

「……使命？」

（いかにも。時を越え、心と心を繋ぎ、牙なき者の牙となる使命）

異能の才とやらには触れず、ただ単語を反芻しただけのグリュクに、剣は律儀に説明してきた。もっとも、その言葉は今一つ要領を得ないが。

（まぁ、平たく言ってしまえば人助けであるな）

「こっちが助けて欲しいくらいだよ……」

（既に一度助けた。吾人の声は御辺のような者にしか届かぬゆえ、他の者たちは救えなかったが……探せば御辺のほかにも生き延びた

者が居るやも知れぬ、まずはそれを救うのだ）

剣は滔々とそう告げた。

どう反応すべきか分からないでいると、もはや耳に慣れてしまいつつある地響きが再開された。何が終わったのかは嫌でも分かる。

「……まだあいつが下にいる。まさかお前が飛んでいってあいつを斬り殺してくれるって訳でもないだろう」

（そのようなことはできぬ。吾人は常に才ある剣士と共になければ、力を出すことが叶わぬ故）

「待ってればあいつがどこかへ行ってくれる保証もないからな……」

剣に呼ばれ、死を免れ、こうして邂逅を果たしたこと。これが夢で無い保証など何一つ無かったが、グリュクは立ち上がり、剣に近寄って柄を握った。握る右掌に小さな痛みが走ったが、木の葉で切ったらしい。痛いといえば全身がそうだ。夢ではないという傍証くらいには数えてもいいかも知れなかった。

そのまま持ち上げて鎖をどうすべきかということに思い当たると、剣の周囲の大気が炙られたように揺らぎ、剣の表面の錆が、そして剣を岩盤にくくりつけていた鎖が塵となって音も無く落ちる。

グリュクは、刃を上に剣をかざし、半ば破れかぶれに呟いた。

「どうにかできるなら教えてもらおうか、ミルフィストラッセ」

ミルフィストラッセの説明によれば、魔女がその力を発揮するために、普通の人間――王国の定義するところの人類種――とどこが異なっているのかというと、それが「変換小体」と呼ばれる細胞小器官の有無なのだという。

全身の細胞に散在する変換小体が空間に存在している魔力の「線」に反応し、変換小体を内包する神経細胞によって増幅された魔力が可視領域にエネルギーを呼び出す。魔女たちはこれを魔法術と呼ぶそうだ。装甲艦であろうと爆沈し、超音速の飛翔炸裂弾さえも防ぐその威力を、グリュクも街頭における戦場からの映像放送で見たことがある。

そして剣によれば、魔女の血を引くグリュクにはそれを扱う資質があるらしい。成人するまで審問検査を免れたのは、王国の検査は血液検査で変換小体特有の蛋白質を試薬の反応の有無で検出する方式をとっており、何らかの原因で血中の変換小体が消失しているグリュクのサンプルは通過できたのだろうという。剣の発する声を聞くことができたのは、神経細胞の中で少数残存できていた小体が作用したためであり、本来は神経だけでなく、身体細胞のほぼ全てに変換小体が存在する。変換小体の活性を神経細胞以外でも維持することが出来れば、グリュクも魔女としての完全な能力を取り戻す。あくまで剣の言ではあるが、グリュクはそう理解した。

この場合、全身の変換小体を活性化する方法は分からないが、剣がその代わりを果たすことでグリュクは一応、２２歳にして魔女として存在を始めるということになる。何の武器も持たないグリュクが、生きて確実にこの場を脱出するにはそれしかないだろう。

（此度は、御辺はただ握っておればよい。主に対して申し訳ない限りだが、指示と魔力は吾人が提供致す）

「わかった」

剣の周囲の大気が再び揺らぎ、グリュクの体にその芯から温まるような、力がみなぎる感覚が訪れた。心臓、指先、脳、顔面……体の全神経を魔力が駆け巡っているのだ。魔女も、このように力強い感覚を得て力を振るっているのだろうか。剣がぼんやりと光り、周囲を照らした。

（よし、まずは奴の居場所を特定する。御辺、五感を合わせて研ぎ澄ませ。酔うなよ）

剣が告げるなり、グリュクが今までに体験したどの感覚とも違う、異様な光景が脳裏に飛来した。正確には光景だけではなく、よく分からない音や臭いまでが同時に感じられた。

新しい感覚に思わず狼狽し、今日一日だけで本当に生まれなおした気分を味わう。人が皆泣きながら生まれてくる理由があるのだとしたら、これがそうなのだろう。

「うぁぁぁぁぁぁぁ……！」

（落ち着け主よ。御辺は今までに無い感覚の窓口を開かれて混乱しているに過ぎぬ。それは第六の感覚！　魔力線に反応した魔女の神経が直接知覚している領域だ！）

「んなこと言われてもッ！！」

（奴は恐らく、久方ぶりの食事で満ち足りている。そのような心を探すのだ！　どんな生物であろうと、肉体を持つならば快・不快を感じる部分も共に持ち合わせている！）

「……！」

剣の示唆を受けて新たな感覚に徐々に慣れてくると、明暗に例えられそうな違いを感じ分けられるようになってきた。直感的には視界がぼやけて明暗の差が大きく、彩りが極端になった印象だ。そしてその中に、柔らかく光る大きな場所を見出すことが出来た。純粋な快、不快を目で観るように感じ取れるということだろうか。目を開けてみると、目と耳で視界と音を同時に感じ取るように、視界に視覚とは異なる感覚が重なって感じられることも分かった。

「これが、魔女の感覚っていうものか……？」

（いかにも。ただし、万能などではない。離れれば他の五感同様感じ取りにくくなり、然るべき方法で欺くことも出来る）

「……ああ」

懐中電灯のカバーを下ろして足元だけを照らすようにしながら斜面を登りおえた地点まで来ると、改めて第六の感覚に身を浸した。

大きな快の感覚――妖獣アヴァリリウスは、斜面の淵から５００ｍほど離れた森の中で休んでいる。元来夜行性なのだろうか、新しい感覚によって、四肢を曲げて瞼を閉ざしていても警戒を怠る様子は無いことが分かった。このまま斬り掛かったところで、普通剣一振りでどうにかなる相手ではないが――

「これからどうする」

（仕留めるのみ）

「仕留めるって……奴の毒ガスはどうすればいいんだ」

（剣をかざせ）

「こうか？」

（そう、そしてクルクル回して突風を起こし、すいません冗談ですううううううう）

グリュクは無言で剣の腹を、すぐ近くにあった岩肌に向かって何度も叩きつけた。

「これからどうする」

（ま、まずは吾人が術を発し、ガスを分解する。その後、動きを封じて確実に殺す。具体的なタイミングはその都度指示する）

「よし……」

（……折れるかと思った……）

冷や汗をかく剣をかざし、グリュクは妖獣に向かって斜面を下り

始めた。

（それでは……参る！）

気合と共に剣が術を発するのが分かる。どのような原理でガスの分解などということをやってのけるのかは知らないが、グリュクはそのまま歩いて進んだ。残り３００ｍほど、警戒を強めたのか、アヴァリリウスが首をもたげてこちらを凝視する。視野が重なる配置の両目で、まだ木々に隠れているはずのこちらを正確に見つめている。

（恐らく、音の他にも人間の目に見えぬ熱を感知しているのだ。今の吾人も人間の目に見えぬ光を放射して微量の残留ガスを分解しているが、奴が戦うと決めればこの比で無い量を分泌し始めるだろう。心せよ）

「ああ……」

残り２００ｍ。妖獣は既に立ち上がり、ガスで死なないこちらを警戒しているのか、ゆっくりと体全体をこちらに向けてきていた。斜面が終わり、グリュクも慎重に身構えながら歩いて行く。

アヴァリリウスが歩き出した。そのまま速度を速め、突進してくる。彼の心に深く爪あとを残した足音を響かせながら、比較的踏み固められているはずの山道に深々と足跡が残る。重量にして何百ｔか、その表皮の凹凸が体をかすめただけでも即死しかねない。

（そこまで！）

ミルフィストラッセの気迫と共に、妖獣の直下の大地が消失した。直径にして３０ｍ、深さもその程度はありそうな大崩落だ。ここに眼前の怪物を落とし、登れなくなった所を仕留めろということなの

だろう。だがタイミングが最悪だった。崩落の直前に妖獣は跳躍していた。非常に大きく、距離は３０ｍといったところか。ちょうど穴を飛び越え、グリュクを踏み潰す計算だ。

「そッ……！！」

一単語とて口に出せるはずもない刹那。

（なめるなッ！）

闘気と共に剣が更に術を発した。グリュクは思わず両手を突き出して防御するような動作をとっていたが、僅かならず時間が経過するのを感じて、戸惑いを覚えつつ姿勢を解こうとする。腕の動きが明らかに遅い。感覚だけは変わらず、アヴァリリウスまでもが空中に静止しているかのような状態でミミズの這うような速度でこちらへ漂ってくるのがわかった。彼の心を除く時間全体が強烈な遅延の中にあるようだ。

（神経の作用間隔を早めて擬似的に御辺に流れる時間を加速しているだけだ、今の内に討ち取れ！）

「（かわすんじゃないのかよ！？）」

剣の急き立てるような指示にうろたえ胸中で（舌も体同様ろくに動かせなかった）口答えをしながらも、彼を妖獣に向かって構える。

（心を凝らせ、刃を念じるのだ。奴の皮を、肉を、骨を！　眩く輝き、鋭く硬い金属が砕く様を！！）

主観では一分近い時間をかけての所作だった。グリュクは姿勢を下げつつ、ミルフィストラッセを頭上に向かって突き出し、アヴァ

リリウスの喉へと全力で刃を突き立てた。

（心せよ、神経の加速を解く！！）

「うぉおおおおおおおおおぉ！！！」

切っ先へと気合を込め、意図せず咆哮する。

時間と感覚が唐突に一致を再開した。いや、全身が緊張した影響もあってやや効力が残っているか。体を屈めて前半身の直撃は逃れたが、このままではその後方に着地する後ろの半身に踏み潰される。グリュクは全力でミルフィストラッセを支えつつ、左へと転倒し、何とかそれも免れた。

大音響と共に巨体が頭から墜落し、喉から胸部を深々と切り裂かれた妖獣は赤い血液を大量に撒き散らしながら――滴るなどといった生易しい量ではない――転倒し、周囲を揺るがした。

剣が一際強く力を発する。妖獣の死体がすぐそこにあるので、ガスを分解するという光を強めたようだ。

グリュクは多少の擦り傷以外に特にそれらしい創傷もなく、血の臭いの立ちこめる崩落の淵でアヴァリリウスの最期を見ていた。体内には、まだいくらか原形を残した犠牲者たちがいるのだろう。そのような身の毛もよだつことを想像しつつ、斜面の上から魔女の感覚で感じ取った「満ち足りた心」の印象が、頭から離れなかった。確かに、妖獣は獣なりの幸福を感じていた。例えほぼ一方的に奪われた命の数を勘定に入れても、一つの合計欄に差し引きされた結果が出てくるほど彼は単純ではなかった。

ただ、緊張も思弁も、続けるには限度がある。剣の囁きがそれを破った。

（主よ、血を落とした方が良い。土でも構わぬ）

「か、返り血か……うわ、ベトベト……」

全身を見回して、グリュクは呻いた。思った以上に血生臭い有様だ。先ほどまででさえ小さな創傷ならばそこかしこに出来ていたが、それどころではない。理由はあるとはいえ、一つの生命を殺したのだからと納得もしていたが――

（急げ！　魔女たちの間では知られているが、妖獣の血液は変換小体が多量に含まれていて、魔女が量を浴びると魔力線中毒を引き起こす可能性がある！　その量でも十分――）

「中毒？　……っていうのは……今の、このっ……頭痛、の……」

焦燥の滲む剣の言葉で思い出したかのように、体内から直接金槌で叩かれるような激痛が全身を駆け巡る。

グリュクが知り得ないことだが、原理としては皮膚に付着した血液中の変換小体が周囲の魔力線に感応することで、彼の神経細胞内の変換小体と共鳴に近い反応を起こし、神経を直接刺激している故の痛みだった。

「うぁ、ぁぁあぁぁあぁぁ……」

（主、主よ！）

苦痛の余り、彼の意識はそこで途絶えた。

広がった血の海に倒れ伏し、剣がその手を離れ、小さな音を立てて同様に血溜りを撥ね散らす。

夜はまだ、明けていない。

6. 出発

粥の煮える匂いで目を覚ました。

土の上で終わっていた最後の記憶と体を包む温もりとが違うという違和感も手伝って、うろたえるように脳が覚醒する。頭だけを動かして周囲を確認すると、天井は暗いが、闇ではなかった。右手の扉の窓から光が漏れていて、広くは無いがそこそこに調度も整った室内であることが知れた。服もどうやら、野戦服ではない。血のにおいなど微塵も感じられなかった。

近づいてくる足音と共に、扉が開く。

そして入ってきた姿にはどこかに見覚えがあったが、とりあえずは若い女だということしか分からなかった。年齢は恐らく同程度、背中の中ほどまで伸ばした黒髪をうなじで束ね、晒した額の下に銀縁の眼鏡。背こそ高めだが、街にいたなら目立たないタイプだ。両手に食事とランタンの載った盆を支えている。僅かに頭痛が残っていたが、グリュクは構わず上体を起こした。

僅かに空気を吸って、女が言葉を発する。

「お目覚めですか？」

「あ、ああ……」

一先ずはそう答える。そう呻くことしか出来なかったとする方が正しいが。彼女は盆のランタンを持ち上げ天井から垂れ下がっていた吊具に掛けると、盆を差し出しながら名乗った。

「アニラ・リオーリと申します。こちら、どうぞ」

「あ、どうも……ありがとうございます。俺は……グリュク・カダン」

グリュクは出された盆を受け取り、彼女、アニラに礼を言いつつ名乗り返した。盆の上には刻んだ野菜と炒り卵の混じった粥の皿と、香ばしさを漂わせる茶らしきカップ。

茶が彼の見慣れない緑の色をしていたが、グリュクにはそれよりも気になることがあった。

「あ、あの、俺の服とかは……」

「すみません、おおっぴらに出来ないので全部私が……」

彼が今ベッドの中で着ている服は、清潔にされた一般的な男物。得られた答えに、グリュクは感謝とともに少々の恥ずかしさを感じて僅かに彼女から顔を背けた。

慣れていることだったのか、そういうことに元から頓着しない性分であるだけか、アニラは特に気にした様子も無く、話を振ってくる。

「従士選抜に参加されていましたよね？　私の顔は記憶に無いかも知れませんが」

「……あ！？」

思い出して思わず声を上げてしまう。列車から降りて駅を出た選抜志願者たちに移動するよう告げたのが、確かに彼女だった。

「思い出して頂けたみたいですね。普段はあの補給基地に勤務しております」

「あぁ……てことは、ここは……俺を基地に運んでくれたってことですか？」

「いえ、ここは基地ではなくて、私の村で遠出の時や、狩りの時とかに使っている小屋です。あのあと休暇で村に帰っていたんですが、大きな地響きがあったので何人かで祠を確かめに行ったら……」

「祠……？」

食事に手をつけようとしていたグリュクの手が止まる。

「ええ――」

彼女は、ベッドの下からミルフィストラッセを取り出して渡してきた。

「村の祠でこちらの霊剣さまをお祀りしておりました」

「すみませんでしたぁぁぁッ」

「え、えーとですね……」

要はこの剣は彼女の村の神格か何かだったということで、グリュクはそれを、状況打開への必要や剣本人の求めもあったとはいえ勝手に盗んだことになる。粥に額が付かんばかりの勢いで何度も頭を下げるグリュクに、アニラは困惑したようだがそれでも言葉を続けてくれた。

「祠を確かめに行ったら、妖獣と、その近くの血の海で倒れているあなたと霊剣さまを見つけまして……今は居りませんが、他の村の者と一緒にここまでお連れして、霊剣さまにはこちらで鞘を見繕ってつけてしまいました。ご勝手お許しください」

霊剣の収められた鞘をこちらに渡してくる彼女に、ただ困惑する。

「え、いや、勝手はむしろこっちで……」

（主よ慌てるな）

受け取った剣は何事も無かったかのように語りかけてきた。状況

が飲み込めずに鞘に収まった剣を見ると、上等そうな剣帯まで付いている。暢気な剣にやや苛立つグリュクを見て、彼女はややおかしそうに語り始めた。

「大きな声では申せませんが、この王国東部は歴史的には魔女の勢力が強い地域であって、過去の戦争で帰属が変わることが多かった経緯は、ご存知と思います」

「は……はい」

アニラが説明をしながらも身振りで食事を促したので、グリュクは匙を握って粥を啜った。

「私の村は、魔女の血を引く者こそいませんでしたが、古来からその強い影響下にあり……魔女を憎まない文化を今もひっそりと持ち続けているのです。この心を持つ剣、村では霊剣さまと呼んでいますが、大昔に偉大な魔女の一人が鍛え上げたといわれているもので……魔女を友と思いこそすれ魔女ではない我々としては、いつか相応しい魔女がこの土地に現れ、霊剣さまを……言い方は悪いですが引き取ってくださるのを待っていた訳です」

（病で力尽きた先代の主を匿い、世を去るまで世話をしてくれたのが彼女の村なのだ。ただし、辺境の村といえど審問の手が及ぶゆえ、かような山中に置かれていたという次第だな）

「ほぅん……」

話は聞きつつも勢い良く粥を啜っているのでまともに反応できないグリュクに、ミルフィストラッセが補足を入れる。

「どうですか？　霊剣さまは何か仰っておられます？　私たちには分からないので……」

「……霊剣さまねぇ……」

（それを御辺はぶっきらぼうに剣、剣、剣と……この際宣言するが、吾人はただの剣ならぬゆえ、そのような呼び方は不本意極まる）

アニラの”霊剣さま”などという呼び方に胡散臭そうに匙を置くグリュクに、剣――否、霊剣――はそのように述べると、心なしか不機嫌になったような気配を見せた。

「えーと、お供え物ありがとうって言ってる」
「良かったー」

手元の霊剣が猛烈に抗議しているのが分かったが、グリュクは無視して茶を飲み干した。
心を持つ剣。真剣な状況でたちの悪い冗談を差し挟むのも、心あればこそということなのだろうか。

「ごちそうさまでした……おいしかったです」
「どういたしましたー♪」

グリュクは礼と共に盆をアニラに返し、

「ていうか……俺……どうすればいいんでしょう」
「え、どういう……ご事情でしょうか？」

事情を知っている筈が無く、アニラは意外そうな表情でこちらを見ている。

「……話してませんでしたね」

グリュクは疲労が体の奥から引き返してくるのを覚えつつ、アニラにこれまでのことを平易に、少々曖昧に話した。

話し終えても、仔細を想像して彼の今の状況に共感しろというのが無理な話だろう、アニラは実感が沸かないという様子で軽く首を捻っている。

「大変だったんですね……今からでも基地に戻るべきかしら」
「あぁ……人手が無いとあの事態の収拾は難しいだろうっていうか……曲がりなりにも魔女になった以上、俺は何としてもトンズラしなきゃいけない訳ですが」
「どうしましょうね……私の村にも審問官は来るので、部外者のグリュクさんがいたらすぐバレちゃうでしょうし……グリュクさんは何か目的とかが？」
「……ぇーと」

就職予定先は大事件でそれどころではなく、またついでのアクシデントによって就職に大幅不利な体質になってしまったといえる。何も言えずに固まっていると、アニラは少々大げさな身振りで、

「てことは、何も考えてないってことですか！？」
「いや、はい、そうなんですが……」

ふと、扉を叩く音が耳に入った。

「すみませーん！　ガフェシ基地の者ですが、エチェ村の仕事小屋と聞いております、お時間頂けないでしょうかー！」

声の雰囲気から察するに、アニラとは無関係に、周辺の村での調査に訪れた軍人らしい。既に事件の調査が進んでいるのだろう。慌ててベッドを抜け、剣を帯びて開けた窓から身を乗り出すグリュクに、アニラが小声で呼びかける。

「ぐ、グリュクさん、荷物！　洗った服とかも入ってます！」
「あ……どうもありがとうございます、こいつも礼を言ってます」
（まだ言っておらん！？）
「そんな……でもお気をつけて！」
「はい、お達者で！」
（さらばだ！）

彼も余り大きな声は出せなかったが、精一杯感謝を述べた。やや名残惜しさはあったが、もはやスウィフトガルド王国には居られない。グリュクはアニラから荷物を受け取ると窓から飛び降り、大きな足音を立てないように注意しつつ小屋の裏道を走りだした。室内で時間が曖昧だったが、やや遅い朝といったところか。晩冬の冷え切った空気が首筋に沁みた。

数歩も歩かないうちに道を詳しく聞けずに出てきたことに気づき後悔したが、すぐに舗装された道に出ることが出来た。
路傍で背嚢の中味を確認してみると、背嚢自体も最低限の洗浄を済ませて乾かしてある他、食料や簡易医療キットにライター、ナイフといったほぼ全ての支給品が入っていた。懐中電灯も、配布時同様だ。一度血まみれにはなったが切れた電池を交換すれば動くだろう。アニラの非常に丁寧な仕事に感動を覚えてグリュクは胸中で呟いた。

「（こんなことにでもならなきゃ嫁に来て欲しかったかもなぁ……）」
（惰弱……吾が主の人生にそのような無難なプランは容認しがたいのだが！）
「実は考え筒抜けかよ、ふざけんな！！」

もはや難癖の次元に差し掛かった霊剣の陳情に厳重な抗議を突き返し、山道を歩き続ける。とはいえ、詳細こそ聞いてはいないが、陸上騎士団の従士選抜の志願者が国内に入り込んだ妖獣に大量に殺害されるという前代未聞の事件の現場の、さほど離れていないところで騎士団支給の背嚢を背負っているのは不自然かも知れない。

（所で、良い知らせと悪い知らせ、どちらを先に聞く？）

「え……じゃあ、悪い知らせから」

（御辺は今や、完全に魔女と化しつつある。妖獣の血液を浴びた刺激で、全身の細胞に変換小体の分布が復活を開始した。もはや曲がりなりにも、といった次元ではない）

「……良い方は？」

（吾人がこれから、御辺を霊剣の主に相応しい魔女へと教育致すことが決定した）

「それはどっちも悪いニュースって言うんだよ！！」

（むう、何を言うか。そもそも吾人は……いや、今はいい。それよりも、御辺はこれからどうするのだ）

「……お前の希望とか、ないのか？　一応命の恩人だし、無理なことでなければ聞くよ。ただし魔女教育以外」

グリュクは言ってみた。念じても通じるようだが、やはり話すには口を動かさないとこちらの調子が合わないらしい。

霊剣は相変わらず、彼の精神に直接語りかけてくる。術が使えるなら音声を発振しても良さそうにも思えるが、剣にしてみれば声を誰かに聞かれてはまずいのだろう。

（……主の記憶は我が記憶、なれば御辺の幸福こそが我が幸福よ。しかし、もはや魔女は徹底して排斥されるのがこの地の概ねの有様である。血を引く、素養があるというだけでな。執拗な検査は既に終わっているが、何をきっかけに発覚するか分からぬ。不本意なが

ら、吾らが日々を送るには出国しかあるまい。まずはそれを希望しよう）

「出国って……公式にいける国はどこも啓発教義の国だろ。ベルゲに行けっていうのか」

（いかにも。吾人は昔魔女の手によって生み出されたという次第もある）

「そういえばそんなこと言ってたな」

ベルゲ連邦は、啓発教義を奉じる王国とその影響下の国々に敵対し、啓蒙者たちに汚染人種として絶滅目標として指定を受けている国（正式には、啓発教義連合も啓蒙者たちも国家と認めていない「東部叛乱勢力地域」）である。ミルフィストラッセの記憶に拠れば、教会資本による主要メディアで主張されるような不合理と呪術の支配する未開の地域でもないらしい。確かに、それが事実であれば衆生の囁く通り、真理と栄光のスウィフトガルド王国は屎尿の魔力や砕いた黒焼きを混ぜ込んだ軟膏といったもので戦艦を落とそうとするような呪術主義者たちを相手に苦戦しているということになる。

しばらく道の両側を木々が遮っていたが、不意に右手の森が開いた。山の空気に、雲間から差し込む陽光が清々しかった。見下ろせばやや狭い盆地が広がっており、遠くには自動車向けの幹線道路や西部に向かって伸びてゆく高圧鉄塔の列、遠くに見える鉄道の他はただ林や耕地が広がっている。

北に少し離れて窺える流れは、ベルゲ連邦から流れているカフ川だ。顎に触れると、むさ苦しく伸びてきた髭が嫌でも分かってしまった。深く息を吸い込み、霊剣に問う。

「そういうことなら、当面は緩衝諸国を抜けてベルゲを目指そうと思うんだが、それでいいか？」

（出国幇助者のコミュニティで情報を集めるべきか。吾人も密出入国に関しては多少の記憶があるが、現代でも通用するのかどうかは

分からぬ）

「金とか要るのかな」

（そういえば御辺、すっからかんであるな）

「食い詰めてたんだから当たり前だろ……」

毒づく。鞘のままの饒舌な剣で脇に突き出ていた三角点を軽く叩いて制裁を加えると、グリュクは再び歩き出した。

6．出発（後書き）

これにて、第１話の完結です。
ご意見・ご指摘・ご感想をお待ちしております。

※１１／１３：血液の浴びすぎで本格的な魔女化が開始した旨を加筆。
この箇所は自分で合点していただけで全く説明していませんでした。
齟齬を承知でお読み頂いた方には大変申し訳ありません。

1．魔女との邂逅

刃を研ぎ澄ますもの、黄金で畝を彩るもの、子を産み育て、導くもの。
それら全ての礎こそ、信仰である。
領域の汚染を浄化し、携挙までの下地を作るべき、信仰ある人々。
近づきつつある栄光の世界、面映き宝貴の国家、成すの全ては、
血を恐れず、肉を惜しまぬことによってこそ。
歩く人々よ、信仰あれ。
悪しきそれらよ、絶滅あれ。

――聖典より抜粋。

強く赤みがかった髪色の男が、夜明けも近い街道を歩いている。
年の頃は二十代前半、丈は少々高く、背には大きな深緑色の背嚢を負っていた。厚手のマントを羽織り、足取りは確か、目じりはやや垂れ気味だがこちらも確かに前を見ている。
街道は山地の谷間の川沿いに敷かれたもので、さすがにここまで東の辺境ともなると整備も行き届いておらず、むしろ所々に舗装が残されていると形容したほうが良い。当然電灯などもないのだが、それでも字のかすれて消えかかった案内標識が時折顔を出し、彼が確実に東部の緩衝諸国に向かっていることを教えてくれた。

（ソーヴル村この先十二キロメートルなり）

彼の脳裏に、彼の紡いでいない言葉が浮かぶ。だが、彼は対して気にした様子も無くぼやいた。

「まだ歩くのか……」

着く頃には日も昇っているだろう、グリュク・カダンは嘆息し、それでもとぼとぼと薄暗い夜明けに歩みを進めた。東部は宿場町も少なく、野宿を嫌った彼は昨晩から強行軍で歩いていた。気候の関係で雪こそあまり降らない大陸中央台地だが、冬の寒さは緯度に比べて中々に厳しく、一日でもっとも下がる夜明け前では零下に迫るほどだ。街道はまだまだ広いが、左右の森は樹木の背も高く、かなり鬱蒼としている。

ふと気になって森の中に注意を向け、そろそろ慣れてきた魔女の感覚を思い起こす。

周囲に敵意が八つ。距離を置いた相手の大まかな心理状態を読み取るのは数日前のとある事件で出会った、今腰に下がっている霊剣に習った技法で、これまでの道中で武装商隊の幾つかとすれ違った時に――その時背嚢の中身をほとんど売り払い、その金でマントや替えの懐中電灯を買った――霊剣の助言に従い練習したものだ。その甲斐あって、ある程度ではあるが他者の感情の流れを把握できるようになっていた。

大まかには、敵意の中に、僅かな歓喜。獲物が、つまりグリュクが彼らに気づいていないと考え、そのことを肯定的に捉えており、すぐにでも取り囲む――あるいはその場で殺す――準備が出来ているということだろう。そして狼の群と人間の強盗は、気配の地面からの高さがやや違うことで区別できた。数は八人。恐らく、野外強盗だろうとグリュクは見当をつけた。

（主よ、気づいているとは思うが、このまま襲わせて一網打尽にするぞ）

「（正気かよ……）」
（正気なり。容易いことだ）

霊剣の提案に、グリュクは嘆息した。彼が腰に帯びている剣、その名も――いや、その銘も、か――霊剣ミルフィストラッセが、彼の精神に直接語りかけているのだ。だが、彼と霊剣の性格には今の所少々の齟齬があった。

「（一網打尽って……まさか全員返り討ちにして道に血の海でも作る気か）」
（それは鮮やかではない）

訝るグリュクを他所に、霊剣は術を構成し始めた。鞘の中の剣に強い力が集まり、同時にグリュクの神経に、痛みと似て非なる刺激が走る。霊剣がグリュクの魔力を消費しているのだ。彼の全身の細胞に存在する”変換小体”によって空間に存在する魔力線から取り出されたエネルギーが、超自然の力となって発現している。本来であればこの地では存在を許されない魔女の力、”魔法術”だった。彼が事故で魔女となってからまだ一週間と経っておらず、グリュクはいまだ慣れない感覚に歯噛みしつつ、霊剣が術の構成を終えてそれを解き放つまで魔力を提供した。

術が発動する前に、左右の森から飛び出してきた二人の男が前途を塞いだ。人間という見立てが当たったことに仄かな上達の喜びを感じたグリュクだったが、さすがに表には出さずに相手をざっと観察する。

全身を防寒着で覆っており、この寒い夜明け前に強盗行為に及ぼうとしているという説得力だけはあった。同時に魔女の感覚で、振り返るまでもなく後方左右から出てきた二人の男に後方を塞がれたのが分かった。四人は森の中で後詰なのだろう。

リーダー格らしき男が無言の身振りで金品などを要求する仕草を

見せるが、グリュクが何かを言う前に霊剣の術が開放された。緩やかな力場がグリュクの周囲に生成され、男たちに暴力とは異なる決定的な影響を与えるのが見て取れた。原理的な部分までは彼の知識では知り様の無い所だが、力場の作用で彼らの脳の神経電位を低下させ、強制的な昏睡状態に導いているのだ。男たちは抗いがたい睡魔に襲われたように或いは膝を突き、或いはよろめいてゆっくりと倒れていった。森の中の四人も同様のようだ。

「……死んだ訳じゃないよな」

（よしんば死んだ所で、此奴等は旅人を襲って糧を得ようと目論んでいたのだ。反撃を受ける覚悟をしていなかったのであれば、遊び半分で狼藉を働く痴れ者、知ったことではない）

「お前もずいぶん厳しいね……」

倒れた男たちを見回し、霊剣の少々手厳しい言い方に難色を込めて呻く。死んでいれば今のグリュクには脈などを取らずともそれが分かるようになっていたが、八人を即座に制圧してみせる霊剣の非破壊的、かつ圧倒的な能力には驚きを隠せなかった。

まだ連れ立って一週間と経っていない間柄だが、彼にもこの霊剣という得体の知れない器物の性格――いや、人格か――が分かって来た気がしていた。基本的には古臭い性向を持ち、自分を吾人＞ごじん＜、グリュクを主＞あるじ＜、或いは御辺＞ごへん＜などと呼ぶ。冗談を言う側面があるかと思えば、今街道に転がっている暴漢たちのような相手には非情を隠さない。人を陥れて喜ぶような性格でも困るのではあるが。

「ていうか……どうするの、こいつら。端っこの藪に転がしとくか？　熊とか出なきゃいいけど」

（他にも仲間がいないという保証はないが……とりあえずはそうする他あるまい。御辺がもっと術に長じておれば、此奴らを小さく縮

めて背嚢に詰め込み、近隣の警察施設に連行して換金などの措置が取れたかも知れぬが……）

「そんなお伽話みたいなことが出来るのか魔法術ってのは……」

霊剣がぶつぶつと彼の精神に対して呟いた内容にやや興味を示すと、この饒舌な剣は好機と見たか説教を始めた。

（いずれは吾人の知る全て、歴代の主たちの知り得た術の秘の奥底までを、御辺だけでも扱えるよう伝授してゆくゆえ、ゆめ忘れるな）

「……まぁ、これから行く場所で馴染みたきゃ出来るに越したことはないんだろうけどなぁ……」

現在グリュクがいる場所はスウィフトガルド王国に属しており、先の事故で魔女として覚醒してしまったグリュクはここから更に東の魔女たちが作った国、”ベルゲ連邦”を目指している。もっとも、その前に”緩衝諸国”と呼ばれる、王国と連邦それぞれの思惑で作られた国家群が位置する一帯を通過しなければならないのだが。

四人を道端の藪の中に放り込むと、グリュクは再び歩き出した。見れば先ほどまで曙光だけだった彼方の稜線から、太陽がすっかり全体を現し終えていた。

そして、およその見立てどおり三時間ほど歩いて、グリュクはようやくソーヴルに辿り着いた。

ソーヴルはまさに寒村と言えた。日差しこそ暖かだが、大気は冷たい。街道もそうだったが、道の端の方を歩けば霜柱がザクザクと音を立てて崩れてゆく。

山がちな王国極東地方の中では居住に向いていたので開拓されたのだろう、谷間に広がる広い針葉樹林の中で村全体が東に向かって

緩やかに傾斜しており、周囲には畑が広がっていた。春になれば小麦の芽が出るはずだ。

小規模な村ながら家はしっかりとした石造りが大半で、苔むした井戸やくすんだ漆喰がそれなりの歴史のあることを窺わせた。太陽は既にすっかり昇っており、小規模な村では尚更なのか、村民の殆どが起き出して活動しているように思える。家の数などからして、人口は五百に届くかどうかといった所か。

ただし、少し歩くとグリュクから見て村の反対側に、何やら畑でもない土地が開けているのも見えた。建設機械などが首をもたげて停めてあるところを見ると、これからあちら側の開発が進むということなのだろうか。

少し歩くと傾斜が止まった踊り場のような小さな広場に小屋が建っており、近づくと老爺が退屈そうに構えているのが見えた。どうやらこれが、小規模ながらも関所のような役割を果たしているらしい。

「あの……」

「……あー、どなた？」

グリュクが声をかけると、彼は顔を上げ、やや神経質そうな甲高い声で返事をした。

「旅の者です。村に入っても構いませんか？」

「あぁ……まぁ、くつろげる保証は出来ないんだけどね」

「？」

（主よ、何か来るぞ）

霊剣が囁くと同時に、グリュクにも音が聞こえた。魔女の感覚を使ってエンジンの熱を感知などせずとも、自動車と分かった。見れ

ば運送用に座席を減らして荷台を取り付けた形式で、幌などはなく剥き出しの荷台に銃を携えた男たちが六、七人ほど乗って座っている。銃はほぼどれもが連射式らしく、銃把ではない細長い部品や弾帯などでそうと見て取れた。少なくとも、狩りではない。人数はともかく、こんな重武装で行くのは熊が相手だろうと大袈裟過ぎるはずだ。

そんな物々しい自動車が小屋の前で停車すると、運転席から男が顔を出した。体格は大きく、こんな冬の朝でも薄手の上着の袖をまくり、毛深い前腕を車窓の枠に掛けている。顎を覆う髭が蠢き、老爺に告げた。

「それじゃ爺さん、討伐隊出発だ、村から出して構わんよな?」

「……あぁ、気をつけるといい」

「ありがとよ! じゃあな」

男はそのまま窓を閉めようとしたが、こちらを見て、グリュクにも尋ねてきた。

「あんたも魔女討伐の話を聞いてきたのか?」

「……いや」

(討伐だと?)

「そうか、ならいいやな……邪魔したな!」

そう言うと、今度こそ運転席の窓を閉め、男は自動車を発進させた。車体は再び傾斜を始めた坂を駆け上がり、稜線の向こうへと姿を消した。

「……魔女討伐って、どういうことですか?」

「あー……えーとねぇ……」

グリュクが老人に尋ねると、彼は何か不都合があるのか、言葉を濁した。

「私を立ち退かせたいだけよ、あいつらは」

「！」

グリュクが突然の背後からの声に振り向くと、女が立っていた。歳の頃は彼よりやや上か同程度、ブラウンに赤みがかった程度の彼のそれより格段に鮮やかな長い紅色の髪が陽光を反射し、燃え上がっている。

脛の中程まで届く黒いローブに、同じ色のつばの広い三角帽、そして何より、手に携えた大柄な箒。

飛来した女は、紛うことなき魔女という出で立ちをしていた。

2．魔女と魔女

老人が驚愕して、彼女――紅髪の女に向かって身を乗り出した。

「ゾニミア！？　来ちゃいかんと……」

「大丈夫、すぐ戻るから」

彼女は老人に向かってそう言うと、グリュクの帯びた剣を指して続けた。

「私はゾニミア・フレンシェット。この村の近くに住む魔女よ。あなたも、魔女みたいね？」

「……ああ。グリュク・カダン」

魔女相手ではうまく働かないのか、魔女の知覚による大まかな心理状態の把握が出来なかった。分かったのは、ゾニミアと名乗る魔女が村にやってきたという事態と、グリュクも魔女であるという事実にどれほど驚愕したのか、老人が呆然として何もいえず固まっている、ということだけだ。

さほど誉められた性質ではないと思っていた技能に思わず頼っていた己に少々の嫌悪を感じつつ、表情や物腰などから、彼はこの魔女に敵意がないと踏んで名乗った。

「君……」

「ゾニミアでいいわ、そっちのあなたも」

（うむ）

魔女は、彼の帯びた霊剣さえもを意識しているようだ。

「ゾニミア。この村がどうなってて、君とどういう関係なのかよく分からないんだけど」
（吾人も教えて貰いたいのだが……構わぬか？）
「いいわよ。ま、さすがにここで立ち話も何だから……私の家に案内するわ？」

ゾニミアには霊剣の声もしっかり届いているらしい。どちらかと言えば、魔女が相手であれば霊剣は声を届けることが出来る、と表現した方が正しいか。

ミルフィストラッセがグリュクに同調すると、ゾニミアは箒にまたがり、やや北東の方角を向いた。

「ちょっと遠いから、私の後ろに乗った方が早いわよ？」
「ああ……ていうか、乗れるの？」
「ちょっとスピードは落ちるけど、余裕よ」
（それではお言葉に甘えるとしよう）

グリュクが、恐る恐る彼女の後ろ、箒の穂の根の部分に跨ると、やはり箒は箒なので体が接触せざるを得なかった。だが、箒の上でどう位置を落ち着けたものか悩む前に、箒が浮上した。上方への加速度が体を箒に押しつけてバランスを崩しそうになり、ゾニミアの両肩に手を置いた。

「うわ、浮いた！？」

グリュクが驚きながら何とかゾニミアの肩にしがみついていると、やや気だるそうにゾニミアが告げる。

「肩は箒繰りがやりにくくなるから、出来れば後ろからお腹のあたりに抱きつく感じでお願いしたいんだけど」

「そんなこと出来るかっ！？」
「半分は冗談よ。でも落ちそうになったら構わないからね」

そんな事々を言い交わしつつ、ゾニミアの箒は樹冠すれすれを高速でかすめて飛んで行く。この場合は木々との距離が近いから尚更速く思えるのだろうが、グリュクは相当に冷や汗をかいた。何せ、ゾニミアの肩に掴まっているとはいえ、彼が体重を預けている本質はこの箒なのだ。ゾニミアがどうやって重心の平衡を保っているのか、魔女になって五日目にして箒の操作などとは無縁だったグリュクには想像もつかなかった。

（主よ、吾人は少々情けないぞ）
「うるさいッ！！」

成り立てとはいえ魔女がこの体たらくというのは、霊剣としてはさすがに落胆するものなのかも知れないが、小言をぶたれて子供じみた反応をしてしまう。

「あはははは、仲がいいのね」

ゾニミアが屈託なく笑うと、かなり遠くまで飛んできた箒は速度をゆるめて降下を始めた。森の中のわずかに開かれた土地に、小屋が建っており、煙突からは煙さえ出ている。彼女が箒を着陸させると、グリュクは足を降ろそうとして盛大に転んだ。

グリュクは不貞腐れながらも、ゾニミアの差し伸べた手を取って立ち上がった。

「気になるんだけど……さっき、討伐団っていう人らが……」
「あー、見てたわ。どうせここまでは来られないから大丈夫よ」
「そんなに道が厳しいのか？」

「そんな場所に住んでたら村の人が来られないでしょ」
「村の人って……」
（主よ、よく見るのだ）

霊剣がそういうときは魔女の知覚を使えということだ。グリュクは素直に第六の知覚を開いた。ゾニミアも魔女であるなら同じものを感知できるのではないかという疑問が募る。自分の感情の流れが筒抜けになっていたりはしないだろうか？

そういった雑念を振り払えずに”見る”と、小屋の周囲に熱した鍋の中の水の揺らぎのように立ち上る何かが感じ取れた。

「見えた？　とりあえず顔見知り以外は別の道に通すようにしてるだけなんだけど」
「そんなことも出来るのか……」
「何か、君って魔女っぽくないわよね。見習いって感じ」
「……それは……五日前になったばっかりだし」
「はい？」
（主よ、今回は吾人が説明できる故、そう致そう）
「あぁ、頼むよ……」
「あー、それと！」
「は、はい」
「井戸を使っていいから、体くらい拭いてきなさい。ちょっと臭うわよ」
「はい……」

説明は後ほど霊剣に任せることにして、グリュクはゾニミアの案内で小屋へと踏み入れた。小屋の中は簡素な作りで、外から類推できた通り間取りも単純だった。客間などはなく、玄関を入ると正面が厨房を兼ねた食卓部屋になっていた。

「おかえりなサマンサ～、ゾニミアさーん」

誰もいないと思っていたのだが、男の声が聞こえてきた。家族か恋人などと一緒に住んでいるのだろうかと推測したが、実際に彼らを出迎えたものはかなり趣が違っていた。

厨房から出てきたのはゴム玉だった。やや大きい。これまでに全く経験がない形状の物体だったため、その像を脳が捉えるのに少々時間が必要だった。

よく見ると、そのゴム玉には顔が付いていた。いや、ゴム玉ではない。やや空中に浮いている。正確には浮いているのではなく、下部に生えた二本の突起で直立している。人間の頭部だけをもぎ取って造作を単純化し、耳に当たる部分から親指に似た形状・大きさの器官を一本ずつ、そして首筋に当たる部分から同様の物を二本生やし、仕上げに眼鏡を掛けさせるとこのような造作になるだろうか。要は、そういったものだった。

「って、ちょっとあなた誰ですか!?　私とゾニミアさんの愛の巣に上がり込んでーー」

「愛の巣とかいうなーッ!!」

「おげぇぇぇぇーーッ」

ゾニミアが全力で振り回した箒で打つと、抗議の声を上げていたそれは悲鳴を上げつつ盛大な勢いで厨房へと吹き飛んでいった。

「今吹き飛ばしたのが居候の妖族、フォンデュさんよ」

「ああ……そうなんだ……」

ゾニミアは箒立てに箒を立てかけると何事もなかったの様に厨房に入り、グリュクも、半ば放心しつつもそれに習った。

大陸東部の妖魔領域に住む、ある程度以上の知性を持つ種族を妖

族と総称する。グリュクが伝承などで聞き知っている妖族は、美女の血を啜ったり怪力で山を一つ動かしたりといった、どちらかといえばその驚異を強調されたもので、厨房の片隅でハンカチを噛みながらさめざめと涙を流す小さな生物とは容易には結びつきがたい概念だった。人間同様ピンからキリまで、ということなのだろうが。

「うぅ……ゾニミアさん酷い……こんなにあなたに尽くして来た僕を居候扱いなんて……」

「あなたが私の研究をまともに手伝えたことなんてただの一度もないでしょフォンデュさん……それは居候というのよ」

（たった二人で賑やかな……）

霊剣すらも感心したように呟いている。ゾニミアはといえばそんなことは全く無視して、焜炉の薪に火を付け（恐らく魔法だ）、鍋を温め始めた。

「あ、フォンデュさん薪の補充お願いね」

「は！　はいはいただいま～っ！！」

泣いていた妖族はそう言われると笑顔で立ち上がり、恐るべき速度で裏口から外へと駆け抜けていった。

やはりそれを無視して、ゾニミアはグリュクに席に就くよう促した。二人用の小さな卓と小さな椅子。普段片方はあのフォンデュと呼ばれた妖族が立っているのだろうか（あの体型では座ると卓に口が届くまい）。霊剣を剣帯ごと外し、壁に立てかけてやや遠慮がちに椅子に座ると、彼女は鍋をかき回しながら話を始めてきた。鍋の中からバターや獣乳を熱した香りが鼻に届く。

「じゃあ、まずは私の事情の説明からかな……何て言ったらいいのかな」

語る所によれば、ゾニミアはそもそもはベルゲ連邦の出身で、家の倉で発見した権利書が、ここの物だったのだという。調べた限りでは権利も失効しておらず、七年前から出入国を幇助する地下業者の助けを借りてここに移り住んだのだそうだ。住民は魔女に対して特に敵意も持っておらず、魔法によって物事を手伝うようになってからはむしろ好意的な関係になった。

因みに、妖族のフォンデュは入国時に何故か着いてきたのだという。最辺境とはいえ、魔女を排除する掟が支配する王国で、妖族などはもっと住み辛いはずなのだが。

「審問か軍隊が来るかとも思ったんだけど、ちょっと事情があって、郡庁が色々黙っててくれるのよね。村の人は基本的に庇ってくれるし」

「それでか……」

それならば、村の西の入り口の小屋での老人の台詞も腑に落ちた。村の外から来たグリュクが、彼女の存在を外に漏らす可能性を危惧したのだろう。

「でも、そうなると何で今頃討伐隊なんかが組織されたのかが分からないな」

「えーと……村にあった重機は見た？　沢山あったと思うけど」

「見た」

「あれ、夏に王都から来たっていう金持ちが、近くに鉱山を開こうとしてるのよ。最初はこの村に大量に人を呼んで、労働力にするつもりだったらしいけど……」

（それと御辺との間に、どういった関連があるのだ？）

「……村の人たちの反対運動を手伝って、ちょっと作業を邪魔したりしたのよね……魔法で怨霊の幻覚とかを見せまくったりして」

「それで恨みを買ったと……」
「カンペキ逆恨みよねー」
（乗っ取り同然の開拓行為ではあるが……なるほど、魔女がいるゆえ、村は公的な司法組織を頼ることも出来なかったという次第か）
「そういうこと。でもさっきも言ったけど、郡庁が審問も軍隊も寄越してこないから……私費で討伐隊を作って私を追い出そうとして来たんじゃないかな」
「何か……生臭い話なんだな……」
（うむ……）
「まぁ、そこはちょっと、悩みの種ではあるのよ……まさか入植者をやっつける訳にも行かないしね。食べていく？」

ゾニミアは話し終えると、皿に盛った獣乳のシチューを差し出してきた。よく煮えた野菜と臭みのない肉の香りが獣乳とバターのそれと合わさり、否が応にも食欲を刺激した。

「あ……いただきます」
（御辺は人の馳走になってばかりであるな）
「黙れ」

霊剣に毒づくと皿を受け取る。自分の分を盛って食卓に着いたゾニミアが、匙も渡してくれた。

（主よ、それではこちらの事情を話すぞ）
「ああ、よろしく……いただきます」
「いただきます」

霊剣が説明を始め、グリュクはシチューを口に運び始めた。

3．薪割りの呪文

食事を平らげ、小屋の裏の井戸の水で体を拭いて戻ってくると、ゾニミアが尋ねてきた。

「さっぱりした？」

「ああ……どうもありがとう」

「どーいたまして」

髭剃りなどは無かったために髭は延びたままだ。それでもアニラと分かれてからの四日間は殆どが野外にいたので体を拭くことも出来なかったため、随分と気が晴れた。

「それにしても聞いたわよ、また面倒くさいことになってるわねー君」

「そりゃ確かに面倒だけど……」

グリュクが身奇麗にしている間に霊剣がし終えたらしい説明に対してゾニミアが口にした言葉と言えば、そんなことだった。彼としても何か同情の言葉をかけて欲しかったつもりはないが、面倒の一言で片付くのも承服しがたくはあった。匙と皿を流しに持って行くと、ゾニミアも皿と匙を渡してくる。やや納得行かない流れを感じながらもそれも流しに置くと、一拍間を置いてから言葉を始めた。

「だから、俺は出来ればベルゲに行きたい。ちょっとお邪魔するだけのつもりだったけど、経験があるのなら出国幇助業者についての話を聞きたいんだ。出国許可証なんて、もう王国じゃ作れない体質になっちゃったから」

「なるほどねー……でも、出国なんてしなくてもいい解決策がある

わよ」
「え」
（それは興味があるな）
彼女が余りに軽い調子で言うので、一瞬それと分からず聞き返す。
「君もここに住めばいいと思うの」
ゾニミアの提案は、有体に言ってとんでもなかった。体が、思わず椅子を跳ねて立ち上がってしまう。
「そ！、そ、そんな訳に行くか！　大体、住むって……」
「いやいや、なかなか合理的だと思わない？　力仕事とかはあんまり必要にならないけど、それでも人手が増えるだけでも全然違うし……火の面倒とか見て貰えるのってすごく助かるんだけどな。家が狭いって言うなら一緒に改築手伝ってくれれば良いし、愛情とかそういうのは後からついてくるって」
「あ、あぃ……！？」
完全に狼狽しつつ反駁になっていない反駁を試みると、彼女はひらひらと手を振って説明してきた。こうなると、さらさらと動きに合わせて微妙に揺れる長い紅の髪さえも、こちらをからかっているようにさえ思えてくる。
その表情からは面白がっているようにも思えるが、挙がる論拠は一応は本気で提案しているのだとも取れた。確かに、王国ではあるが魔女にとって不安の小さい土地柄であり、またゾニミア自身が魔女であることで、何かあれば霊剣以外の意見を聞くことも出来るだろうが……
「だからって、そ、そんな簡単に、男女が……だな……」

（ここまで初心な主は歴代でもなかなか居らぬ）

「うるさいッ！！」

立てかけられながら、明らかにこちらをからかっている霊剣に向かって思わず怒鳴る。

「フフ……まー、私の知ってる業者と連絡は取ってみるけど。その気になったら言ってね」

ゾニミアはそういうと食卓を立ち、私室らしき部屋の扉を開けて入っていった。

「……」

呆然としつつ、無駄に熱を持った頬に触れながら足元を見ると、先ほどの”フォンデュさん”が足元に立ってこちらを見上げてきていた。光の反射で、眼鏡の向こうは窺えない。

「……フォンデュさん、だよね？」

「えーいっ！　やはり間男かッ！！　ボクからゾニミアさんを寝取ろうとッ、そういう魂胆であぷろぉちしてきたということかッ！！！　チねーーーッ！！！」

「いや、違！？　ちょっ、待っ……！」

罵声と共に、大きさの割に薄気味悪いほどに強靭な手足による俊敏で執拗な攻撃を受けて、グリュクはたじろぐしかなかった。

抜き身の霊剣の切っ先を左後方に下げ、意識を純化してゆく。皮に印を刻んだ目の前の樹木だけを見据え、今この森の中に、自分とその樹木だけしか存在していないように感じられる程に集中する。幹はグリュクの一抱えよりやや大きい。東部の植物はろくに知らないが、これは故郷にも生えていた樫だ。

（体を引き絞れ。全身の筋、吾人と御辺のその全体を意識し、刃に込めるのだ。字を書く際に、指先に気を留めず字に意識を向けるが如く）

霊剣の助言に従い、グリュクは力を込めた。更に魔女の知覚を研ぎ澄ませ、天空から無尽に降り注ぎ、大地から止め処なく立ち昇る力に己の存在の核心で以って触れ、それを爪弾く有様を心に描く。

それが、魔法術という感覚だった。

「断ち切れ……」

霊剣で斬りつけると、呪文によって潜在していたエネルギーが解放される。左下からやや右上がりに振られた切っ先が樹皮を切り裂き、木部に達して全ての年輪を一瞬にして分断する。振り抜くと、余剰のエネルギーが物質化して湯気のように刃から抜けて放散してゆく。物質化といっても通常の物質ではなく、”魔法物質”と呼ばれる、少しばかり不安定な存在であるらしい。

（そのまま打ち倒せ！）

グリュクは間髪入れずに剣を持ち上げ切っ先を樹木へ向けると、再び意識を集中し、今度は別の術を放った。

「吹き飛べ……！」

小さいが強大な威力が切っ先を基点に流れ出し、森の極狭い箇所で荒れ狂った。生成された魔法物質が塊の状態で射出され、倒れ掛かってきた樫の幹に極超音速で直撃する。

いわば魔法の弾丸だ。自然界の物質には存在しない性質を与えられたその弾丸は、不安定さゆえに明るく輝いていた。魔法物質の一部が光となって失われているのだ。ただ、音速をはるかに超えた初速では着弾するまで極短い時間しか要しないのでさほど損失も大きくはならない。

着弾するとそれは押し広がって面積を広げ、樫を貫通することなく打って押し返し、樹木全体を１０ｍほど上方に弾き飛ばした。樫はそのまま轟音を立てて切断面から大地に垂直に落着し、横倒しになる過程で枝葉の切れ端や土埃を舞い上げる。

（そのままゆっくりと、一度意識を鎮めよ）

言われるままに、粉塵の中で高揚した精神を宥める。樹木を一本胴切りにして反対側へと倒れるように魔弾を当てただけだが、今回魔弾に与えた性質もあって貫通こそしなかったものの、樫の幹は大きく陥没していた。木部の繊維が複雑に絡み合っているため樹木の中でも強度が高い樫を一振りで切断し、陥没させる。恐らく魔弾をもっと鋭く練って貫通型としていれば、容易に幹の直径を越える大穴が開いていただろう。するだに恐ろしいものがある想像だったが、人間など、打撃型、貫通型のどちらであろうが直撃すれば原形を留めまい。

「おぉー、すごいわね」

ゾニミアが軽い感嘆を交えながら箒で上空から降下して来た。二

人がいるのはゾニミアの小屋の裏手からやや歩いた森の中で、樹の合間に小屋も見える程度の距離しか離れていない。

出国幇助業者への連絡は済ませてくれたそうだが、返事が来るのに最低でも二日はかかるということで、それまでは入植者たちと不意な接触をしないよう、彼女の小屋に世話になっている。ゾニミアは魔法術による村民の医療支援や、伐採による燃料調達などで生計を立てており、食料などは問題なく分けて貰えるのだという。

少なくとも、彼女の世話になっている限りは森に分け入って野生動物を斬り殺して飢えを凌ぐようなことはしなくても済む訳だ。

（主よ、まぁ人間なのだから雑念を捨てよとまでは言わぬが、余り悶々とされてもだな……）

「黙れ……」

「私はそういう攻撃系がそんなに得意じゃないから、助かるわ。やっぱりここに住まない？」

「え……いや、だから……」

ゾニミアは霊剣を睨み付けるグリュクに気兼ねする訳でもなく、再び彼に提案してきた。

言葉は濁したが、魅力的な条件ではあった。男という生物の本能という視点で見れば、彼女の整った容姿も。五日前までは食い詰めてすらいたのであり、断る理由はないとも思えてくる。

「あ、あとは枝を落として……割りやすい長さで輪切りにすればいいんだよな」

「魔法術の練習も兼ねるなら堅い樫の方がいいんだろうけど……沢山やってくれるなら楢とか杉をお願いするわ、割りやすいから」

「全部自分でやってるのか？」

「細かく割るのはフォンデュさんに任せてるけどねー」

ゾニミアの小屋の裏手を見遣ると、彼が台に乗って小さな体躯で斧を振り、切り株に載せた薪を細く割っているのが見えた。慣れたものらしく、彼自身の身長より遥かに長大な薪割り斧を振るう手つきは危なげない。むしろ先程見た時に比べて明らかに手が伸びていて、頭上に斧を振りかぶれるほどになっているが、そういう生態なのだろうか。

彼は自分を見るこちらの視線に気づいたのか、ややこちらを向いて――頭部がほぼ全身を占める構造上、体を残して首だけをこちらに向けることが出来ないのだ――鼻を鳴らしたような仕草をすると、表情をあからさまに不機嫌に変えて、再び斧を振り下ろした。

「恨まれちゃったかな……」
「その内仲良くなれるわよ」
「そうだといいけど」

それは少々無責任ではないか、とは言わなかった。霊剣に聞いた訳でもないが、どうやら魔女同士では魔女の知覚によって大まかな感情の流れを読むということが出来ないらしい。この半日でゾニミアがこちらのそれを読み取った様子も無いのでそう判断したというだけのことだが。

その彼女が、軽く両手を合わせて言ってきた。

「まぁ、明日までは私を手伝って貰って、その代わり屋根と食べ物を提供するということで……ちょっともう一つ手伝って貰いたいことがあるんだけど……それが終わったらいいかな？」

4．黒体牢獄

ゾニミアのいう”手伝って貰いたいこと”とは重い金属の杭を何本も使う作業らしく、彼女は”お清め”と呼んでいた。それをグリュクに手伝わせるため、最初に彼を”お清め”を執り行う場所である大岩の元へと運び、次に数度に分けて杭を運び込むと説明をされていた。だが、異変が起きていた。

「ちょっと、どういうことなの、これ……！」

（これは……！）

上空を飛ぶゾニミアの箒の後部から見ただけでも、岩場の周囲は樹が切り倒され、十分な空間が広がっていた。広さは重機を複数運び込んである程で、履帯型や歩行型など、計三台が置かれていた。村にも重機が置いてあったことを思い出すと、グリュクには関連付けずにはいられなかった。

その中心に、地表から突き出た高さだけでも１５メートルはありそうな、巨大な岩石が突き出していた。根元の断面の直径は１０メートルも無く、地面の下の形状は窺えないが土壌に突き刺さっているのかも知れない。表面は風雨に削られて長いのか比較的滑らかで、根元の部分や深くなった雨筋の部分には苔さえ生していた。

そんな大岩に既に何人かの安全帽を被った男たちが取り付き、削岩機を突き刺してヒビを入れている。

ゾニミアは彼らの視界に入らなさそうな位置で箒の前進を止めると、その場に滞空したままグリュクに問いかけてきた。

「グリュクくん、何とか、作業してる人だけでもあの岩から引き剥がす方法はない？　あの大岩、壊されると物凄くまずいんだけど。私の使える術じゃ、ちょっと心当たりが……」

「ミルフィストラッセ、あれを……」
(うむ、しかし少々範囲が広い。心せよ)
「わかった。ちょっと、下ろしてくれるかな」

ゾニミアに言うと、彼女は箒を下ろし、森の只中へと降り立った。密生した枝葉がバサバサと顔だけでなく全身を叩く。今度はバランスを崩さずに箒から降りると、意識を尖らせ術を構成した。

「……安らげ」

密やかな魔の手がこの場の全体を緩やかに包み込む様子をイメージし、そこに力を与えて解き放つ。霊剣から放出される穏やかな力場が付近に広がり、森の中からで遮蔽物も多いものの、それでも大岩の周囲の男たちに影響を及ぼした。森の中で術を行使しているグリュクには効果を発揮した対象の全体は見えなかった――力場が魔女の知覚を阻害する――が、予備の発電機を点検していた者、大岩の根元で削岩機を扱っていた者、仮設便所を設置していた者など、作業者はその内容を問わず次々と倒れていった。術者から離れた場所に焦点を置いているため、傍らのゾニミアにはほとんど影響が無い。

夜明け前に、霊剣が手本を見せて野外強盗たちを昏倒させた術だ。作業者たちは一様に、脳の神経電位を強制的に低下させられて眠りに就いている。作業機器を作動させたまま昏倒させるのは当然危険であるし、目覚めた時には弛緩して広がった血管によって脳神経が圧迫されて頭痛を覚えるだろうが、我慢して貰うしかない。村民ではないのでゾニミアやグリュクの存在を知られる訳には行かない彼らに、姿を見せず、かつ傷つけることなく作業を中断してもらうには最善に近い手段だ。ただし、野外強盗たちの時に数倍する範囲に力場を発生させたため、神経に蓄積した疲労もそれなりに大きかった。先ほどの薪採取を兼ねた練習からさほど時間が経っていないこ

ともある。
だが、まだだった。
「……まだいるみたいね」
「あぁ……」
グリュクとゾニミア、両者魔女であり、魔女特有の変換小体を含有した神経細胞によって、五感と異なる第六の領域を知覚することが出来た。森林のような環境ではやや感覚が撹乱されるが、グリュクは霊剣の補助、ゾニミアは経験のある魔女として集中すれば、昏倒させた者たちと同程度の人数がこちらに接近しているのが分かる。
「護り給え！」
グリュクは即座に魔法物質を生成し、障壁とした。直後に、発砲音が山間に響く。彼自身は銃砲については詳しくないが、霊剣は発砲音をライフル弾のものと判定した。魔女も通常の状態における身体の耐久性は人間と全く差がなく、連射式の小銃などで用いられるライフル弾ならば、手足などでない限りは直撃は致命傷となる。
同時に何発放たれたか分からないが、前面に構築された強固な魔法物質の壁が、飛来した超音速の弾丸を全て防ぎ、或いは弾き飛ばした。弾丸と魔法物質が衝突して発生した爆音が鼓膜を叩き、思わず眉を顰めた。
これも構成している魔法物質が”蒸発”しているため半球状の障壁が明るく輝いているが、魔法物質はそもそもが、その性質を術者がある程度自由に決定できる擬似的な物質だ。その本質こそ不安定だが、短時間であれば非常に強固な性質を持たせて生成、構築することも出来た。アニラに別れを告げて最初に霊剣から教えられた戦闘的な魔法術が、障壁を生成するこの術だった。

（主よ、さすがに分が悪い。ここは一時退くのだ）
「分かってるよ！」

どんな術者であっても、二つの術を同時に操ることは出来ない。グリュクの場合においては例外的に、霊剣と彼自身のものとで二つの意思が存在するが、魔力を出す体はグリュクのそれ一つしかないため、結局はその原則に習う。霊剣が術を行使している時はグリュクが魔法術を発動することは出来ないし、その逆もまた同様だ。

グリュクは呻くと、蒸発と破壊が進んできた障壁を内側から修復し――障壁を消して再び展開するよりも隙が無いが、その分神経の疲労が激しい――、そこで障壁の維持を放棄すると魔弾を投射する術を念じ始めた。一旦制御を離れると、魔法物質の蒸発の速度は指数関数的に加速するが、あと数秒は稼いでくれるだろう。人体には威力過剰な打撃魔弾も、直撃させなければ怯ませること位は出来る筈だ。

だが、その時、銃声とは異なるやや軽い音が響いて、地面が揺れた。

「！？」
（炸薬の音か）
「あ……！」

ゾニミアの小さな悲鳴に振り向くと、彼女は大岩を見上げて愕然としていた。気づけば、銃声も止んでいる。大岩を見ると、既に亀裂に炸薬でも仕掛けてあったのか、人間の頭部ほどもありそうな破片が崩れ落ちようとしていた。所々、光沢を持った紫色の欠片が見えるが、そういった岩石なのだろうか。

「護り給え！」

呪文を発してグリュクが障壁を展開したのは自身の周囲ではなく、岩の周辺だった。平たい環状の障壁を大岩の中腹に展開し、根元に昏倒したままの作業者たちを落石から守る。

「ゾニミア、手伝ってくれ！」

少々自失していたらしいが、声をかけるとゾニミアはこちらに駆け寄り作業者の救助を手伝ってくれた。

「おいコラ魔女ォ！」

聞こえてきた機械的な雑音の混じった声の出所に目を向けると、安全帽を被った作業服の男が、拡声器と、何やら大型の長方形をした金属の盾を構えながら叫んでいる。四十代前後だろうか、金髪碧眼の中肉中背。全体的に体毛が薄く、下顎から生やした薄い髭は、あれでも精一杯伸ばし放題にしているのではないかと思えた。ゾニミアの言っていた、”夏に王都から来た金持ち”だろうか。

「何が楽しくてこんな岩を大事にしてたか知らんが、もういいだろう！　これ以上私の事業の邪魔をするな！」

誰が起爆したのかは分からないが、既に遠隔爆破できる仕組みが整っていたのだろう。彼の周囲を、武装した男たち――袖をまくった毛深い男は見覚えがあった――が固めている。こちらが殺傷力を伴う反撃を仕掛けてこないと踏んだのだろうか。

「ていうか、何てことしてくれんのよこのドボンクラッ！！」

「ドボンクラとか言うな！」

ゾニミアの罵声に、盾の男はやや大人気ない声音で応戦してきた。

「村の連中も何やら化け物が入ってるみたいなこと言ってたがなぁ、そんな脅しで守るほどのモンかこれは！　お供え物一つ無いんだし良いだろ！？　ここに鉱山開いたらその分ガッツリ稼いで、村にだってちゃんと利益が出るようにするんだから――」

「村長たちはやるなら別の場所にしろって散々言ってなかった！？　それをよく分かんないオカルト方位学でどうしてもここがいいとか言い出して強行してんのはどこの誰よこのスケベ髭！　ワイセツ髭！！」

「わッ……言わせておけば魔女の分際でお前ッ！　俺は別に啓発教義なんて大して信じちゃいないがなぁ――」

男とゾニミアの言い合いにグリュクと討伐隊の男たちのどちらもが閉口しつつあったが、それを遮るものがあった。

（主よ、岩が……！）

「！？」

そうなる要因は無かったはずだが、岩が大きく崩れ、紫色の、石とも金属ともつかない質感が姿を現した。炸薬の威力が及んでいたものか、既にその紫色の部分にも亀裂が走っており、更にその亀裂の中からは黒い何かが覗いている。

何とも断じようが無いが、どこまでも黒く、夜闇でももう少し他の色が混じっているだろうと思わせるほどに暗い。何かの影なのかとも思えたが、どうやら、光を全く反射しない、霊剣によれば”黒体”と呼ぶ物かも知れないらしい。ゾニミアも、討伐隊も、スケベ髭も――名乗っていないのでとりあえずそう呼ぶことにした――、一様にそれに目を引き付けられていた。例外は、グリュクたちが空いていた場所に固めて寝かせておいた作業者たちだけだ。

その楕円体状の黒体が覗く亀裂が広がり、紫色の材質は乾いた音

を立てて崩れ落ちた。現れたのは、縦に長い黒体の半球といったところか。そして、それがグリュクたちの見ている前で変形を始めた。地面も、微弱だが揺れているのが分かる。ただ、黒体故か反射などによる表面の形状は全く分からないので、視覚においては輪郭の形状が気味の悪いほどにうねりを繰り返していることしか分からない。

だが、事情を知るゾニミアと、事情は知らないが魔女であるグリュク、その下僕たる霊剣は違った。

（非常に強い怒りの心……あの黒体は恐らく、高度な術法によって命を一時的に魔法物質に変換したもの……！　あれを覆っていた紫色の物質も、恐らく術法の維持に必要な特殊な素材か何かだったのだろう）

黒体の変形は激しくなり、変動を繰り返しつつも何か特定の形を取ろうとしているように見えた。

「……あの真っ黒な丸いボタ山が、生き物に戻るのか！？」

「……二人とも、まずは逃げるわよ」

「そんなに危ないのか……？」

「いいから早く！！」

ゾニミアの真剣な表情に思わず飲まれ、それ以上は何も言わずに彼女の箒の後部に便乗する。箒は高度を急速に上げて、黒体が瞬く間に離れ、小さくなっていった。

「あれはね、兵器なのよ……昔の戦争で、魔女たちが撤退する時の置き土産に残していった、罠！」

「罠……？」

「ベルゲの魔女たちが過去の戦争で、妖魔領域の妖族たちと同盟を結んだのは知ってるわね……その時、妖族の一部が魔女たちに提供

した戦力、それがあの”黒体牢獄”。妖族たちの中でも手のつけられない強さと凶暴さだった罪人や、妖族の王侯ですら持て余した妖獣を、何とか魔法物質の形に封印しておいたもの……それに遠隔装置でも付けて進出してきた敵の只中で破壊すれば、あとは敵だけに無慈悲な破壊をばら撒く兵器になってくれるっていう具合よ」

（だが、何故そのようなものを御辺が管理していたのだ？）

「実家が、元を辿れば管理者だったみたいでね。権利書と一緒に、ここの保守のやり方の書かれた古い本も出てきてたのよ……巡り会わせっていうのかな。こんなのがもし万一解き放たれたら、ソーヴルみたいな村はひとたまりも無いはずだから……もうその万一が起こっちゃったけどね」

自嘲しているのか、ゾニミアが俯く。箒の速度はそのまま、ただしやや高度が下がってくるのがグリュクにも分かった。

そのような兵器が存在しているのなら、彼が魔女となるきっかけを作った妖獣・アヴァリリウスも、ああいった牢獄の枷が外れてこの地上に再び生まれてきた存在なのかも知れない。

（しかし、それにしても……）

「そうだ、その妖獣……具体的にはどう危険なのか、分からないのか？　用途から考えるに、相当なのは間違いないみたいだけど」

「分からない……権利書の他に見つけた本には、杭と釉薬を使った保守のやり方しか書かれてなかったし……こういう事態になったら、逃げろとしか！」

（……主よ、これは試練だ）

「……試練？」

突然脈絡の無い単語を持ち出す霊剣に聞き返すと、

（哀れなアヴァリリウスは体躯こそ大であったが、神経ガス以外の

点を措けばただの獣であった。此までの道中で戦いと呼べるようなものは、吾等にはなかった。今こそ吾等は、牙無き人の牙となる資質を、試されているのだ）

「……俺は、食い詰めずに済みそうだから騎士団を志願したって程度で、お前が知恵を貸してくれなきゃ何も出来ずに死んでた雑兵だぞ。正確には雑兵にすらなれなかった食い詰め者」

（今は吾人がおる。過去の主たちの全てが、御辺の味方となるのだ。例え万軍が敵となろうと、負けはしない）

霊剣に巧妙におだてられているような気もしたが、ゾニミアとソーヴル村、どちらも守り抜き、更に両者の間の交流も維持するとなれば、妖獣を何とか出来てもスケベ髭や彼に雇われた討伐隊が障害となるだろう。容易なことではない。

「……ゾニミア、君は村の人たちを避難させに行くんだろ？」

「それはもちろんだけど……君は？」

「俺は……まぁ、こいつに人生拾われた身だから」

ゾニミアが、グリュクと彼の帯びた霊剣を下ろすべく、箒の高度を落とす。森に没する前に大岩のあった方向を見遣ると、何と火の手が上がっていた。

「こいつと、こいつが助けてくれた俺の命に恥じないことを、やろうと思う」

グリュクは鞘の上から軽く霊剣を叩くと、木々の向こうの炎に向かって歩き出した。

5．灰の雪の降る日に

雪が降っている。

「（……いや）」

既にかなり広い範囲で森が焼けており、周囲の気温は恐らく六十度以上にも達しているだろう。降雪は有り得ないので、何かの灰か。いずれにせよこの高温では、長居しては肺が焼かれてしまう。灰が降っている領域とそうでない領域は比較的明瞭に分かれており、五メートルも踏み出せば灰の降る領域に入ることが出来そうだった。

だが、踏み込む前に尻のポケットから紙を取り出す。以前従士選抜試験の時に渡された、会場への案内図。皺だらけになっていたが、アニラの気遣いで一緒に洗濯されず、丁寧に戻されて入っていたものだ。彼女に対する陳謝と共に、それを広げて前方に放る。

舞い落ちる紙に灰が触れると、その一点から瞬く間に紙が燃え上がった。

「……！」

これが、火の手の原因だろう。放っておけば、この付近の山地一帯が炎に包まれる可能性が高い。

（固体に付着することで激しく反応し、高熱を放出する……これは一筋縄では行かぬぞ、主よ）

「そんなのをこうも大量に降らせる化け物が相手か……早速後悔しそうだ」

（うむ。だが、それを乗り越えてこそ、命に恥じぬ生の証となる）

「お前ってたまに詩人になるよね」

（うむ。……ん？　まぁいい。それでは、本日二つ目の術を伝授致そう）

霊剣が告げると、刀身が淡く輝き、彼がグリュクの細胞から力を得て力を行使するのが感じられる。暫し体を預けた痛みに似た感覚が抜けると、新たな魔法術が発動していた。彼の体全体を、衣服の上からうっすらと光る空気の層のようなものが覆っている。

（防熱幕の魔法術。これにて、御辺はこの灰の雪に焼かれずに動くことが出来よう。外気の熱も緩和する。このまま吾人がこれを維持するゆえ、奴に近づくのだ。言葉が通じるようであればそうして鎮めたいものだが）

「……まぁ、やるだけやってみるさ」

灰の雪が降っているのは面積にしてどれほどの範囲か、少なくとも前方の視界はほぼ全てがそうだった。灰の雪に焼かれた森が広く焼け落ち、大きく開けた一帯に、木々の燃える匂いがどこまでも漂っている。

そのほぼ中心に、巨大な妖獣が佇んでいた。やや離れた地点に、その封じ込められていた大岩の残骸が散らばっているのが分かる。そこまで、目測で五百メートル以上。グリュクは霊剣は鞘に収めたまま早足で燃えつづける木々の狭間を抜け、倒木を飛び越え、最後の方はやや走り、大岩のあった地点の近くまでたどり着いた。

灰の雪の密度は妖獣に近づくにつれて増加し、山火事による熱で吹雪の最中に近い様相を呈していた。霊剣が維持してくれているが、防熱幕の劣化が激しい。このような活性の高い魔法物質を全て制御しているとは思えないので、恐らく、降り始めている高さはそれほどでもないだろう。舞い落ちる速度からして、意外に低いのかも知れない。

（主よ、そろそろ呼びかけても良いだろう）

「よし……」

相手との距離が二百メートルを切ると、霊剣がそう告げ、グリュクは灰の雪を吸い込まないように慎重に息を吸い込み、叫んだ。

「おぉい、妖獣よーッ！！」

妖獣はそれまで気づいていなかったのか、グリュクの声に反応して首をこちらを向いた。頭頂まで、目測で二十メートル前後はある。ならば、体重は優に人間の一千倍を超える筈だ。それは相手が人間の一千倍を超える数の細胞を保有しているということであり、粗雑な計算になるがグリュクの一千倍を超える魔力の容量がある、ということを意味する。しかも、霊剣によれば妖族・妖獣などの妖魔領域の生物が体組織中に持つ変換小体の数は、魔女より圧倒的に多い。この量の灰の雪を生み出しても余りあるのだろう。

概ねの形態はやや人間に近く、二本の後ろ足で立ち上がり、膝まで届く長い腕は所在無さげにぶら下がっている。頭部は嘴のように尖った鼻面と、顎に並ぶ尖った歯、赤い目。太く長い尾が垂れており、後頭部から尾の中ほどまで、脊椎から直接のものと思しい長い突起が一対ずつ伸びており、これに皮膜が張って二枚の帆のようになっていた。滑らかな体表は光沢を持ち、液体で濡れているように思えた。灰の雪から自己を防護するための生態なのかも知れない。

「俺の言葉が分かるか！　話がしたい！」

もしかしたら、怒りに任せてしまっただけで、本来は知性を持ち、音声による対話も可能なのではないか。

妖獣がこちらに背を向け、その重心の転回に従って遠心力と共に飛来した巨大な尾が、そうした根拠のない希望を打ち砕いた。

咄嗟に後ろに跳び退ることで、衝突を回避する。

「やめろ、俺は攻撃したくない！　聞いてくれ！！」

（もう止せ！　嬢の話では、封印されたのは手のつけられぬ暴れ者ばかりだったようだが、それが証明されただけだ！）

「……！」

尾の旋回による打撃を回避されたと見るや、グリュクを踏み潰そうということか、妖獣は腕を大きく広げ、大地を踏み込んで突進してきた。大質量の疾走によって、局所的な地震が起き、グリュクはやや足を取られた。それでも何とか左に跳躍し、着地ざまに更に横転することで、これも回避できた。何百トンという体重で行った突進は、そうそうすぐに停止できるものでもなく、グリュクと妖獣との間には五十メートル前後の距離が開く。

体勢を立て直してふと気づくと、妖獣がこちらに気を取られているからか、灰の雪が止んでいた。霊剣が防熱幕を解除すると、彼を鞘から抜き放って構える。

（催眠の魔法術は恐らく効果が出るのに時間がかかる。最大出力の貫通魔弾で、足か、尾を狙うのだ。主要な動脈を切断し、失血死させる）

霊剣の助言は、表現が少々直接的過ぎる気もしたが、ここで躊躇してもグリュクが返り討ちに遭い、灰の雪による山火事が拡大するだけだろう。今の所は種が撒かれただけの畑に囲まれているため延焼などはしていないだろうが、ソーヴルが危険に晒されるのは時間の問題だ。ゾニミアは既にフォンデュと共に避難している筈だが、妖獣に通じる言葉も、再びそれを封印する手段も無い以上、森の中の彼女の小屋はもっと危うい。

グリュクは覚悟を固めて、貫通魔弾で確実に脚か尾を狙える距離

まで走った。

（……いかん、躱せ！！）

「！？」

霊剣の悲鳴を聞くや否や、突然グリュクと妖獣との間に鋭い光輝が出現し、そこから大量の灰の雪が噴出した。吹雪のように殺到する灰の雪を、転倒するようにグリュクは回避し、転がりながら体を起こして右へと抜け出した。妖獣の術の発動速度の速さに気づいて体の動きが間に合ったのは偶然といっていい。灰の雪を広範囲に降下させるのではなく、狭い範囲に圧縮して水のように発射したのだろう。

飛び跳ね、走って灰の吹雪を避け続けるグリュクを追うように、妖獣は断続的に灰の雪を噴射してきた。それを防ぐべく、霊剣が再び防熱幕を発生させる。直接付着して炎上するのは防ぐことが出来たが、周囲に舞い散った灰の雪を吸い込む訳にも行かず、呼吸が一瞬、グリュクの意図しないタイミングで阻害された。

「！？」

そこに、今度は左から旋回してきた尾が直撃した。

グリュクの体が、大きく跳ね飛び、落着して転がる。右に飛ぼうとしていたお陰か、怪我は左腕の骨折と、あちこちの軽度の打撲。意識を失うことこそしなかったが、立ち上がるのに難儀した。噴水のように湧き出る痛みが押し寄せて、魔法術の連続発動で高まっていた全身の鈍痛を霞ませる。この有様では灰の雪の噴射で焼き尽くされるだけのはずだが、妖獣が様子見でもしているのか、そうなる気配は無い。

痛みで、動きも鈍る。そして何より、手の中から霊剣が無くなっていた。痛みも忘れて上体を起こし、周囲を見渡すと、妖獣までも

が悶えているようだった。何があったのか訝るが、原因はすぐに分かった。

尾の付け根から少し離れた中程に、霊剣が根元まで突き刺さっているのだ。余程痛むのか、切り裂くような声を上げ、妖獣が尚も呻いている。

「（鳴き声が出せたのか……）」

彼を吹き飛ばした拍子に、角度の関係でそうなったのだろう。続く全身の痛みと焼け落ちた森に見合わない少々間抜けな構図に、どうでもいい感想すら出てきた。

（主よ、何とかして吾人を引き抜くのだ！　偶然だが、恐らく、既に尾の神経と動脈を切断している！）

「ミルフィストラッセ……ちょっと我慢しろよ！」

相棒の――まだ五日目だが、こうも共に死線にあれば、そう呼んで構わないだろう――声に呼応してまだ無事な右腕を掲げると、術を念じて呪文を発した。

「断ち切れッ！！」

樫を陥没させた魔法物質の弾丸が、今度はその数倍の威力で、妖獣の尾に突き刺さった霊剣を直撃した。

（ぬぉぉぉぉぉ！！！）

霊剣の悲鳴が意識に響く。衝突の角度が柄尻に対して垂直でなかったようで、突き刺さった部分から尾の断面上部を切り裂くように反対側へと霊剣が抜け飛び、焼けた地面に落下して小さな音を立て

て転がっていった。
吹き飛んだ彼を回収するべく、痛む全身を叱咤しながら走る。横目に見ると、妖獣は傷口が広がり、のた打ち回っていた。尾の創傷からは赤い血液が噴出しているが、魔女の知覚ではそれと同時に多量の魔力が失われているのが感じ取れた。

「ミルフィストラッセ！！」

グリュクはその銘を呼びつつ急いで霊剣を拾い上げ、術を念じると妖獣に向かって彼を掲げた。

「……貫け！！」

もはや灰の雪を降らせるような集中は出来ないのだろう。グリュクは呪文を発し、痛々しくのたうつだけとなってしまった妖獣のその両脚に、動きの止まる僅かな隙を突いて立て続けに最大威力の貫通魔弾を打ち込んだ。本来であればその表皮はライフル弾程度は難なく受止めたであろうが、その数十倍の仮想質量、数倍の初速で襲来した貫通魔弾の直撃に対しては、さすがに抗甚することは敵わなかった。
大腿に大穴を開けられ、噴出した更なる鮮血と共に妖獣が倒れ付す。その鳴き声も最早、哀れを催すほどに弱々しい。

（……主よ、介錯をしてやれ）
「……あぁ」

どこか哀愁の滲む霊剣の言葉に従い、倒れた妖獣の頭の近くまで歩いて行く。そろそろ体も限界に近く、足に思うように力が入らない。見回してみれば、周囲は未だ火の海だ。後始末は後で考えるとしても、これは大事にならざるを得ないだろう。

妖獣の枕元に辿り付くと、か細い鳴き声を挙げる妖獣の頭部がはっきり観察できた。人間のそれとさほど変わらない色の血の匂いに混じって、火のそれとは違う異臭がした。恐らく、妖獣の体表を覆っている脂のような液体だろう。

鋭く赤い大きな眼球が、瞼の中からこちらを見ている。その喉は呼吸を続けており、確かにそれがまだ生きていることを教えてきた。

意を決し、刃に魔力をこめて霊剣を振り下ろす。

どこまでも鋭利な一撃は、右手だけで握っていたにも拘らず、妖獣の憤怒と苦痛、そして生命に確かな終止を刻み込んだ。

6．ゆきは晴れれど

結論から記せば、死者は出なかった。

灰の雪による周囲の森林の被害は懸念よりはるかに狭い範囲に留まり、ソーヴルの村民はゾニミアの知らせで全員が退避することが出来ていた。灰の雪の降下範囲から外れていたお陰で、村の財産への被害も殆ど無かった。

ゾニミアの小屋は、間に合わず延焼してしまったものの、灰の雪が早めに停止したお陰か焼失は免れ、少々の補修で元通りになるようだ。

工事に携わっていた入植者たちや討伐隊も無事だったが、入植者たちは借り物だったらしい重機を含めて機材の大半を、討伐隊――昏倒していた作業者たちを安全なところまで連れ出してくれたのは、彼らだった――も退避で一時的に放棄した武器の殆どを山火事で失い、肩を落として村から去っていった。

計三十名の入植者たちの指導格だったスケベ髭は折角伸ばした髭が燃えてしまい、泣き伏せている所を郡庁から来たという調査員たちによって聴取を受け、司法取引によって非公式ながら魔女によって管理されていた危険な不動産（あの大岩のことだ）を毀損し王国の領土に損害を与えた件で、裁判抜きで資産をかなり没収されたらしい。

以上は、診療所にいる時にゾニミアから聞いたことだった。

「十五年ほど前、南部のイツァという町の下水道工事の途中で、先の戦でベルゲが遺棄していったと思われる同様の封印兵器が出土しまして……現地はただの岩盤だと思って発破をかけたらしく、そこから出現した妖獣の起こした竜巻で町の人口の半分が死亡、もしく

は行方不明になるという事件がありました。それ以来、どこの郡もあの封印兵器にはうかつに触りたがらないんです」

曇り空の下で、丸太の椅子に腰掛けた礼服の男が淡々と語る。

霊剣の話では、創傷や骨折を修復する魔法術というのはかなり難度が高く、知識や経験の無い者がそのまま塞ごうとするのは瓦礫が残ったまま崩れた家の壁を塗り固めるのと同じなのだという。グリュクが受けた程度の傷であれば、人体の治癒力に任せた方が良いらしい。

そういう訳で、グリュクは石膏の固定具で自由にならない左手を包帯で肩から吊り下げ、右手に握ったパンを齧りながら、彼の話を聞いていた。

「……それで、ソーヴル近くのあの大岩は手を出さずに放置していたと」

「イツァの妖獣は啓蒙者たちが駆逐してくれましたが、また同じことが起これば、彼らに対する大きな失点になりますからね……お恥ずかしい話ですが、郡庁が隠したがるのは尤もなんです。どう対処しても評価が下がりますから。幸い、管理手法を知るゾニミア女史がやってきて、村とも良好な関係を築いてくれたお陰で、一人報告員を置いておけば然して心配がないという状況になっていましたし……」

ゾニミアの小屋の表だ。妖獣に止めを刺した後しばらくしてから戻ってきたゾニミアに拾われ、満身創痍で村の診療所に担ぎ込まれて治療を受け――ついでに髭剃りまで借りた――、それから二度目の朝を迎えていた。丸太で作った即席の食卓と椅子に、ゾニミアの作ってくれた食事を置いてそれを食らいつつ、訪れた郡庁の者だという彼の話相手をしている。ゾニミアは、フォンデュを連れて村に食料と薪や薬剤との交換に出かけていた。

（それで、あの入植者たちからの魔女の討伐要請も断っていたと）
「入植者たちからの魔女の討伐要請を断ってたのも、そういうことですか？」

グリュクが卓に立て掛けられた霊剣の言葉をほぼそのまま代弁すると、

「我々が拒否すれば、災害時以外に他の地方単位に騎士団派遣を要請することは法律で禁止されていますから。元々、サッターヴァ氏たちにはやんわりと、鉱山開発を止めるよう忠告していたんです。制止が弱すぎてと言いますか、氏が存外に強引で、あんなことになってしまいましたが……まぁ、死者も出ず、我々の懐も痛んでおりませんし、教訓だと思ってもらうしか。啓蒙者たちが地方に余り興味が無いお陰で、何とかもみ消せたって所です」

語りつづける彼は、ここに来た時にカイシェスと名乗っていた。グリュクよりは年上だろうが、なかなか若く、三十代前後といった辺りか。事情を詳しく語る様子を見ると、そこそこに地位は高いのだと思えるが、確証は無い。

「報告を受けた時はどうなるかと思いましたが……まぁ、あなたが頑張ってくれて助かりましたよ。しかも”厄介ごと一つ起こさず何処かへ居なくなってくれる”んですからね」

引っかかる部分を強調するようにそう言うと、カイシェスは左手を差し伸べきた。握手だろうか。グリュクは右手しか使えないのだが、仕方なくパンを皿に置いて手を出した。

「いやぁ、この度はご協力ありがとうございましたホント」

そういって彼はグリュクの手を取ると、右手も加えて両手で包むように彼の手を持ち、上下に振った。

「……？」

「それでは、他の業務がありますので、私はこれで……ゾニミア女史にもよろしくお伝えください」

手の平に違和感を覚えてそれを確認しようとすると、カイシェスは手を解いてそう言ってきた。

「……ゾニミアは、どうなるんです」

「え？　いや、別に何も。今更彼女を処罰しちゃいますと、それまで何してたんだと上の方の石頭に怒られちゃいますしね。そうなったら幾つか首が飛びますよ、物理的に」

真剣に尋ねたつもりだったが、カイシェスはちょっと小用を伝え忘れていたという程度の調子でそう答えた。

「……それならいいんですけど」

「お互いさまって奴ですね。それじゃ」

彼はそう告げて、やってくる時に乗っていた自動車に戻るとエンジンを掛け、ハンドルを切りながら、自動車が通るには狭い山道を去っていった。

それを見届けてから右手に残ったものをよく見ると、掌に収まる大きさの長方形の札だった。樹脂で出来ているようで、質感は堅い。文字列が並んでいるが、最初に目に入ったのは「出入国許可証」の文字だった。

（成る程、偽造の出国許可をやるから余計な魔女が居座るな、という意味であったか。あの男、役人の癖になかなか小粋な真似をする）

「ふーん……」

偽造許可証に影が落ちた。ゾニミアとフォンデュが戻ってきたのだ。ゆっくりと大気をかき乱しながら降りてくる紅の髪の魔女の傍まで歩いてゆき、グリュクは意志を告げた。

青空の下、街道が通る丘の上で立ち止まると、低木が点々と生えた草原に昨日降った本物の雪がまばらに残っていた。山火事で上空に立ち昇った暖気が、僅かだが雪雲となって降らせたものだ。地平に覗く峻険な山脈の向こうから、なだらかな地形を這う旅人たちに向かって、まだまだ冬が終わらないことを思い知らせる冷たい風が吹いている。

過去の戦争の痕跡だろう、遠くに霞むひしゃげた旧型の高圧鉄塔と、グリュクの頭上で風に唸る送電線を支える現代的な鉄塔が、時代の隔たりを印象付けた。旧型の方は、近くで見れば錆と蔓草でそれが更に強調されただろう。尤も、今後の情勢次第ではいずれ大した違いも無くなるのかも知れないが……

位置はソーヴルから南東に5キロメートルほど、王国の国境に程近い地域だ。この一帯はやや平坦だが、すぐにまた山地を行かねばならなくなると思うと、気が重い。

グリュクは世話になったゾニミアに別れを告げ、隣国への出国を試みることを選んだ。ベルゲ連邦へ行く前に、まずは王国とベルゲとの間に存在する緩衝諸国へ入国しなければならない。両勢力の息のかかった複数の国家の内、最低でも二国を経由、その二国間が最

難関なのだとゾニミアは教えてくれた。彼女の通った七年前と比べて取締りが緩んでいればいいのだが。

（そう甘くは無かろう……まずは嬢の手配してくれた出国幇助業者と合流するのだ）

「分かってるよ……この一週間で分かったけど、不要なまでに念押しするのが、お前の悪いとこだ」

（この一週間で分かったが、物事の見方が多少楽観的に過ぎるのが、御辺の汚点なり）

「……うるさい」

今は晴れていたが、冬の大陸中部は気候が不安定なので油断できない。

相棒の減らず口に呻くと、グリュクはあちこち毀れた街道の脇を、また歩き出した。昼になっても溶けずに残っていた霜柱を踏み砕く音が、誰に聞こえるとも無く続いてゆく。

6．ゆきは晴れれど（後書き）

以上で第2話の完結です。
フォンデュさんはちょっとした見せ場があったのですが、改稿したらその箇所が消失、ただの設定紹介要員みたいになってしまいました。
スケベ髭としか呼ばれなかった彼にもナイクィン・サッターヴァというフルネームを設定していたのですが、出る筈の箇所がやはり消失。
1話もそうでしたが、作成中の迷走振りが窺えます。
てな所で……次回もお楽しみ頂ければ幸い。

ご意見・ご指摘・ご感想もお待ちしております。

1．姉妹と白い粉末

信仰の真の意味というものを、時々考えることがあるんだ。
過去のどんな碩学も辿り着いたことの無い、聖典の最奥の意図。
僕ごときに偉大な最初の御方のお考えを理解出来るとは思わない。
でも、誰よりもその近くにありたいと望むのは、僕は自然なことだと思ってる。
そりゃ、列聖されるような過去の偉人に勝る自信がある訳じゃないけど……
もうすぐ季節も変わります。君の周りでまた、何か変化はあっただろうか？
そろそろ一年が経つけど、みんな元気ですか？
返信を待っています。
君に、正義の国で待っている君の家族に、全ての歩く人々に、最初の御方の祝福がありますように。
――ついに読まれることのなかった或る少年の手紙より抜粋。

雪の降りしきる朝。ペーネーンの住む村では雪は少々珍しく、妹などは物心ついて初めて見る雪に大はしゃぎだった。彼女も最後に見たのは妹と同じ年の頃だったから、六年ぶりの雪ということになる。
ただ、さすがに降り出して三日目となり、落ちたそばから地面に溶けて積もることも無いのでは迷惑の比重の方が高まってくるものだ。

早朝の日課に家を出て、妹も低木や家の屋根にだけ降り積もった雪を指して喜ぶ様子も無く、水音を立ててついて来た。大人用の古びた長靴に履かれてガホガホと音を立て、歩きづらそうな彼女が傘の範囲から出ないように気遣いつつ、沢の近くまで歩く。

冬はあまり外出したくないのだが、碌な産業の無い彼女の村の近辺で年中安定して得られるものといえば、沢の水か、外からの廃棄業者が村に違法に捨てて行く大量のゴミから回収できる金属以外にない。

二人ともそういったことに役立つ技術を修めた訳でもないので、重い機械屑で堅い機械屑を割り、中からペンチで価格の高い一部の金属だけを抜き取るという方法を取っていた。機械屑は重いばかりで安く、ある程度値の張るゴミは大抵廃棄する側で抜き取ってある。結果として、少量でもそこそこの額になる銅線などを狙う理屈となるのだった。二人が扱うペンチはそれを教えてくれた、年老いた引き取り業者から借りているものだった。嘴の欠けて錆も目立つ、周囲のゴミ同然の品ではあるが。

手袋などをしていても怪我をすることがあり、率直に言ってしまえば少しばかり割の悪い仕事なのだが、近頃彼女をいやらしい目つきで見てくるようになった木こりの手伝いはもうやりたくなかった。本当は、妹の為にもあまり選り好みは良くないのではあるが。

「足滑らせないように気をつけなさいよ」

「わかってるよぉ……」

既に先ほど滑って尻を盛大に泥まみれにしておきながら煩がる妹に何度目かの警告すると、彼女は足元の重い鉛蓄電池を持ち上げ、近くの大型スピーカーに向かって落とすように叩きつけた。塗装された合板の外箱が割れ、そこを押し広げて内部の配線にペンチを当て、部品を摘み取り始める。

「お姉ちゃーん！」
「ちょっとキリエ、どこに……」

少し離れて呼びかけてきた妹を叱ろうと顔を上げると、信じがたいものが目に映った。沢の方に、何か物が落ちており、雪を被った複数のそれらが盛り上がっている。最初の印象は、土嚢か何か。近づいて行く内にそれが、枯れ草の色をした紙の袋に詰め込まれた何かだと分かる。

「小麦粉の袋がいっぱい落ちてるよー！」
「！？」

小走りで最寄の袋に近づき雪をはたき落とすと、そっけない印刷で確かにそう記されていた。ジョルト製粉、業務用上質パン小麦粉。

「本当に……！？」

小麦粉となれば、紛れも無い高級品だった。少なくとも、彼女の村では。迷うことなく袋の下に手を差し込み、全身を使って何とか持ち上げる。

「キリエ！　持てる！？」
「がんばる……！」

ペーネーンが訊くまでも無く、既に妹は精一杯の力を込めて、もう一つ傍にあった十二キログラムの小麦粉の袋を持ち上げようとしていた。彼女の体重では恐らく無理だろう。

やはり諦めて、二人で一袋を運ぶことにした。それで往復頻度を増やした方が早い筈だ。

沢の水に浸かって駄目になっている物も含め、目に付いた全てを

村からの死角になっていそうな岩陰に引きずり込んだ。こうなってはガラクタ漁りなどやってはいられない。他の村人に知られる前に、何としても回収するのだ。

「キリエ、このことは誰にも言っちゃ駄目だからね？」
「……ラヴェじじにも？」
「あ……あとでびっくりさせてあげないと」
「わかった！」

キリエは笑顔で頷くと、相変わらず足に合っていない長靴でガタボコと音を立てながら、一生懸命に小麦粉袋の重さを支えて歩き続けてくれた。

雪はまだ止みそうに無いが、暫くの間は他の村人の目からあの宝の山を覆い隠してくれるだろう。ペーネーンにはそれが有難かった。

国境を通り過ぎる前から、しんしんと雪が降っていた。ヘッドライトを反射しながら、面白みも無く地面に落ちてゆく。

国境付近では放送電波の中継施設が殆ど無いため、ラジオの音声も途切れがちだ。その程度のことには慣れていたが、気分次第ではそれも許容できなくなることがある。

ロレントが主に王国と騎士団領の間で営業する運送会社に入社して、もう二十年以上が経っていた。入ったばかりの頃は社員も十人に満たず、社有の自動車もガタの来た中古が多かったが、今では業績も安定した軌道に乗りつつあり、増えた従業員の数に比例して部下も出来た。商売道具も、新品を買えるようになった。

しかし、彼は最近不機嫌だった。輸送車隊の副長になって利益も

上がり、実入りが増えたのはいいが、それはその分仕事が忙しくなったからだ。副長とはいえ、彼の兄である隊長と共に、部下の指導の傍ら自分でもトラックで荷を運びつづける日々。金は家族に預けており、彼自身が使うような暇は無い。息子は王都で一旗上げると言い出して強引に家を出てからは碌な音沙汰を寄越さず、娘は神学校の仲間内で立ち上げた映画製作プロジェクトとやらに夢中で朝帰りの常習者、夫婦仲は健在だったが、それも殆ど家に帰れない今の有様では何時彼女が心変わりしようと責めることは出来ない。彼は最近不機嫌だった。途切れ途切れのラジオの音声も、心なしか彼を嘲笑っているような気がする。

予報が外れて、天気もこの通りの雪だ。騎士団領を出てから何本煙草を吸ったか分からない。そのせいでハンドルを握る指も余計にかじかむのだが、吸わずにはいられなかった。先週起きたとかいう妖獣事件の調査とやらで彼のチームが普段使用している街道が封鎖されており、給料の為とはいえこんな見通しの悪い未開地同然の山道をのろのろと進まなくてはならないのだから、悪いことは重なるものだ。道が滑りやすいので停止と発進の細かい反復、更に低速を強いられ、燃料の無駄も多かった。最悪の場合は歩いて最寄の宿場町にでも燃料を買いに行かなければならないかと思うと、理不尽もここまでくればいっそ、清々しい……

「訳あるかこのやろぉぉぉぉ！！！」

ハンドルを何度か叩き、頭を振って喚く。

だが、それでも彼は運転を生業にしていた。車外の異音に気づき、ブレーキを掛ける。

止まらない。通っていた道は舗装が無く、剥き出しの地面は溶けた雪でぬかるんでいてた。やや傾斜している道を、車体が止まらず滑り落ちてゆく。後部に満載していた積荷の小麦粉が、更に悪い方向に作用した。

「う、嘘だろ！？」

車体の挙動に狼狽えつつも必死にブレーキを踏みつけるが、彼のトラックは勢いを落とさずカーブを突きぬけ、音を立てて急斜面を転がり落ちていった。

2. ヴォン・クラウス

強く赤みがかった髪をした背の高い青年がよろめくように、雪でぬかるんだ土の道を歩いている。

時刻は季節と太陽の高さを勘案して午後三時といったところか、半日かけてやや南下したとはいえ、その程度で気候がそこまで和らぐ筈もない。今は止んだが正午近くまでは雪も降っていて、午後であろうと日差しは弱く、風は冷たい。それまで街道の両脇は森が支配していたが、歩き進めるに連れて密生していた樹木もだいぶ疎らになり、土質が変わったのかその木々も急速に姿を消す。

そして見えてきたのは、晴天の下にあっても何処か薄暗い集落だった。そう見えるのは、恐らく全体的に建材が古びて光を反射しなくなってきているからか。

道の外れのやや高くなった箇所から見渡してみると、元々は何かの工場だったのだろうか、パイプや貯水槽にトタンで固められた城のような大きな、一目で老朽化して打ち捨てられたと分かる建築物の四方に、張り付くように民家の跡と思しき廃屋が連なっている。

外壁など以ての外、簡素な柵などもなく、何時、誰が設置したものやら見当もつかない粗雑な立看板を以って、ようやくここがヴォン・クラウスと呼ばれる場所であることが分かるのだった。

そしてその、地図に載っていない非公式な村落が、魔女ゾニミアの手配した出国幇助業者との待ち合わせ場所となっていた。路銀の持ち合わせが乏しいこと以外は順調と言える。

（……かような村では、寝床はまだしも食料の確保は難しいかも知れぬな）

「や、やっぱりゾニミアに少し路銀を分けてもらえば良かったかも知れない……」

（格好をつけてからに、今更遅い。兎でも探すのだ）

「ああ……」

ゾニミアは出国幇助業者に支払うための王国通貨を分けると言ってくれていたが、王国に戻る予定も無いのに金を借りるわけには行かないと、グリュクは強く断っていた。業者と待ち合わせている村までの間、路銀を稼ぐ機会くらいはあると思っていたのだが、今となっては見通しが甘かったとしか言いようが無い。

グリュクは遣る瀬無く唸り、その場に佇み魔女の知覚を広げて野生動物の存在を探った。大型の動物はすぐに手の届く範囲にはいない。やや小さなもの、これもなし。子犬やウサギ大のものにまで感度を上げて、ようやく複数、村の中にいる複数はペットなどであろうから除外し、二十メートルほど左の後方にそれらしい存在を感知した。

（よし、善は急げ、である）

「俺も慣れたもんだな……」

あまり足音を立てず、しかし獲物に狙っていることを悟られぬよう、慎重に森の中に踏み入れる。森の中では魔女の知覚も他の五感同様にやや精度が落ちるので、十メートルも踏み込むと、自然と息を潜めて対象を探すこととなる。低木などは少なく、探しやすくはあった。

「（……そこだ！）」

畑の青虫の駆除に銃を持ち出す譬えではないが、小声で呪文を発し、打撃魔弾を獲物の気配に向かって解き放った。

近くにあった沢まで出向き、手ごろな岩を見つけて魔法術で高温になるまで加熱した。そこに洗った獲物を置いて鉄板の要領で簡単に調理、消毒して、ようやく食事にありつけた。

「いただきます……」

折り取った二本の木の枝をピンセットの要領で扱い、焼いた獲物を摘みあげ、肉の部分だけを噛み削いでゆく。脂などは少なく味もあっさりとしているが、筋張っておらず食べやすい。

（どうだ主よ、ヘビも悪くは無かろう）

「あぁ、意外といける……ただ調味料は欲しいなぁ」

舞い上がった土埃が収まると、そこに無残な亡骸を晒していたのはヘビだった。どうやら、穴で冬眠していて無防備だった所を爆殺してしまったらしい。仕方がないので、沢の水で洗って、食用に供することにしたのだった。

霊剣ミルフィストラッセは、過去に所有者として彼を振るった剣士たちの記憶の全てを宿す、いわゆる意志を持つ剣だ。とある事情でグリュクと行動を共にしており、魔女や妖族であれば彼の声を直接精神で”聞く”ことが出来るらしい。その彼がそのように話すということは、過去の彼の所有者の一人にヘビの賞味経験があることになるが。

（海辺か洞窟でもあれば良かったのだが）

「塩まで自分で調達しろと……でも何とか路銀は作らないとな」

そこまで呟くと、近づく人の気配に気づいて内心舌打ちする。つ

いいつもの要領で霊剣と肉声で会話していたが、本来ミルフィストラッセの声は魔女や妖族以外には届かないのだ。もしかしたら、沢で一人、剣を帯びてヘビを貪る奇人扱いを受けるかも知れない。
そういったことを覚悟して気配の方向を振り向くと、気配の主は想像とはやや違った姿をしていた。

「わー！？　これヘビ！？　おじさんが捕まえたの！？　て言うか食べてるの！？　おいしい！？」
「！？」

それは、長い赤毛を両側で縛った少女だった。右手には何処かで調達したものだろう、棒切れを握っている。やや動揺していたせいで気配の大きさから即座に子供と判定できなかったのは不覚だったが、彼女は質問をまくし立ててこちらを圧倒しつつ、蛇を載せた熱石へと素早く歩み寄っていった。

「あー、その岩熱くなってるから！　触ったら火傷するから！　あんまり近寄ったら駄目！？」
（たじたじとはこういった有様を指すのだな……）
「うるさい！　……あ」

思わず肉声で霊剣を罵ったことに気まずいものを感じて少女の方を見ると、彼女はヘビを見るのはやめて、グリュクの腰に下げた霊剣をじっと見て、呟いてきた。

「……おじさん、その剣と喋ってるの？」
「え！　いや、そんな訳ないだろー……ははは」

また髭が伸びてきているので、下手をすれば十歳にも届かないこの娘にそう呼ばれるのは仕方ないとしても、霊剣との間柄の一端を

言い当てられ、動揺が走った。

「でもその剣喋ってるよ？」

「！？」

グリュクとしては笑って誤魔化す以外の手が思いつかなかったのだが、咄嗟の嘘は少女の指摘によってあっさりと瓦解した。

（主よ、この娘、魔女であるぞ）

「魔女？　キリエが？」

キリエという名前らしい彼女は霊剣の発言を聞いたのかそう聞き返すと、身近な大人の真似なのか、拳を腰に当てて叱るような仕草で腰を曲げ、たどたどしく言い出した。

「剣ー、いけないんだよ人にむかって魔女、だなんて。キリエだから許してあげるけど、村のみんなだったら許してくれないよ！」

確かに、グリュクも故郷の教会では幼い頃からそう教わってきた。先日までいた村が非公式ながら魔女に対して寛容だったこともあり、現状の認識が緩んでいたらしい。

恐らく、彼らが通報されずに済んでいるのは”魔女”と”喋る剣”とが彼女の価値観の地図の中で関連付けられていないからに過ぎないのだろう。グリュクは名乗り、謝って誤魔化そうと試みた。

「あ、あぁ……俺が謝る、ごめんよ。でも俺、おじさんじゃないぞ。グリュク、カダン。繰り返すけどおじさんじゃないぞ、キリエちゃん」

「グルクさん？」

「うん……まぁ、それで……いいか」

「でも何でヘビ食べてたの？」

幸い、彼女の興味は先ほどのヘビに戻ったらしく、キリエは棒切れで肉片をつつきながらそう尋ねてきた。この年頃の子供には少々刺激が強いのではないかと思ったが、棒で焼けたヘビをつつく手つきには遠慮が無い。

このまま少女の首を上に向けさせておくのも良くないので、屈んで目線を合わせる。やや冷めかけた岩から蛇を取り除き、沢の小石をどけて掘っておいた穴に放り込んで埋めながら、話し相手をすることにした。

「お腹空いてたんだよ」
「ヘビ好きなの？」
「いや……まぁ食べてみたら意外とおいしかったけど、出来れば他の物が……お金持ってないんだ」
「キリエもお金持ってないよ」
「え……いやいや、頂戴なんて言わないよ、何とかなってる」
「そうじゃなくて、うち来て何か食べさせてあげようかなって」
「うーん……嬉しいけどそれは……」

グリュクは改めて、キリエの服装を見た。己のことを棚において見立てれば、決して上等な服ではなく、清潔さにも欠けた。先ほど立て看板で名を知ったばかりのすぐそこの村の娘なのだろうが、彼女の身なりは村全体の状況の縮図のようにも感じられる。少なくとも、彼女の家で食料を分けてもらうのは、グリュクにもミルフィストラッセにも気が引けた。

（娘よ、申し訳ないが、あまり面倒を掛ける訳にも行かぬゆえ、気持ちだけありがたく頂いてゆく。それと、吾らのことは誰にも話さぬように願いたい。御辺らにとって、吾らは不吉すぎる）

「なんで不吉なの？」
（そ、それはだな……）
「ていうか、どうやって喋ってるの？」
（それは……何というか……色々と難しいのだ！）
「えー、教えてよぅ」
「……お前もたじたじじゃないか」
（えぇい、黙れ！）

少女の質問に度を失いつつある霊剣を茶化し返すと、饒舌な剣は珍しく剥きになって唸った。

「……ミルフィストラッセ！」
（む？）

付近の違和感に気づき、霊剣の銘を呼ぶ。沢のやや上流、斜面が徐々に崖となって上方へ切り立っている方向を見ると、沢から高さにして五メートルほどの高さ、斜面から生えた二本の白樺の根元に、大きな影が引っかかっていた。

自動車だ。後方が箱状の荷台になっている形式で、斜面の上の山道から墜落してきたのだろうか、それが沢に激突する前に白樺の根に堰き止められたものか。

元々塗装が白く、白樺や雪で目立たなくなっていたので気づかなかったが、よく見ると車内に人影が見える。どのような順序で落ちてきたものか、荷台の壁は大きく裂けて、助手席は潰れきっていた。だが運転席は何とか原形を保っており、いつからあのままだったのかは分からないが、魔女の知覚で探ると、まだ運転手がそこにいて生きていると知れた。

（主よ！）
「分かってる！」

「あー、待って！」

少女を尻目に、グリュクは走り出し、自動車の下まで辿り着いた。

（よし、新たな術を伝授致そう）

「……たまには休ませて欲しいんだけど、仕方ないか」

魔女となって以来、一日あたりに一つか二つの頻度で魔法術を教えられた。大まかな種別の数だけでも、既に二十に迫りつつある。

「……あの人を助けるの？」

「あ……えーと……」

その魔女の呼称を忌む発言から、彼女は魔女でありながら啓発教義を信仰する価値観の社会で育ったことがはっきりしていた。ヴォン・クラウスは啓発教義の村なのだろうが、恐らく、キリエにはグリュク同様祖先の血が世代を空けて現れたのではないか。彼女の前で魔法術を行使すれば、グリュクが魔女であることは知れてしまう。

（そう、人助けである。良いことをするのだ、分かってくれるな娘よ）

「うん」

「……やろう、早く手当てしないと」

（うむ！　では行くぞ）

近くに他の気配はない。未だ出会って三十分にも満たない短い付き合いだが、少女の優しさと、幼さゆえに教義に染まりきっていないその倫理観を信じることにした。霊剣が術を念じ、グリュクの魔力を使って魔法術を発生させる。

霊剣の発する光が鞘から漏れ、グリュクの体を通して強い力が発

動した。すると、トラックがゆっくりと浮き上がり、白樺の枝葉を掻き分けて沢の上空十メートルほどに漂い出てきた。

「うわーすごい！！」

（これぞ、念動。扱いやすく応用の幅も広い術ゆえ、努めて熟練すべし）

「説明はいいから早く下ろせって、お前が制御してる術なんだから」

（ぐぬぬ……）

霊剣がトラックを静かに着地させると、全身を刺激する奔流のような感覚が解け、グリュクはトラックに近づいて仔細を調べた。運転席の扉の根元が歪んで開かなくなっていたが、霊剣による一閃でその箇所を切り離して強引に扉を開くと、運転席の男が小さな呻き声を上げた。四十歳前後といったところか、顔は青ざめているものの、呼吸をしていた。見た所、しっかりと座席のベルトで体を座席に固定していたようで、歪んだ車体の部品に体のどこかを挟み込まれているということも無い。

落下時に固定ベルトで強烈に締め付けられたであろうこと以外は目立った創傷などもなく、軽く触診したところ、骨も全て無事だった。背負って行けるだろう。ぐったりしたままの上半身を抱き寄せながら、何とか車内から引き摺り下ろすことが出来た。

「もしもし、もしもし！」

（無理に起こさぬ方が良い。何処かに運んで安静を保たせるべきだが……ここは何とか村民の家屋に間借りするのだ）

背負っても、やはり起きる様子はない。体温がやや下がっているが、恐らく崖から落ちて何時間もあのままでいた筈で、この幸運と生命力賞賛されてもいいかも知れない。

「じゃあうちに連れて行こう！」
「いいの？」
「人と人とは助け合い、人と人とで立ち向かう……だからね！」

グリュクも聞き覚えのある聖典の一節を、キリエがたどたどしく諳んじてみせる。厳密には、二人とも王国にとっては人ではない魔女なのだが。

その魔女でありながら、彼女は既に熱心な啓発教義の信徒であった。妖獣の血を浴びるまで覚醒しなかったグリュクと違って、身体機能に特に問題のないキリエは教えれば短期間で魔法を扱えるようになるはずで、彼女が生きているのは、一重にここが公式には存在しない村であるからなのだろう。

グリュクは全くの他人ながら、心優しい少女の行く末を案じた。

（……御辺、もう聖典を読めるのか？）
「……お姉ちゃんに読んでもらいました……」
（素直でよろしい）

そのままでは程なく絶命する可能性もある男を差し置いて、早くもキリエは霊剣と馴染んでいる。そういった才能なのだろうか、その境遇ゆえ友人が多かったとは決して言えないグリュクには、少々羨ましいものが感じられた。

そして結局、他に案もないのでキリエの案内で彼女の家へと彼を運び込むことにした。ぐったりと重く圧し掛かる男の体を背負って村への坂を上ることよりも、喋る剣のことと、魔法術を使って救助したことを漏らさないようにキリエを説得する方が、はるかに骨が折れた。

3. 道化師の朝の歌

ヴォン・クラウスは、元々は貴族資本の防護具メーカーが持っている工場を中心とした、小さな街道の村だった。行政区分としては南の大都市の付属物のような扱いであったが、最盛期には従業員とその家族を含め、二千前後の人々がそこで暮らしていたという。

だがそれも今や、五十年近く前の話になる。時代の流れが変わり、教会の発言力が弱まってくると、長引く戦後経済の停滞に倦んでいた貴族や企業の資本は王都のある西部へと戻っていくようになり、その結果として東部は省みられることが少なくなってきた。都市圏が残っているのは幾つかの代表的な地域だけで、それまで大規模資本によって底上げされていた地方経済は衰退の一途を辿り、元々農業などで自給自足できていた地域を除けば、多くが寂れていった。

ヴォン・クラウスも他の多くの似たような町村同様、工場が放棄されたあとは寂れる一方だった。なまじ街道に近かったためにいつしか周辺都市や緩衝諸国のいくつかからゴミが不法投棄されるようになり、税収が期待できなくなった時点で遂には王国の自治体登録から抹消された。それまでは交通量が多かった隣接する街道も、結節点だったいくつかの地方都市と同様に寂れ、今では殆ど使われなくなってしまった。

老いも老いた彼が居を構えているのは、そんな村の南東の広場の、ゴミの山の傍だった。最早何らかの価値のある物はことごとく抜き取られ、樹脂とガラスと化学繊維の塔と化していた。ただ、うっすら積もった雪のおかげで、そんなゴミ山でも風情が感じられなくもない。

何に使われていたのかよく分からない大きな樹脂の板切れで確保した屋根の下に、樽のような胴体の背に伸ばし放題になった白髪と、腹にはこれまた延び放題になった白い髭がカーテンのように垂れ下がっていた。特殊な毛筆のように顎の下まで垂れ下がる長さの眉だ

けが黒く、右目には眼帯。装いは古びれて劣化が目立つが、生地や装飾が、元が高級品であった頃を偲ばせた。

そして何より、腕の通らない右の袖。風体としてはこの上も無く異様な部類だろう。

十日ほど前にここに目をつけ住み始めたのではあるが、彼はそれ以上一箇所に留まる性分ではなかった。今尻を置いている重厚な下水道の石蓋――漏れ出る臭いも、どうせこのゴミ山全体が臭いのだから気にならない――はなかなか座り心地が良かったが、そろそろお別れだ。

次はどちらの方位に歩いたものかとぼんやり思案していると、見知った影が二つ。

「ごはんだよ、ラヴェじじ！」

「おはようラヴェルさん。っても、もうお昼だけど」

赤毛の少女が、大小二人。大は真っ直ぐな髪をうなじで切りそろえた姉のペーネーン、小さい方は曲がちな髪を伸ばして両側で束ねた妹のキリエだ。妹の方はこの村でも熱心な部類に入る啓発教義の信徒で、彼女たち自身も身なりを見れば決して裕福ではない（というか、彼と大差ない）というのに、スラムと呼んでよいヴォン・クラウスの中でも最も汚い場所に好んで住み着く隻腕の彼に食事を届けてくれていた。主にキリエの好意によるもので、ペーネーンは最初はあまり乗り気ではなかったようだが。

内容はいつも通り、丸パンと水で薄めた山羊乳、今日は胡桃まであった。パンについては一日分と称して、籠一杯分を作ってくれていた。ペーネーンが漏らした所によれば、キリエが本当に頑張っているのだという。

ラヴェルは内心、この好意についてどう受止めたらよいのか分からず困惑していたが、自力で食事を調達しようとすると残飯を溶かした汁一杯にまで後退してしまうので、有難くはあった。

「はい、じじ……あ！？」

こちらに籠を差し出そうとしたキリエが、転んだ。

キリエ自身は地に手を突いて何事も無かったが、丸パンを満載した籠が飛んだ。

籠は空中で回転し、上空に派手に中身をばら撒く。籠が落下を始め、そこに丸パンが殺到し……

「ラヴェじじすごーい！！」

キリエの声援に応えるように、ラヴェルは首尾よく受け止めた籠一杯の丸パンを手の上で揺らしてみせた。一つとしてこぼしてはいない。

「セーフじゃ」

「すごいすごーい！」

「はいはい達者ですこと……」

感嘆はしつつも呆れたように呻くペーネーンが、薄めた山羊乳と胡桃の乗った小皿を渡してきた。

「いつもすまんなお二人さん……じゃが――ん？」

ラヴェルは丸パンを噛み千切ると、そのまま咀嚼し、飲み下す。

籠を受け止めた時に既に違和感を覚えていたが、それが明確になった。

「パンの材料、変えたかね？」

「びっくりした？」

「おぅ、ほっぺた落っこちるかと思ったわい」

キリエが目を輝かせ、ペーネーンの袖を引く。何か許可を求めているのだろうか。

「……いいわよ」

「あのねっ！　今日はねー！　なんとー、小麦粉を使っているのでしたーっ！！」

「ほー、そりゃすごいのう！　旨いのも納得じゃ、ありがとな」

ペーネーンが折れたように許可を出すと、キリエは得意も得意といった顔で種を明かしてきた。確かに味は良く、礼を言うと彼は残りを口に放った。

違和感を覚えたといっても、要はパンが昨日までのそれと段違いに軽く、柔らかかったというだけのことだ。いつもはライ麦や燕麦の粉にふすまを混ぜて焼成されたものだった彼女たちのくれるパンが、小麦粉を含んだものになっていたということになる。小麦粉など、市場での価格を考えれば彼女たちが到底手を出せるような代物ではないはずだが、それを口にすべきか、ラヴェルは少々迷っていた。

「この小麦粉はですねー、キリエが思うに、きっと神様が、ラヴェじじの面倒を一生懸命見ているキリエのために授けてくれたものだと思うんだー」

「ほー、そりゃあもう、ありがたいねぇ」

「ちゃんと神様に感謝して食べるんだよラヴェじじ！」

「うんうん、最初の御方に栄光あれじゃ」

「ほら、そろそろ行くわよキリエ！」

キリエと他愛もない問答をしていると、ペーネーンがキリエの襟

首を掴んで引き寄せた。何やら急いでいるらしい。

「んー？　どうかしたんか、ペーネーン」

「朝ね、キリエが沢から怪我人を連れてきたの。その人も看なきゃ行けないから……ちょっと急ぐわ。じゃあね、ラヴェルさん」

「じゃーねーラヴェじじー」

「そんじゃーまたのー」

ペーネーンに引かれて去ってゆくキリエに手を振りながら、ラヴェルはあることを思い出していた。

「いかん、今日出て行くはずじゃったのにお別れを言い忘れた」

ただ、彼は自分を薄情者でないと強弁するほど自惚れてはいなかった。彼女たちに感謝はしているが、別れの言葉を言い忘れた程度で気の咎める所など無い。その程度には、余計なものを切り捨ててきたつもりだった。

王国全体を騒がせるような事件は毎日起きているといっても過言ではないが、先週の妖獣出現は、特に騒ぎになった。要因は幾つかあるが――

まず、王国本土に妖獣の侵入を許したこと。

次に、その妖獣が人間に被害を出したこと。

続いて、その被害の内容として選抜訓練の途中だった訓練生９８０、および教練騎士５５の計１０３５名の内、６６４名の死亡・行方不明という、戦時を除いた王国近代史において前代未聞の大惨事

を招いたこと。
最後が、事件の収束の詳細が不明――つまり誰が妖獣を倒したのか分からないということだった。
最寄のガフェシ基地を根拠地とする騎士団が事後処理――この場合、教練騎士や従士たちの遺体の収容や記録、周辺住民への聞き取り調査、関係機関への各種照会、妖獣の巨大な死骸を解体処分し、研究機関の要請があれば一部を試料として保存することまで含む――に出動したのはもちろんだが、一地方基地ではとても処理が追いつかないため、周辺の騎士団から大隊規模で人員が出向くこととなった。
アーストス大隊も、そうした仕事に狩り出された、少々不運な部隊の一つだった。

「……面倒でも設営した方がいいな、間借り出来そうな所が無い」
「ま、仕方ありませんね」

車を降りると、カロナン・アーストス重騎士は嘆息した。彼の副官も眼鏡の位置を直しつつ、それに頷く。
年齢は四十歳前後、白髪がかなり混じった頭髪にはストレスの影響も大いにあるだろう。体型は少々肉付きが過剰か、整えた髭は任務続きで乱れかけていたが、それでも采配は抜かりない。采配というには、このような貧民村を拠点としての調査任務というのはいささか見劣りするものの。
判断を伝えると、続々到着しつつある部下たちはそれに従い手際よく設営の準備を進めた。装備は念のため、最大限の備えよりは少しばかり軽度ながら、対地飛行爆弾射出架五基、対装甲機関砲十二基など、大型妖獣の数頭程度は余裕を持って駆除できる程度のものを持ってきていた。兵科も小規模ながら一通り揃っている。
カロナンとしてはこの出動は大いに不満を持つ所だった。平時に重装備の訓練が演習場以外で可能、というのはちょっとした旨みだ

ったが、無残に潰された三年振りの長期休暇に見合う報酬ではない。
そこに追い討ち、ではないが、騎士団領から王国へ積荷を運ぶ途中の民間商社のトラックが一台、消息を絶ったらしく、こちらも調査するよう要請が届いていた。

「まさかまだ妖獣がいて、そいつがトラックを襲ったとでも言いたいんでしょうかね」
「……そうかもな」

彼を伴いそのまま歩いて設営現場まで向かうと、何やら強く言い合う声が聞こえてきた。

「なぁ、頼むよ、力尽くで引っ張って行きたくはないんだ」
「もうちょっと待ってくれるだけでいいんですっ！　そしたら帰ってきますからぁ！」
「そのお爺さんだって分かってくれるよ……別にここにお城を建てたい訳じゃなくて、テントを張れるようにさせて貰いたいだけなんだ、な？」
「もう少しだけ！　あと五分でいいんです、お願いだから！」

重機の傍で、癖の強い赤毛を頭の両側でまとめた少女が、彼女にしゃがんで目線を合わせて応じる従士と何やら問答を繰り広げていた。

「おい、そこ！　何しとるんだ！」
「あ、重騎士殿……」
「説明せい」
「ハ！　……この子が、ここの……この瓦礫の山に住んでる老人が今たまたま出かけているので、帰ってくるまでこれを取り壊さないようにと懇願してきまして……」

カロナンたちの前には、割れた窓ガラスや樹脂の雨樋、工事用だったと思しい穴だらけになった大きな防水布、赤錆でくまなく覆われたバス停の標識、大量の朽ちて使い物にならなくなった砕けた漆喰の欠片の山など、資源にも燃料にもならない、どうしようもない部類のゴミの山だった。産業廃棄物でも打ち捨てられているのか、僅かながら今まで嗅いだこともないような奇妙な刺激臭まで漂っていた。

ゴミの山から視線を外し、真剣な少女の眼を観察して、質した。

「……これがかい、お嬢ちゃん」

「そ、そうです、あの、私！　キリエ・アールネと申します！！　ここは、ちょっと……汚くて臭いけど、ラヴェルっていう片手のお爺さんが住んでるんです！　だから……その……と、取り壊さないで！　ください！」

少女は言いよどみつつも余所に視線を泳がすことも無く、懸命に拳を固めて主張している。

「よし」

よし、と言っただけの筈なのだが、少女の顔つきが喜びの兆しに緩む。

「ちょっとあっちで話そうか？」

「……？」

重騎士の意図を測りきれないのか、少女は小首をかしげつつもその誘導に従い、何処かへと歩いていった。

彼の副官はそれを気まずそうに見届けると、帽子のつばを下げて

視線を逸らし、従士たちに瓦礫の山に手をつけるように命じた。彼女の陳情に耳を傾けていた従士はいたたまれない様相でそれに従い、重機に乗り込んだ。大隊を統括する”重騎士”の位を授けられているカロナン・アーストスだが、或る醜癖を持ち合わせており、それは時折、こうして露になった。

この村は納税能力の観点から、王国には存在しないことになっている。つまり、村民である少女も王国としては”存在していないもの”であり、大隊統括騎士への諫言は”存在しない人物への虐待を理由とした反逆”として扱われることになる。彼は実務において有能な騎士であったが、そういったことの扱いにも長けていた。

副官も従士の男も、カロナン重騎士がそうした論理で劣欲を遂げてきたのを知っている。彼らではそれを止められないことも、知っていた。

4．老人ラヴェル

（主よ）

「ん？　あ、起きた」

霊剣の声で横たわっていた男が目を開けるのに気づき、グリュクは小さく喝采した。彼は後ろに手を突いてゆっくりと起き上がると、辺りを見回しつつ質問してきた。

「ここは……俺は……誰が助けてくれたんだ」

低温による体調の異常も、記憶の欠落などもないようだ。グリュクは努めて落ち着いた声音で彼に実情を告げた。

「沢の近くに落ちていたでトラックから救助しました。ここはすぐ近くのヴォン・クラウスっていう村です」

「……そうか、あー……俺はロレント・コールイス、騎士団領の者なんだけど……家族に連絡したいんだが電話とかないかい？」

「……電話は多分ないと思います」

「あぁ……まぁ、最悪街道を歩けばいいか……」

ロレントと名乗った男は少々肩を落としたようだが、騎士団領ならば緩衝諸国の一つだ。出国幇助業者と合流できれば、彼を途中まで送っていくことも吝かではない。

キリエが案内してくれた彼女の家にはその姉と臥せっている母がおり、グリュクは肩身の狭い思いをしつつ、トラックから救助した運転手を連れ込んだのだった。老朽化が進んではいるが家には二階もあり、そこで臥せっている姉妹の母には既に了解を取っていた。窃盗か何かだと疑われていなければ良いが。

遠くの騎士団に勤めているという彼女たちの兄のベッドを使わせてもらい、鍋まで借りて煮沸消毒してから冷ました井戸水を飲ませ、ついでにキリエたちがラヴェルという老人に渡すのだといって作っていたパンを少々分けてもらい、水に溶かして食べさせた。

幸いその程度の物は飲み込んでくれたので、あとは体調が回復すれば、最悪歩いて最寄の都市まで行くこともできるだろうと見通しをつけた矢先の出来事だった。

「ただいま……あ、起きたんだ」

「あ、お帰りなさい」

それとほぼ同時に、キリエの姉のペーネーンが帰ってきた。

「あ、家の方？　すみませんお邪魔してます」

「……あんまりお持て成し出来ませんけど」

ロレントが声を掛けるが、彼女の返事にはやや棘があった。魔女でない人間に対して濫りに魔女の知覚で感情を読まないように気をつけていたが、そうするまでも無く、明らかに不機嫌な様子だ。グリュクと彼が連れ込んだ男をあまり歓迎していない様子だったが、それだけではなさそうだ。そう言えば、出る時は一緒だった筈のキリエがいない。

「あれ、妹さんは？」

「何かの事件の調査らしいんだけど、軍隊が来て……あーもう、何から話せばいいのか」

苛立ちつつも話してくれたペーネーンの説明によれば、キリエは最近ある老人と親しくしており、彼が住処にしていた村の南のゴミ山が騎士団の用地確保のために撤去されそうだったので、彼が留守

の間だけ番をするのだといって残ったらしい。

「ったくもー、会って十日かそこらだってのに入れ込みすぎなのよあの子は……母さんにも心配掛けるのが分かんないのかしら」

掌底を額に当てながら愚痴を呟く少女を見て、ロレントが居心地悪そうに再び毛布を被る姿に同情していると、玄関の戸を叩く音がした。ペーネーンはため息を付きつつ、玄関へと早足で戻って勢い良く戸を開いた。

「キリエ！　もうあんたはいっつも――」

ペーネーンの声がそこで途切れる。扉の外にいたのはキリエではなく、見覚えのない姿だった。ペーネーンに近い年の頃だろうか、少年だ。彼女より背は高く、黒髪、黒目の鋭い印象を与える造作が、頭から被った粗末なマントの下から覗いた。

「失礼、悪いけど人違いだよ」

「！？　……あ、ど、どなた！？」

「赤い髪のあなた……グリュク・カダンさん？」

粗末なのはマントだけだったようで、彼がその切れ間から手を伸ばしてグリュクを示すと、厚手の革の上着にスラックス、登山用らしき頑丈そうな靴という、この村に於いては少々場違いな小ざっぱりした服装が現れた。手荷物は、紐で口を括るだけの簡素だが頑丈そうな荷袋を下げている。

「……君は？」

「リンデルって呼んでください。ソーヴルのゾニミアさんからのご依頼、って言えば分かりますよね」

「あぁ……！」

グリュクは合点が行くと、玄関に寄りかかったままの少年に歩み寄った。

「良くここにいるのが分かったなぁ……俺はどんな人が来るか知らないから、どう連絡を取ったらいいのか、ちょっと困ってた」

（そこが御辺の汚点その2だ）

「ま、そこは仮にもプロですんで……あなたの場合は村の人に”剣を帯びた赤い髪のノッポ”の居場所を聞けば、すぐでしたけど」

「……もう少し目立たないようにすべきかな」

（そうするべきであるな。具体的には吾人の指導する低身長化プログラムを推奨する）

「（黙れ）」

グリュクは、彼の王国脱出を補助しに来た筈のこの少年も魔女ではないのかと思っていたが、霊剣の声は聞こえていないようなので、そう装っているのでなければ、彼は魔女でないと考えて良いだろう。霊剣によれば、魔女の国にも魔女でない者はいるらしい。考えてみれば、そうでなくては入国もままなるまいが。

「ホントは今日は止めとこうかと思ったんですけどねー。何故か騎士団がこんなとこまで来てるし、ゴミの山を巡って初等生くらいの女の子と押し問答してるし……」

「！　それって、赤毛の、二つ結びの！？」

「え、あ、そうだったかな……？」

「何やってるのよあの子は……！！」

騎士団が来ているという情報にグリュクが反応するより早く、ペーネーンが彼の言葉に強い関心を示すと、リンデルはそう答えて玄

関から位置をずらした。そこを、ペーネーンが走り抜けてゆく。

（主よ、何やら予感めいたものを覚える。吾らもキリエを探すぞ）

「ああ、じゃあリンデル、悪いけど、ちょっとここで待っててくれるか？　すぐ戻る」

「え、ちょっと！？」

返事を待たず、グリュクも玄関を飛び出した。ペーネーンは村の南のゴミ山と言っていたか、もしもキリエが魔女であることが発覚すれば、騎士団が彼女をどう扱うか分からない。

「……あー、今出てった彼女のお父さんで？」

「いや、俺は昨日車で崖から落ちた所を今の赤髪の彼に助けられた騎士団領民なんで……完全に赤の他人」

「ややっこしい事になってんなぁ……」

「んなこと俺に言われても困る……」

姉妹の家に残された他人同士の男と少年が困惑したままどうすることも出来ず、その状況を受動的に保っていた。

キリエは困惑していた。老ラヴェルの住処を守るために騎士たちに談判をかけたのはいいが、先ほどやってきた位の高そうな騎士は、先ほどから彼女にその話をさせてくれなかった。話せないまま、彼に連れられて村の東の外れを通り過ぎ、森に入ってしまっている。

「騎士さま、あの、お爺さんの家なんですけど……」

「うん、大丈夫だよ、とりあえず、ここら辺でいいかな？」

そういえば、この騎士の名前も聞いていない。以前紙芝居で見た騎士の物語では、高位の騎士は万が一にも恥ずべき行いを取らぬよう、初対面の相手には真っ先に名乗ろうとすると言っていた。

いや、きっとただ忙しくて忘れているだけで、もうすぐ慌てて名前を教えてくれるに違いない。キリエは既に名乗っているのだから。

ただ、何やら彼はキリエの両肩に後ろから手を掛け、体に触れてきた。襟をはだかれ、呼気を直に肌で感じ、その時始めて何かがおかしいことが分かる。騎士は彼女の襟首の前側に指を挟みこむと、着衣を一気に破り去り、そして突然彼女から手を離し、叫び声を上げてのた打ち回った。

（霊剣と霊剣の主の参上なり！！）

「キリエちゃん、無事か！」

突然変転する状況が飲み込めなかったが、耳にした二つの声には聞き覚えがあった。

「……グルクさん？」

キリエは、すぐそこに呼吸を荒らげて立っている彼を認識すると、その名を呼んだ。

着地し、少女の無事を確認する。

泥の上でのた打ち回っていた騎士は、顔面にグリュクの飛び膝蹴

りの直撃を受けて打った鼻から血を滴らせ、よく聞き取れない罵声を並べながら走り去って行った。
息を切らしかけつつも、惨事を未然に防いだという安堵と高揚、そして少女の窮地を発見してからの全力疾走で上昇した代謝で心臓が高鳴っている。

「はー……間に合ってよかった……」
（危うい所であった、御辺を見直したぞ）
「そりゃどうも……」

霊剣は素直に褒めているらしいが、それを喜ぶ気にはなれなかった。見ると、キリエは引き裂かれた衣服を寄せ集めるようにしながら彼の方に近寄ってくる。

「グルクさん……確かに騎士さまに服破かれちゃったけど、顔をけるのはひどいよ……すごく痛がってたじゃない。キリエも一緒に行くから、謝りにいこうよ？　偉い騎士さまだから、きっと許してくれるよ」
「……いや……違うんだ、キリエちゃん。これは……そうじゃなくて」

この年頃の少女に逃げ去った騎士の醜行について説明することなど出来ず、グリュクは取り敢えず、上着を脱いで彼女に着せることでその場を凌ごうと考えた。だが、

「何が違うのかねぇ……？」

言葉と共に、殺気が森に轟く。

（主よ、身を守れ！）

その指示とどちらが早かったか、グリュクが鞘から抜き放った霊剣の刃が、死角から飛来した脅威を弾いた。

「ッ！！？」

その脅威は黒い。先日目撃した”黒体”に通じる黒さだ。動きは速く、かろうじて視界の端に、黒く蠢くその像を捉えることが出来ただけだ。村の東の森の一角、グリュクの周囲には、怒気と魔力と殺気が充満していた。以前ミルフィストラッセが言っていた、魔女の知覚を欺く然るべき手段、その一つというものだろうか。

黒い力は立て続けに襲い掛かってきた。捉え所が無いようでいて、明確な強度と意志を内包した力だ。黒い、水の流れに墨壷を落とした様に揺らめく、細長い流れ。それはふと、蝶か何かを思わせるように空中に揺らめいてから、突然目に止まらぬほどに勢いを増して襲い掛かり、弾かれるとまた大気に回遊し始めるということを繰り返していた。

今度は全て、術の威力を込めた霊剣の刃で弾き、あるいは体を捻って回避する。霊剣の刃を伝わってくる強烈な衝撃を堪えつつ、脅威の出所を何とか探ろうと、辺りを見回し、耳を澄ませた。

「ほーぅ、”髭”を凌ぐかい」

黒い威力が襲来する前にもちらと聞こえた、間延びした老人の声が聞こえた。声音で判断する限りはそこには何の感情も乗っていないが、それは森に反響する殺意を否定するものではなかった。

（所在が掴めぬ……主よ、今暫し耐えよ、何とか吾人が奴を捉えてみせる！）

「なら”指”でどうじゃ」

再び声が聞こえると、今度は黒い大きな塊が行く手の正面から高速で突撃してきた。回避が間に合わずに霊剣の刃で受止めるが、一際大きな衝撃を受けて、グリュクは踏みとどまれずに大きく後ろに弾き飛ばされた。その先に待ち構えていたように出現したもう一つの黒い塊に、飛ばされた勢いを利用して遠心力まで乗せた渾身の一撃を叩きつける。

だが、威力に反して攻撃に対する耐久力は無いのか、黒い塊は霊剣の刃を受けるとあっさりと両断され、そして幾つもの黒い奔流に分かれて飛び散ると全てがグリュクを目掛けて殺到した。

「（!?）」

漆黒よりも黒い破壊の束が、獲物に喰らいつく肉食魚の群れのように突き刺さる。そしてそれも束の間、強く煌いて轟音と共に爆散した。

剣士とその携えた霊剣が、光の爆炎の中から無事な姿を現す。

（反応障壁か……善くぞ！）

グリュクの精神に、霊剣の驚きが伝わる。自分の発想によって手を加えた術だったが、上手く発動までしてくれたようだ。障壁を生成する術の構成を変更し、外層部分を強い衝撃で爆散するようにして発動したものだ。

霊剣の刃の強化に続けての魔法術の使用で体の所々に現れ始めた痛みを意識しつつ、相棒に催促する。

「ミルフィストラッセ、まだ見つからないのか！」

（今捉えた所だ！！）

今度は、霊剣ミルフィストラッセが術を念じ、発動した。頭痛に小さく呻きながら周囲を見渡すと、風が荒れ狂い、二人の周囲を旋回して壁を作り始めた。渦巻く風が砂塵を巻き上げ、目に見える暴威となって周囲の大気をかき乱していく。少しすると耳鳴りが始まり、体が周囲の気圧の低下を知らせて来た。

「……これって……俺たちは竜巻の中にいるのか？」

（うむ。大気の流れを操作する術の、一つの派生形なり。だが単なる竜巻ではないぞ）

グリュクにも、この竜巻がただの空気の渦ではなく、電気や光のようなものを伴ったエネルギーの風であることが分かった。それに付随して気づいたが、先ほどから付近を覆っていた坩堝の中身のような煮え立つ殺意の渦が消え去り、魔女の知覚が比較的尋常に機能するようになっている。

（不覚にも、吾らは術中に嵌って居った。知覚を妨げ、己の術の効果を増幅させる一種の魔法術結界に閉じ込められていたのだ）

霊剣はそう語ると竜巻を解除し、グリュクの視界も少しずつ晴れていった。新たに軽く風を起こして巻き上がった土煙を排除すると、そこには一人の老人が佇んでいた。

長く伸ばした白髪と白髭、顎下まで延びた黒い眉と右目の眼帯が特徴的だった。服は薄汚れているが、左手に握った杖と同様、元は高級品であるように見える。そして更によく見ると、右腕が無い。

そんな老人であるにも拘らず、恐るべき殺意が全身から放射されていた。グリュクと霊剣は、先ほどの超絶的な殺気と圧倒的な魔法術による連携攻撃を行ったのが、目の前のこの老爺であることを確信していた。

（主よ、恐らくこの老人、卓越した魔女である。御辺が初めて刃を交える魔女がこれほどの使い手になろうとは、予想しておらなんだ）

「なかなかどうして、やるもんじゃ。何でお前さんのような使い手がキリエを襲おうとするのか分からんねぇ」

霊剣がそこまでの術者と評価したその老人が悠々と述べると、その後ろからキリエが姿を現した。老人の術に翻弄されて気に掛ける余裕を失っていたが、どうやらずっとそこにいたらしい。

そのキリエが、その右袖を引いて老人に告げるのが聞こえた。

「ラヴェじじ……グルクさんはキリエに何もしてないよ？」

「何……じゃと……」

その殺意と共に言葉を失い、急激に老人が凍り付く。

キリエを含めれば、王国のこの地に、戦時でもなく密命を帯びてでもなく、在ってはならない筈の魔女が三人も、ほぼ偶然の下に邂逅を果たしたことになるのだが。

「いたぞ！！」

不意に聞こえた大声に振り向くと、一団の人々が殺到しつつあるのが目に入る。もはや何の障害も無くなったので魔女の知覚も動員すると、多くの敵意と焦燥が感じ取れ、いくつかは森を迂回してグリュクや老人を挟み込むように移動していた。村にやってきていた騎士団だろうか、危難を退けるためとはいえ小規模ながら竜巻すら生成したのでは、軍隊ならばその不自然さに魔女の存在を感じ取っても不思議は無いだろう。

老人はキリエを左腕だけで器用に抱え上げると、グリュクに向かって告げてきた。

「グルクというたな、キリエはわしに任せて、逃げるがええ」
（主よ、ここは好意に甘える他あるまい）
「さっきまで殺意全開でこっちを嬲ってた爺さんの好意に！？」

霊剣の言葉に納得の行かない点を叫びながらも、グリュクは魔法術で突風を起こして迫り来る騎士の一団の足を止めると、霊剣と共に森の奥へと走った。

5．剣の来歴、魔女狩りの歴史

相当な距離を走り、何とか騎士たちを引き離すことが出来た。
腐葉土の上に固まった雪が残り、時折枝から滑った雪が落ちて音を立てる。漠然と森の中に佇んでいたが、霊剣にもすぐには方策は出ないらしい。痛みもまだ全身に染み込んだように残っており、これ以上魔法術を使うのは、すぐには避けたかった。
僅かな路銀などを入れた背嚢は、キリエたちの家に置いて来てしまっている。村との距離もかなり開いており、騎士たちが警戒を続けているであろうその周囲には近づくことさえ難しいかも知れない。

「どうしよう……」
（例の少年と合流したい所であるが、難しかろうな……）

霊剣と共に、暫し途方に暮れる。最悪、ミルフィストラッセがいれば他に何も無くとも飢え死にすることだけは無いだろうが。

「お前と最初に出会った時の、大穴を開ける術があっただろ。あれを使って穴が掘れないか？　行くにしても、戻るにしても脱獄みたいに……」

霊剣に提案すると、彼は少し迷ったような様子を見せてから、告げてきた。

（……実を申せば、あそこまで巨大なものを掘るのに相当な力を消費した。あの時は御辺は魔力を持っていなかった故、緊急手段として吾人の中に眠る戦士たちの記憶を圧縮して、差分を魔力として消費し、発動したのだ）
「え……」

内容がすんなりと理解出来なかったこともあるが、霊剣の言葉に引っかかるものを覚えて、訊ねる。

「それって……良くないんじゃないのか……？」

（良い筈はない。だが、あそこで待っていてはあと何十年あのままだったか分からぬ。あの場は何としても、御辺の力を借りて旅を再開せねばならなかった）

「どうしてだ。そこまで大切なのか、旅っていうのは」

（……一人の人間が一生の内に得られる記憶や知識、思い出……それには、人が有限の存在である以上は、限度がある。それに、人間は生まれ育った環境である程度その有り様の幅が決められてしまうものだ。記憶だけではなく、それを得るための視点と視野までもが限定されるのだ。中にはそうでない者もいるが、それも数えるほどでしかない。

ならば、どうしても限界を超える必要が出てきた時、どうするべきか？　その問いに対して或る一人の魔女が打ち出した答えが、吾人だ。

吾人は、記憶を蓄積することが出来る永久魔法物質から構成された、云わば書き足しが可能な音盤のようなものだ。主の記憶を受け継ぎ、主が世を去るか、吾人を手放すかすれば、次の主を探して時間を共有する。次の主の記憶もまた共有し、蓄積し、受け継いでゆく。

これを幾度も繰り返せば、幾多の戦士が死ぬまでに得た経験、記憶、知識の全てを受け継ぎ続けることが出来る。理論の上ではな。

それを用いて手助けをすれば、健常な魔女ならばまず戦で死ぬことも無いゆえ、益々生き永らえ、受け継ぎうる知識が増える。彼の魔女は、この繰り返しの果てに、次なる段階があると信じていた。

これは、擬似的に人生を繰り返すことが出来れば一人の人間がどこまで強くなれるのかという実験とも言い換えうるかも知れぬが…

……）

腰に下がった霊剣を見下ろしながら、もはや言葉が思い浮かばなかった。十八歳までは辺境の教会で、教士たちの手伝いをしながら普通の啓発教徒として生きてきた彼に、霊剣の持つ背景は巨大すぎるものだった。分かるのは、霊剣が利己的な目的が多少はあったとはいえ、彼を救うために貴重で大切なものの一部を捨てたということだった。

（吾人を生み出した魔女が思い立った発端は、単に己の無力を嘆いてのことであったのだがな。そしてその”果て”に至った吾人がどのような存在となるのか、それを知りたいと言う好奇心も、あったのかも知れぬ。まぁ、当人は当に世を去り、吾人の中のその記憶は何十人分もの内の一人分に過ぎぬゆえ、今では少々考える所もあるが、な……）

「ミルフィストラッセ……」

もはや彼の銘を呼ぶことしか出来ないグリュクの知覚に感があった。その方向に向き直ると、その姿を認めて驚く。

「おーい、グリさーん！」

マントを羽織った黒髪の姿は、出国幇助業者のリンデルだった。だがそれより、グリュクには彼がここに居ること自体が驚きだった。

「グリさん、こんなとこまで来てたんですか……」

「何でここに！　……ていうかグリさんってどういうこと」

「すいません名前が発音しづらくて……何か騎士連中が魔女がどうのと騒ぎ出してたから、こりゃ不味いと思って探し回ってたんですよ……あ、今あの家に残ってるのは多分怪我人のおっちゃんだけの

筈です」
「手間掛けたね……ただ、まぁそれは良いんだけどグリさんはちょっと……」
（まぁ良いではないか、グリさん）
「（へし折るぞこの野郎）」

霊剣が再び軽口を飛ばしてきたので、多少安堵しながら胸中で脅迫する。そういえば、キリエも彼の名前を上手く発音出来ないでいたが、王国東部以東ではかなり聞き慣れない部類に入る名前なのかも知れない。

「さっきは村人に聞き込んだので納得いったけど、今度はどうやって見つけたんだ？」

グリュクが尋ねると、少年は懐から掌程度の大きさの金属の円盤を取り出してきて、それを指した。

「グリさんが魔女だって聞いてたから、逃がし屋で使う魔女の探知機を持って来たんです」

大きな方位磁針のようではあるが、膨らんだ中央のガラスに覆われた部分には、盤の中心を軸に揺れる環状の部品と、何やら変形を繰り返して知恵の輪を思わせる部品が動いているのが見えた。
グリュクには読み方は分からなかったが、この二つの状態の組み合わせから対象の位置を特定するのだろう。最初に会った時も、聞き込みと併用したのかも知れない。

「他に二人も魔女がいるなんて、想定外でしたけどね……お陰でちょっと手間取りまして」
（こやつ、御辺の背嚢は持っておらぬのか？）

「あ、もしかして俺の背嚢は……」
「あれって騎士団で使ってる奴と同じでしょ？　下手すると探られるかも知れないし、僕が持って歩く訳にも行かなくて……村中騎士だらけ、村の外も騎士だらけで、この探査盤だけでも見つからないように持ち出すのはかなり大変だったんですよ……ご勘弁です」

郡庁の役人がくれた偽造出国許可証こそ肌身離さず持っていたが、背嚢の中にはマントや懐中電灯など、失くしては不便な私物も入っている。少ないとはいえ王国通貨も入っているので、あれを置き去りにしたままという事態は避けたかった。

（そういえば主よ、あの老爺は無事にキリエを連れ帰せたのか？　二人ともが魔女である以上、老爺が騎士たちを皆殺しにでもしない限り、達成は難しくはあるまいか）
「あぁ……どうしよう……」
「え、そんなに大事なものが入ってました？　すいません」

霊剣の指摘に再び懸念が浮上し、魔法術の使い過ぎとは異なる由来の頭痛が押し寄せてきた。

王国では、魔女狩りの科学的手法が確立されて久しい。
魔女狩りの起源は王国中世における啓蒙者たちからの要請によって人間たちが主体となり、妖族と交わった人間の子孫＝魔女を絶滅させようとする動きであった。
だが中世末期以降、実際には魔女でない者をそうと仕立て上げて民衆を扇動することで謀殺し、その財産を奪うなどするという事例

が目立ち始めた。危機感を感じた啓蒙者たちがこれを大きく是正することで、科学的な裏付けなくして魔女を告発することは出来なくなった。

その歴史的経緯の中で発達してきたのが、血液サンプルを用いた魔女因子保有者の判別手法、そして、”魔法由来残留物質”の分析技術だった。

魔法物質とは、魔女が魔法術を用いる際に発生させることのある物質を指す。これは仮想質量と呼ばれる質量に準じた振る舞いを見せる性質こそ持ってはいるが、安定性が通常の物質と比べると低く、何らかの手法で維持されない限りは短時間で崩壊、消滅することが古くから知られている。

しかし近年、予言されていた周期表を埋める元素の発見が相次ぎ、それと関連して、魔法物質は崩壊時に極微量ではあるが通常の物質を跡に残すことが判明した。これらの”魔法由来残留物質”は水素、遊素といった原子量の小さい元素が多いが、これらの元素を検出、比率を分析することで、魔法術の使用の有無や更に詳しい情報を、ある程度の精度を以って判定することが出来るようになったのだ。

アーストス大隊の技術員たちが検出・分析したのも、そうした”魔法の残り香”の一例だった。

「遊素多数、間違い無いそうです」

「この季節の東部であんな竜巻を起こすのは、啓蒙者か妖族でもなけりゃ、奴らくらいだろうしな」

「……」

カロナンは、彼の副官と共にテントの表で分析報告を受けていた。彼も下手に言い繕うことこそしなかったが、彼が衛生従士に鼻の骨折の治療を受けたことを知った者は各々が皆、どのような天罰がその身に降りかかったのかを概ね事実に近い形で想像していた。

重騎士は鼻を鳴らせず少々歯がゆい思いを煩っている所に、更に報告が舞い込んだ。

「行方不明だったトラックを沢で発見しました、運転手は微量の血液以外影も形もありませんでしたが、形式・登番共に届出と一致するそうです。

積荷の小麦粉が近くに隠すように積み上がっているのもほぼ同時に見つかりまして、トラックからは製造過程に由来しない焦素や焼銀石などが微量。

ただ小麦粉の方は特に何も出ず、袋に付着した指紋を照会中です。村民から採取する必要がありますが、少々時間がかかるかと」

「ふむ……」

カロナンにとって、警察の真似事までしなければならないのは愉快なことではないが、彼はどちらかというと、彼の楽しみを邪魔して顔面に膝蹴りまで入れた、あの赤い髪の男のことを考えていた。あまり注意深く観察していた訳ではないが、帯剣した長身の青年。左に立っている副官が、仕事では間違いなく有能であるカロナンの歪めた表情からその内心を察して苦々しい思いでいることを、彼は知らないが。

トラックからの残留物質の検出は、事故を魔女の仕業と考えるべきだということだろう。だが、一方でそれらが小麦粉から検出されないということは、トラックは何らかの原因で積荷の小麦粉を失ってから攻撃を受けたことになる。そもそも小麦粉などを狙う動機は？　村民に魔女が混じっている可能性と、魔女が外部の者である可能性。そして、運転手が僅かな血痕を残して姿を消していることも総合すると、やはり村民を洗うのが堅実だろう。

カロナンの指示を伝える副官の言葉で、非公式村落ヴォン・クラウスとその周辺に展開していたき騎士たちが、魔女を探し出すべく動き出した。

先ほどから続く酷い匂いに、顔を顰め続けている。

「（ミルフィストラッセ、臭いを軽減する術とかないか）」

（あっても教えぬ。この光輝同様、長時間制御しつづけねばならぬ術は御辺にはまだ早い）

「（お前はいいよな鼻とかないから……）」

（御辺と感覚は共有しておるゆえ、臭気もばっちり分かるから安心せよ！　その上で言っている）

「（……そうかい）」

霊剣の反駁に適当に相槌を打つと、通路を右に曲がる。幸い、村の東まで流れ込んでいた川に架かっていた鉄橋の下に下水道への入り口があり、グリュクたちは入り口の鉄柵を壊してそこに進入出来た。リンデルには頼み込んで、単独で地上から村へと戻ってもらうことにしたが、少々恨まれたかも知れない。

ヴォン・クラウスの生活排水が流れ込んでいるため、慣れていないグリュクにとって悪臭は想像を絶したが、それでも霊剣が正確な距離と方角を記憶してくれていたお陰で、村の南に当たる位置まで迫ることが出来た。

照明は霊剣が魔法術で弱く光る魔法物質の塊を生み出して維持しており、光量を小さく抑えているのはもし万一下水道にまで展開している騎士などがいた場合、発見される危険を減らすためだ。魔女の知覚では熱や微弱な電流といった生物的な起伏に乏しい下水道内の地形を把握することは難しいので、この場合は頼れなかった。

もはや鼻が麻痺してきた気がするが、それでも出来るだけ口腔で

の呼吸を意識しつつ、ミルフィストラッセに問いかける。

「（どうにかしてキリエちゃんの安否は確認できないか）」

（土砂岩盤の遮蔽力を甘く見るな、ここからでは無理なり。彼女一人だけで良ければ、あの老爺と共にある限り心配はなかろうが……もし騎士団の機材が十分に整っておれば、朝に沢で下ろした事故車に残った魔法術の痕跡から、魔女捜索の手を強めたやも知れぬ）

「（……善意が裏目に出るって空しいな……）」

（人生とはそうしたものだ）

霊剣の言い回しに口を尖らせつつ、グリュクは静かに下水道内に設置された保守点検用の歩道を歩きつづけた。

グリュクも霊剣も与り知らぬことではあったが、騎士たちは下水道内の捜索は「魔女が地の利を踏まえていて苦戦を強いられる恐れがある」として、地上の捜索を優先しており、彼らが下水道内で発見される恐れは、今の所はまだ小さかった。

6. 伏魔兵器

そろそろ日が傾きつつあった。

村民を陣地に呼び集めるというので何事かと思えば指紋採取だというので、ペーネーンは胸中で騎士という人種に対する心象の格を更に下げた。普段は無いもの同然に扱っておいて、自分たちの都合で必要な時だけ寄って来るのが気に入らない。どうせ彼らは非公式の村の戸籍などは把握していないのだから、臥せっている母と騎士団領の運転手はそのままに、自分だけ赴いて適当に済ませたかった。

村の中央の広場に着くと、人当たりのよさそうな若い騎士が――実際は騎士より下の階級群に位置する従士なのだが、ペーネーンは軍隊のそうした瑣末な呼び分けに興味は無かった――、何やら不恰好な器具を使って列に並ばせた村人たちの指を軽く挟みこんではすぐ離し、次の指を咥えさせてはまた離しを続けていた。あの機械で、指紋を調べているらしい。

ペーネーンの番が来て、彼女は精一杯の不承の表情を作りながら、指を差し出した。男が彼女に指の力を抜くよう指示して手の中の器具で人差し指を挟むと、器具から小鳥の囀りに似た音が鳴った。ただし音量はかなり大きく、周囲の騎士たちが弾かれたように反応して、即座に二人が彼女を両脇から羽交い絞めにして引きずりつつ、手錠と首輪をはめ込んできた。

「ちょっと……何するのよこのバケツ野郎！！」

首に嵌められた環がかなり太く重いため、声が出しにくかったが、ペーネーンはそれでも彼女を易々と運ぶ男たちに精一杯の罵声と蹴りを浴びせた。一緒に指紋を取られていた周りの村人たちは、騎士たちを恐れて目を逸らすばかりだ。致し方のないことではあるが、それでも少女は悔しさに浮かぶ涙を流さないよう歯を食いしばりな

がら、足掻いた。
　両腕を掴まれたまま連れ込まれたのは幾重にも幕の張り巡らされた重厚な深緑色のテントで、どうやら騎士たちの本陣のようなものらしい。複数の幕で間取りのように仕切られてはいるが、地面はそのままで、村の荒れた地肌が直接床になっていた。
　やや狭く仕切られた区画に運び込まれると、今度は粗末な木の椅子に縛り付けられた。周囲の物々しさと慌しさはいや増すばかりで、騎士たちが入れ替わり立ち代り訪れては、何か使い道の分からない機材を置いて去ってゆく。虚空を睨んで何とか気を張っていたが、どこまでそうしようとも、手錠と首輪で自由を奪われた十五歳の非武装の少女に対して、周囲に溢れているのは最低でも短棍で武装した従士たちだった。
　歯噛みしつつも足を上ってくる震えを止めることが出来ないでいると、一角から他の騎士と多少毛色の違う二人組が歩いてくるのが見える。見た所、二人とも四十歳の前後といった印象だ。

「この娘がか」
「はい、小麦粉の袋から出た指紋が一致しました。袋には触れていますが、ご覧の通り、魔女ではないようで」
「ふーむ」

　太り気味の騎士の方が立場が上らしく、やや背の高い方が小難しい言葉を伝えていた。そういえば先ほどから何か大型の電灯のようなものが四基ほど、青い光を鈍く点したままこちらに向けられているが、魔女かどうかを判別する装置ということだろうか？　小麦粉には心当たりがあるが、それでどうして騎士団が動いているのか？　分からないことばかりだったが、一つ、気に触ることがあるのははっきりしていた。”ご覧の通り、魔女ではないようで”。
　魔女ではない？　当然だ、なのに何故手錠まで嵌めるて椅子に縛る必要があるというのか。魔女などよりも、この騎士たちの方が味

方である筈の分余計に憎い。ペーネーンは、何があったのか鼻の負傷に手当てを受けているらしいこの位の高そうな騎士を強く睨みつけた。

「尋問は私が直接やろう……君は調査の指揮を続けてくれ」

その台詞に悪寒を覚えると、他の騎士たちが青い電灯を持って立ち去り、小太りの騎士と二人でその場に残された自分の顔から血の気が引くのが分かる。

「……ペーネーン・アールネというそうだね。我々は騎士団領の民間トラックを襲った魔女を追っているんだが……君と魔女との関係を聞かせてもらおうか」

「魔女なんて知りませんッ」

出来る限り憎々しげにに吐き捨てたつもりだったが、身動きすら碌に取れない彼女に対して、目の前の男の優位は明らかだった。物理的にも、精神的にも。

それをよく分かっているのだろう、騎士はじっとりと薄気味悪く張り付くような、厭らしい視線で彼女の全身を舐めつつ、言ってきた。

「でもねぇ、小麦粉の袋から君の指紋が出ている。あの小麦粉は、騎士団領の民間企業のトラックの積荷だったんだよ。そして、村のすぐ西の沢にはそのトラックが壊されて打ち捨ててあった。調べてみたら、魔女の仕業と出た」

ペーネーンは、トラックなどは知らなかった。沢に落ちていた小麦粉を目立たぬ所に隠し、ラヴェル老人に食事を届け、家にけが人が運び込まれて、キリエが何処かへ行ってラヴェル老人と共に戻っ

てきて、そしてここにいる。

「でも、君が魔女じゃないということは分かっているからねぇ、最低もう一人、君と何らかの関わりのある魔女がいないと、話が繋がらないんだよ、ペーネーン？」

「気安く呼ぶなブタッ！」

元から騎士という人種をあまり好きでなかったこと持ったが、馴れ馴れしく名を呼ばれ、思わず罵る言葉が飛び出してしまった。騎士の表情が一気に崩れ、

「ガキが！　優しく扱ってやればこうも調子付く！！」

こちらに掴みかかってペーネーンの髪を強く引き掴んで持ち上げてきた。やはり男の腕力は強く、上げるまいと思っていた悲鳴が漏れてしまう。

「うぅ……！？」

「お前みたいな粋がる小娘に大人しく言うことを聞かせる方法を、幾らでも心得ているんだ……先に躾けておいた方が良さそうだな」

他に誰も居ない空間で一方的に浴びせられる男の怒気と、荒い吐息が横から顔にかかる。泣けば余計にこの男を興奮させるだけだと、頭では分かっていたのに。

「よっこいしょ……」

すると、声と共に、室内で何かがゴトリと音を立てるのが聞こえた。騎士も驚いたのか、彼女を掴む手を僅かに緩め、辺りを見回していた。

ペーネーンも音の出所を探ると、男の向こう、ペーネーンから五メートルと離れていない距離で、地面から赤い何かが盛り上がっていた。赤い髪の男だ。確か今日の朝、妹が怪我人と共に連れて来た青年だった。

その彼が、口を開いた。

「あれ、ペーネーンちゃん？」

重い石蓋を持ち上げて目に入った光景は、またも彼の常識から外れていた。周囲の状況の確認も忘れ、管の内側の梯子を上りきって地上に全身を晒した。

さほど広くないその部屋は、四方を幕で仕切られているテントか何かの中だろうか。机が一つ、椅子が二つ。椅子の一つにはペーネーンが拘束されており、その傍に立つ騎士が彼女の髪を引き掴んで寄せている。

そして、どう見ても少女を虐げているその小太りの騎士には見覚えがあった。鼻の負傷は見紛う筈もなく、グリュクは激怒した。

「あんた……キリエちゃんを辱めようとしてた騎士だな！？」

「キリエが……！？」

グリュクの言葉に弾かれたように、ペーネーンは髪を掴まれつつも驚きながら騎士と彼とに交互に視線を振っていた。

（主よ……一刻も早く、この邪智暴虐の人非人を退治するのだ……！！）

「何を……！」

霊剣までもが酷く怒っているのが、その言葉と、柄から伝わってくる脈拍のような力の流れで理解できた。普段泰然を心がけているように見えて、意外と激情家なのかも知れない。

騎士は呻くとペーネーンを突き飛ばし、懐から取り出した拳銃を構えて引き金を引いてきた。グリュクは一足で間合いを詰めて左足を蹴り上げ拳銃の照準を天井へとずらし、そのまま足を下ろす反動を利用して上体の勢いを増し、騎士の左頬に渾身の右正拳を見舞う。

騎士は悲鳴も上げずに吹き飛び、部屋の隅に頭から飛び込んだ。霊剣から流れ込んでくる戦いの呼吸の記憶あっての芸当だったが、そうと分かっていても、流れるように動いた己の所作は信じ難かった。

（よし、でかした！）

霊剣が喝采を叫ぶが、それには取り合わずにペーネーンを気遣い、話しかけた。

「ペーネーンちゃん、無事か！？」

「……ちゃんは付けなくていいです」

「あ、そう？」

どのくらい先程の状況でいたのか分からなかったが、取り敢えずは彼女の手首の手錠の鎖と椅子に縛りつけていた堅い樹脂の紐とを霊剣を抜いて切断した。慎重な処置が必要そうな首輪以外はペーネーンの身体の自由は確保できたことになる。

キリエと彼女を連れた老人を探す筈が、魔女とは無縁の筈のペーネーンが――確かに、彼女の身の回りには今の所三人も魔女がいる計算になるが――そこで延びている騎士に虐げられていた現場に出

くわしすというのはあまりにも予想外だった。若干どころではなく目算が狂ったが、この際彼女を危機から救えたことは成果として良いだろう。

だが、魔女の知覚を働かせて周囲を観察すると同時、グリュクの後頭部から背面に掛けてを強烈な痛みが襲った。先日妖獣の返り血を浴びた時以来の、身を裂くような激痛だ。

意識は保てたものの、堪えることは叶わずくずおれる。

「グルクさん!?」

「……君もその発音かよ……」

四肢の自由を取り戻したペーネーンが彼に駆け寄りながらその名を呼ぶと――キリエと同じ発音なのは姉妹だからか地域の特徴か――、グリュクは何とか舌を動かし、愚痴を言って見せた。

だが、周囲に気を配ると、先ほど魔女の老爺と刃を交えた時のようなことも無い筈なのに、魔女の知覚が働かなくなっていた。他の五感に類似を求めるとすれば、耳元で爆音を鳴らされた直後の聴覚、眼球に閃光を浴びた直後の視覚に似ているか。

知覚が撹乱されるだけならばともかく、そのものを封じられては魔法術を使うことも出来なかった。

「ふ、ふ……やはり魔女だったか!」

興奮した男の声が聞こえてきた。見れば、先ほど殴り飛ばした騎士だ。手の中に納まった青く光る灯を抱え、グリュクがどけた下水道通路の石蓋に片足を乗せつつ、彼に向かってそれを照射している。思った以上に早い復帰と思わぬ反撃に、音にならない舌打ちをした。

この場にいるのは勝ち誇りながら小さな青い電灯の光で照らしてくる騎士とペーネーンだけだが、それでも彼が魔女であることが知れてしまったのだ。

「どうだ、動けまい……携帯用の審問照別灯だ！　魔女なら近くで浴びれば激痛で動けなくなる代物さ」
（……永久魔法物質を含むある種の鉱石や結晶体を使用して特殊な光線を照射し、魔女や妖族の神経に刺激を与える……いわば魔女を炙り出すための装置だ！）
「（こんな時に解説しなくてもいいって……）」

主と異なり特に苦痛を覚えている様子も無く解説する霊剣の言葉を聞きつつ、グリュクは尚も動けずにいた。炙り出すというよりは、拷問の機械なのではないか。確かに、光を魔女に当てれば倒れ付す電灯というものは、魔女狩りには好都合だろうが……
続く激痛に尚ももがきながら、少女に呼びかける。完全に無力化されたグリュクだが、何とか、彼女だけでもこの騎士から離れた所へ逃がしてやりたかった。

「……ペーネーン……逃げるんだ……そこに、下水道が」
「グルクさん……」

その場に、極めて唐突に。

「その石蓋はわしの特等席じゃ。空けてもらうぞ」
「っ！？　誰だ！！」

しゃがれて煩わしげなその声と共に、グリュクの周囲に出現するものがあった。

「……！？」

目で見る限りは、黒い金網というのが最も近いように思えた。だ

が目が錯覚でも起こしているのか現実感がなく、一瞬幻覚を見ているのかと疑うほどだった。だが、それで確かに青い光が遮断されているのか、体中を苛む激痛が嘘のように消えうせる。

黒い何かの向こうで騎士が笛らしきものを咥えるのが見えたが、それも、既に駆け出していたペーネーンの体当たりで妨害された。ペーネーンの体重では倍以上に重い彼に対して効果など多寡が知れているだろうが、それでも彼に咥えた笛を取り落とさせ――恐らく吹けば従士たちが殺到しただろう――、その掌中から青く光る電灯を奪い取ることに成功する。ほぼ同時に、彼を囲む黒い金網状のものも消失した。

「グルクさん！！」

「ああ！！」

既に魔法術は生成済みだ。彼女の呼びかけに応答する言葉で念動の魔法術を開放し、騎士が踏みつけていた下水道の石蓋を高速で跳ね上げた。

「ぶふ！！？」

二十キログラムを超えるであろう石蓋は、その淵で騎士のやや突き出た腹を強かに打って引っ繰り返し、重い音を立てて落下した。倒れた騎士は頭でも打ったのかピクリとも動かないが、胴が上下している所を見ると、どうやらしぶとく生きているようだ。結果として同じ相手に一日で三度も危害を加えてしまったが、相手が相手なのでさほど罪悪感などは無い。

立ち上がって、ペーネーンに下水道を通って逃げるよう指示しようとすると、また変化があった。見覚えのある、黒い靄のような何か。それがどこから現れたものか彼らの周囲を渦巻き、喰らう様にテントの幕を消し去って行く。

（主よ、この黒い流体は……！）

「（ああ……あれは忘れられそうにないよ）」

布は壮絶な勢いで上方に向かって食い破られてゆき、後に残ったのはグリュクとペーネーン、そして気絶したままの騎士。暫し忘れていた寒気が頬を撫で、既に大分下がりつつあった太陽が、彼らと彼らの周囲で唖然としている騎士、従士たちを照らしていた。

そして、キリエを伴った隻腕の老人が、音も立てずに二人の前にゆらゆらと降って来た。

7．再会

「ペーネーン、無事かね？」
「お姉ちゃん！　グルクさーん！　剣ー！！」
「キリエ！」
「キリエちゃん！」
（吾人にはミルフィストラッセという銘があってだな……）

確かキリエに”ラヴェじじ”と呼ばれていた老人は、位置をそのままに、キリエが彼の髭から手を離して二人の名と、恐らく霊剣を呼びながらペーネーンに駆け寄って来る。愚痴を呟く霊剣が、場違いにおかしかった。

「キリエ……どこ行ってたのよ、あんたが襲われたって聞いて……！」
「グルクさんとラヴェじじが守ってくれましたー」

どうやら老人が、連れる途中でグリュクへの誤解を解いてくれたらしい。名前の発音は正してくれなかったようだが、彼への印象がやや軟化する。恐らくグリュクと分かれてからはずっとあの老人と共にいたのだろうが、老人がペーネーンの名を知っているということは姉妹と知り合い以上に親しい関係ではあるのだろう。

見れば、騎士団の設営したテントは軒並み破壊され、あの黒い靄に食い尽くされなかった一部を残して、消失したも同然だった。

彼ら以外に、ほぼ消失したテントの周辺で任務に当たっていた騎士や従士たちが、多くは唖然とした表情でこちらを凝視していた。その数はざっと見回した限り、五十人を超える。本陣の周囲では武装しているものも多くはなかったが、それでもすぐに、銃の安全装置を解除する音や部下に行動を命じる声などが響き、戦闘集団とし

て然るべき訓練を受けた人々の組織立った行動が再開された。グリュクも、従士の選抜訓練が無事に終わっていれば、彼らの一員だったかも知れない。

「そのまま動くな！　許可しない動作と詠唱を禁止する！」

銃を構え照準を合わせたやや背の高い眼鏡の騎士が、同様に銃を構えた従士三名と共に彼らを包囲する。顎を振って、主に白髪を腰まで伸ばした老人に対して告げているようだ。

「竜巻の現場にいた魔女だな……そのままゆっくり両腕を前に出すんだ！」

「えー、両方じゃなきゃダメかの？」

老人がとぼけたような調子で発したそんな言葉でも、騎士は宣言通りに発砲した。そして、正しかった。

「この通り、左しか残っとらんのじゃよ」

「うう！？」

老人が言葉を続ける中、硝煙が微風に掻き消え、騎士が呻く。いつの間にか、老人と騎士との間の三メートルと開いていない空間に障害物が出現していた。老人の眼前に現れている黒い壁が、銃弾の弾道を変えたのだろう。老人の体にも服にも、弾丸を受けた様子は無い。

ただし、黒一色ではなく、小さな菱形の隙間が多数あり、よく見ると細長い長短二本の黒い長方形が直角に交差して四十五度の角度で傾斜したものが、幾重にも集合した状態だと分かった。

「……黒い……バツ印？」

（バツ印であるな）
「ちーがーう、斜めってるけど十字じゃからこれ！！　言っとくが、先ほどお前さんを防御したのもこれじゃからな！？」
「あ、す……すいません」

何か拘りがあるのか、最初の印象とは異なる様子で老人がグリュクの感想を一喝する。その崩れた雰囲気で恐ろしさが打ち消されてはいたが、その長い眉の下から覗く黒目と白目の色が逆転し、異様な気を放っていた。

「まぁ、それはさておき……貴様ら、ほとほと無能が過ぎるようじゃなァ。わしらに気を取られて、使い魔の小娘にまんまと引っかかってくれたわぃ」
「（……使い魔とかって、演技だよな？）」
（吾人にも気取られずに人間を使い魔にすることなど、いかにこの老人であっても出来ぬ）
「……大隊のテントを破損したことも含め、話を聞かせてもらおうか……！」
「聞きたきゃわしを捕まえればえェ。あ、そっちの小僧も魔女じゃから、何か知ってるかも知れんぞ？」
「え、俺！？」

老人が眼鏡の騎士に対して不敵に話していたかと思うと突然話題を振られ、叫ぶ。

「総員、少女二名と重騎士殿の安全を確保しつつ、両魔女を駆逐せよッ！！」

その命令に、老人の口の端が吊り上ったような気がした。それより早いか、やや背の高い眼鏡の騎士の号令と共に、その場の騎士た

ちが一斉に行動を開始する。

「護り給えッ！！」

幾つかの銃口から放たれた弾丸の射撃を、呪文によって前方に解放した防御障壁で防ぐ。

「（っていうか、重騎士!?　あいつそんなに偉いのにあんなことしてたのか）」

（世も末であるな……それより、恐らく催眠は力場が連中の丸い鉄兜に阻まれて効果が薄い。正面から攻略するのだ）

「（攻略ってお前、何十人もいるんだけど……）」

霊剣の知識によれば、重騎士は騎士団の下部集団である騎士大隊を率いる階級の筈だった。つまり、重騎士より上には騎士団長や将軍といった位しか残っていない程度には上位の階級ということになる。

霊剣とともに胸中で呆れつつ、維持を解いて打撃魔弾の生成を始めていると、

「撫でよ龍の指」

老人の唸るような呪文で、輪郭の明確な黒い球体が出現した。グリュクが見たものは輪郭がやや不明瞭だったが、結界の影響によるものだったか。

球体は不規則な軌道で老人を弾丸の斜線から隠すように動いて高速で従士たちに近づくと、急に大地に突入して爆裂し、盛大に土砂を巻き上げた。それが各所で複数。即座に別方向から反撃の銃弾が飛んでくるが、再び十字状の黒体の群れが老人の周囲に出現し、弾丸との衝突で大音量を炸裂させつつもこれを防いだ。

「あの子らに血肉の弾け飛ぶのを見せたくない故の慈悲じゃ、心得とけ」

どうやら手加減しているらしい。グリュクは老人の術の性能に驚きつつも銃撃が止んだその方向に向かって走り出し、置いてあった重機を盾に回り込み、老人を狙おうとしている従士の一人を見つけて、威力を最小限に抑えた打撃魔弾を頭部に当てて失神させた。

「あーあー……何てことしちゃってんですかグリさん……」

離れた高台からその状況を観察していたリンデルは頭を抱えていた。銃声はここまでしっかり聞こえる。何があったのか知らないが、ここまで派手に騎士たちにと交戦してしまっては、もはや逃げる他ないだろう。混乱していたおかげですんなり出入り出来たとはいえ、彼の背嚢を持ち出した苦労が水の泡か。

「……しかし、あの爺さんといいどういうことなんだろうねホント」

状況の全貌もよく飲み込めないのだが、もしグリュクが騎士たちから逃れられたなら、こちらとしてもわざわざ王国本土まで来て無駄足は踏みたくないので、合流するのも選択肢ではあった。

赤い髪の剣士が剣を振るうと、迫りつつあった歩行重機の四肢が野菜のように切断され、各部が土の上に転がり落ちた。巨大な金属塊が落着する低い音が届いて、彼の奮闘を伝えてくる。

「何か普通に強いな。人格的な問題は無さそうだし……金取るだけってのも勿体無い話かも」

リンデルはそう呟くと、高台を降りて村の東部の森へと向かった。

今日のヴォン・クラウスは戦場じみていた。実際の戦場ほどの流血は無いにしても、それに準じる銃声が間断なく響いている。それに混じって、騎士たちの叫び声が飛び交う。

「重騎士殿と少女二名を確保しましたァ！！」

「負傷者収容完了！」

「村民の避難はッ！？」

「どうにかしてもっと南に引きずり出せ！　森の中なら遠慮は要らん！」

まだまだ甘い。何もかもを捨てた風を気取っておきながら、十日程度で小娘二人に情が湧く。情が湧いてはこのような真似をする。全てが許しがたいことだった。

だが、退けぬ状況になったからには退かない。何もかもと言いつつも、やはり捨て去れぬ矜持があった。

「ふん、ここは登録抹消村落……お前さん方にとってどうでもいい場所ではなかったのかね。どうでもいいと言いつつ、気に掛ける……好かんわい」

キリエもペーネーンも、聡明な娘だ。二人とも、わざわざ伝えず

とも彼の意図を分かってくれるだろう。一方、いつの間にか背を合わせる格好となった、よく分からない剣を帯びるこの赤髪の青年は……

「なあ、小僧っ子よ」
「グリュク・カダン……あんたは」
「ありゃー、名乗っとらんかったか？　ラヴェル・ジクムントじゃ」
「ラヴェル……じゃあ昼にペーネーンたちがパンを渡すって言ってたのは……」
「おぅ。で、この際じゃ、二手に分かれてこのまま村を出んか。互いに囮になりあう、お得な話じゃ。そっちの剣もどうかな？」
「……お得かどうかはさておくとして」
（吾らは東を所望する）
「じゃあ、わしは北かのぅ」

若者にそう告げると、ラヴェルはその言葉で術を発して〝衣〟を纏い、飛び上がった。
もう未練は無かった。

老人は、虚空から現れた黒い襤褸布の群のようなものをぐるりと全身にくまなく纏うと、一瞬で離陸し高速で北へと飛び去って行ってしまった。あれではグリュクと霊剣だけが、ヴォン・クラウスの南の広場に取り残された格好になる。

「え……」
（高度な複合魔法術による単独飛行……あの領域に達した魔女は、

大陸中を探してもそうはおるまい。御辺も見習うのだ）
「バカッ！　標的が俺一人になったってことだろ！？」
（そうとも言うかも知れぬ）

騎士たちの攻撃はすぐに再開された。グリュクは障壁を発生させつつ霊剣の助言で射界の隙間を読み、何とか村を脱出して東に抜けることに成功した。

「あの爺さん絶対に俺のこと嫌ってるだろ！！」
（それは吾人に言われても分からぬ）

既にキリエとペーネーンは騎士たちが保護してやや離れた所まで連れて行かれている。あの重騎士が目を覚ましてから二人をどうしようとするかは気掛かりだったが、そうは言ってもだからといっていつまでも此処にいることも、最早出来ない。

鉄橋を爆破する準備までは行っていなかったようで、若干の伏兵を制圧するだけでそこも乗り越え、そして追っ手の気配も感じ取れないほどの距離まで走ると、既に背後で日が沈みかけていた。気温も下がっており、背嚢に詰めたマントが失われたのが痛い。騎士たちがさして深追いせずに諦めてくれたらしいのは幸いだったが。

「……あの二人、無事かな」
（運転手に、リンデル少年のこともな）
「あぁ……」

運転手については、騎士団にでも出頭してもらうしかないだろう。連れて行くことはできなかったが、さして問題もなく騎士団領に戻れる筈だ。

ペーネーンが重騎士に虐げられそうになっていたことといい、よく分からないこともあったが……あとは騎士団がグリュクとラヴェルを追いかけ、ヴォン・クラウスにそれ以上留まらないことを祈るのみだ。それを確認できないのが少々心残りではあった。

（主よ、あれは……）

「グリさーん！」

前方の気配から届いた声は、リンデルのものだった。見ると、こちらにパタパタと手を振り、残る手で村から持ち出してくれたらしい彼の背嚢を掲げていた。

私物も彼との合流も諦めていただけに、思わず足取りが軽くなった。もはや呼び方には拘るまい。

「リンデル！　待っててくれたのか！」

「まー、仕事ですから……明確に損させられた訳でもないし、そう見限ったりはしませんよ。これがある前提ですけど」

「あ、あぁ……ありがとう」

円盤状の道具を指しながら告げた少年の台詞で路銀の持ち合わせが碌に無いことを思い出し、グリュクは目を逸らした。背嚢を受け取り、早速マントを取り出して羽織ると、運動後の冷却で急速に冷えつつあった体に落ち着きが戻った。

「経路は道すがらお教えします。他にちょっと相談したいことはありますけど……それは後にしましょう」

そう言うと黒髪の少年はフードを被って歩き出し、グリュクもそれに続いた。

「（まさか……相談したいことって料金のこと!?）」

（自業自得であろう……今からでも一度ソーヴルに戻るべきではないのか）

「（いやそれは……幾ら何でも情けないというか）」

（この状況の方が余程情けなかろうが!?）

「あーそうだ、晩飯どうする？　肉で良ければそこら辺で適当に取って……」

リンデルに話しかけて、霊剣の叱責から逃れようと試みるが。

「いや……自分の分くらいは持ってますから……ていうか食べ物も無いんですかグリさん!?」

「……面目ないです」

（吾人は知識や経験なら授けられるが、そうしたことだけは自ら学ばねばならんのだぞ主よ……）

追い討ちを掛けるようにため息を付く霊剣には取り合わず、日の沈む細道を進む少年を追いかける。気温が急速に下がり始める寒空を、二羽のカラスが鳴き声を上げつつ飛んで行くのが見えた。

既に日は沈みかけており、ヴォン・クラウスは一時の飛び交う銃声など無かったかのように、いつもの暗闇と静けさに包まれていた。夜は各戸で火を炊いているので、何も見えない程ではないが。それ

に、今日は晴れて月も出ていた。
雪が解け固まって白く濁った氷になりつつある沢で、ペーネーンは立ち尽くしていた。雪に混じってわずかに水分に固まって丸い小石の隙間などに残った小麦粉の塊を見つめて、妹がポツリと呟く。

「小麦粉、無くなっちゃったね……」
「……まぁ、あんたがグルクさんと助けてきたロレントっていうおじさんの会社が運んでた物みたいだから……騎士さんたちが一緒に持って行っちゃったのね」

折角集めて隠した小麦粉だったが、あのまま騎士たちに居座られて痛くも無い腹を探られるよりはマシだ。
妹と共に解放される際、彼女はおろか妹にまで狼藉に及ぼうとしたあの重騎士が他の騎士たちから弾劾されている様を横目に見ていたが、それもあって、今のペーネーンは少しばかり気が晴れていた。啓発教義の神などは信じていなかったが、キリエの話もあわせると、あの重騎士は青年に合計三度も強烈に打ち据えられたようで、今日だけは”神様”の熱烈なファンである彼女に意見を合わせても良かった。
村の住民は、騎士たちが村に隠れていた魔女を撃退したという報告に喜ぶ者が多かった。村として王国に見捨てられていながら、バカらしい。彼女たち二人に暴力を振るおうとしたのは彼らの親玉であるあの騎士であり、魔女たちはむしろそれから彼女たちを守ってくれた存在だった。
元から啓発教義はあまり好きではなかったが――そして、実はカロナン重騎士もその点については同じ思想の持ち主だった――、明日からはますます熱心な妹と、信仰に関するケンカが増えるのだろうか。

「せっかく神様がくれたと思ってたのになー……」

「今日はともかく、そんなに上等なもんじゃないわよ神様なんて」
「お姉ちゃん、だめだよそんなこと言ったら」

彼女が啓発教義に対して文句を言うと、決まってこうして、キリエが諌めてくるものだった。

「あんたを助けてくれたのはラヴェルさんでしょ。あんたを助けるために、あの人を十日前からゴミの山に住まわせるように手配してくれてたって言うの？」
「それしかないよ！　で、ラヴェじじにそのごほうびに小麦粉を入れたパンを作ってあげるように……あ」
「そのせいで、ロレントさんは会社の車と、頼まれて運んでた小麦粉がいっぱい駄目になっちゃったんでしょ？」
「うん……」
「神様はそんなことしないわ？」
「……うん……」

かの運転手が悪人だったのだ、とまで言い出すのではないかと危惧していたが、妹の心が未だ人間的な優しさで占められていることを確認し、ペーネーンは安堵した。

「じゃ、帰ろ。母さんにもご飯作らないと」
「はーい……」

彼女には珍しく、元気がない。いつもはペーネーンが”神様”に文句を言った程度で口論になるだけに意外だったが、やはりラヴェルが去ってしまったのがショックだったか。
だが、すぐにいつもの活発さを取り戻してくれるだろう。姉として、彼女の本質が優しく、そして強いものだということを知っている。

姉妹は手を繋いで、短い家路へと就いた。

7．再会（後書き）

以上で第3話の完結です、ここまでお読み頂きありがとうございました。

作中登場した用語についての補足ですが、

・遊素↓ヘリウム（Ｈｅ）

・焦素↓オゾン（Ｏ３）

・焼銀石↓リチウム（Ｌｉ）

にそれぞれ対応しております。

どれも軽めの元素やその化合物でイメージに近いものを選んだだけですので、詳しい方に突っ込まれた時は平伏するしかありません。

水素や酸素などの漢字で表記できる元素だけに留めて置く、もしくは素直にカタカナで表記するということも考えたのですが、遊素とか書きたいという誘惑に負けました。

等と言い訳致しました所で、次回もお楽しみ頂ければ幸いです。

ご意見・ご指摘・ご感想もお待ちしております。

1. 空腹の儀式

そして私が許しがたいと思う最たることは、弾も魔術も飛んではこない後方からああ撃てこう撃てと指図しておいて、上手く行けば我が物顔、不首尾に終わればお前の撃ち方がなっておらんからだと責任逃れに走る人々です。

命を掛けて戦う男たちを、時には不具となり、時には棺となって祖国に戻ることとなった若者たちを尻目に、そんなことはさておいて税は軽くしろ、年金は増やせと平然におっしゃる人々です。

彼らの命を守る鎧の厚みと弾丸の数を減らして、後方の我々が飯を食らっているという事実には目もくれず、省みない、それでいて口だけは出させてもらうぞ、そんなことで戦えますか、命を張れますか！

聡明でおられる皆様にはご理解を頂いておりますが、それでも戦い、命を張っているのが、彼らなのです。

どうか帰還した男たちを、声援など結構、まずは暖かい食事と寝床とでご歓迎頂けますことを、願って止みません。

――ある騎士団出身の代議院議員の公開講演録より抜粋、書き起こしたもの。

結局は、バランスなんだと思います。もしもそれが行き過ぎれば、軍人が体を張っていることを理由に無制限に文民を虐げても良いようなことになりますから。

先生の仰る通り、お互いを理解しようとする姿勢に基づいた連携こそが、前線と後方、戦闘員と非戦闘員との関係に求めうる最良の

解でしょう。最良ゆえに、最難なのですが。
機械だなどと揶揄されがちな啓蒙者たちの方が、私たちより的確にそれを実現できているというのが、何とも皮肉な話に思えてきます。

――ある学生の私信より抜粋。

飛行試験は順調だった。機体全体が彼に全てを委ね、機動に操縦を反映する。
機体の半分以上が啓蒙者製と聞いて最初は乗り気ではなかったが、彼は少々考えを改めることにしていた。この新型の飛び心地は最高といって良く、啓蒙者たちの中にもこうした素晴らしい機械を作り出す気骨の持ち主がいるらしいことが分かったからだ。
高度を渓流近くまで落とすと対地効果で大きな水飛沫が上がるが、秘蹟で防御された機体が濡れることはない。啓蒙者たちは標準で使っているという光る文字が表示されるガラス盤に次の試験項目が表示され、それに従って急上昇と高度限界仕様の実証に移った。
操縦席のバタールが操作桿を引き絞ると、機体は機首を上げた。加速度対策にあつらえられたこの飛行服――鎧のようだが着心地は悪くない――がなければ押しつぶされているような加速で一気に急上昇し、矢となって天空へ駆け上って行く。尤も、今の機体は矢とは比べ物にならない超音速を叩き出しているので、せめて弾丸と形容すべきか。
計器群の横に位置する後部カメラに映っていた渓流とそれを挟む深い渓谷があっという間に遠のき、各種計器の針が揺れて機体の状況を知らせてくる。雲の海さえ背後に抜き去り、遮光バイザー越しに見える太陽までもを手に取れそうに思えた。

秘蹟装置の出力も良好で、一分足らずで平時に啓蒙者の定める限界近くまで到達することが出来た。理論上は（そして実際に操縦した手応えとしてもそう予感していたが）気圏を越えることも出来るらしいが、二万メートル以上の海抜高度での飛行は戦時・平時を問わず、啓蒙者たちが厳重に禁止しているのだ。現在高度計が指しているのは１万９０００メートル前後、これだけでも一部の観測事業などを除けば前人未到の領域ではあったが。

啓蒙者たちがそう決めた科学的な根拠は不明ながら、時間さえ許せば月にも到達できるであろうカリタスの持つ可能性を試せないのは何とも惜しい。太陽の位置と南西の空に浮かぶ残月の形とが、確かにあそこに巨大な球体が存在することを示しているというのに。

その分だけ、例え時間を少々超過しても、この機体を大気の中で思い切り泳がせてやりたかった。だが、そこに横槍が入る。

「こちら管制室、システィノヴォ上騎士応答してください」

「こちらシスティノヴォ、管制室どうぞ」

地上に設置された管制室からの通信だ。兜に内蔵されたマイクで応答すると、管制を担当する女性騎士が淡々と告げた。

「撤退命令です。上騎士は速やかにカリタスを下降させ、収容準備に入ってください」

「何だと？」

試験項目の追加でも来るかと期待していたのだが、当てが外れた。王国が制圧している筈のこの地域で撤退というからには、大方、魔女たちに試験の情報が漏れたのだろう。邪術を扱う魔女たちの諜報能力は侮りがたく、王国どころか啓蒙者までもが、時折煮え湯を飲まされていた。

「叛乱地域の強行部隊が当地域に接近中です、急いでください」
「馬鹿な」
「確かな情報です」

呟くと、融通の利かなさそうな管制騎士の声が淡々と補足してくる。彼としては、別に味方の情報を疑っている訳ではない。

「……試験員たちの離脱はどうなっている」
「現在離脱中です。カリタスの収容準備も進行中」
「いや、私はカリタスで魔女を迎撃する。武装は無くとも、本機には秘蹟がある」
「既に最寄の基地から救援部隊が発進準備を整えています。戦闘運用は許可されておりませ……あ、計画長――」
「いいから戻れ上騎士！　君とその機体にいくら使ったと思ってる！　全て王国民の血税だぞ！」

管制騎士からマイクをもぎ取ったらしい計画長の怒声が、機器の向こうから飛んできた。このカリタスの試験操縦に起用してくれた事には感謝しているが、所詮は技術屋であるだけの男だったか。

「王国民の血税の注ぎ込まれたればこそ、本機の性能は本物です。慣らしが浅くとも、時間稼ぎ程度は問題ありません」
「カリタスはまだそれ一機しかねーッつってんだ、聞いてんのかこの出撃野郎！！」
「計画長、全ての通信は記録に残って――」

バタール・システィノヴォ上騎士は煩く喚く計画長に告げると、兜のスイッチを切り替えて通信を遮断した。
自分でもやや違和感を覚える程、機体を信頼している。地上での一連の試験こそほぼ終わっていたとはいえ、まだ飛行試験の二日目

に過ぎないこの試作機をここまで信じることなど、出来るものだろうか？

否ー一今必要なのは思索ではなく、戦意と判断だ。一抹の疑念をかき消して機首を下げ、降下を開始した。ここまで上昇するのに一分足らず、秘蹟を全開にすれば二十秒強で地表まで到達できるだろう。

これが、有人空戦自動巨人・カリタスの初陣となる。

卓を挟んだ椅子にかけ、赤い髪の青年が嘆息する。腰掛けている上に背を丸めているが、身長は高い方だろう。何があったものか、やや垂れていた目尻が更に弱々しくなっていた。

「グリさんは心配し過ぎなんですよ」

対面する黒髪の少年がそう呟いた。少年はそのまま、水とは別に注文した飲み物のグラスに残った氷を戯れにスティックでかき混ぜながら続ける。

「言い方は悪いですが、お客ってのは金蔓、お金を引っ張ってきてくれる有り難い蔓なんです。こっちの握る手に棘でも刺さない限りは大事にしなきゃなりません。細かい事故や手違いだってあるでしょうし、何が何でもの絶対を求められても困りますが、心配は無用です。お金さえ頂けるなら」

二人は、ヴォン・クラウスを出て一日半の場所にある、ウェンナハーメンと呼ばれる鉄道駅にいた。

より正確には、その近くに建っている小さな食堂の一席に。昼時だというのに客入りが不自然に良くないのだが、その原因は分からない。駅は騎士団領有数の規模を持ち、同じく騎士団領有数の大都市であり交通・物流の焦点として人口も多い場所なのだが、一歩人通りの死角に入ればこの有様ということか。立地以外には食事が不味いという可能性が思い浮かぶが、それを自分で確認するのに必要なものが不足していた。

まぁ、それも空腹の前ではどうでもいいことだが。

「お、お金……？」

グリュクは、やや青ざめつつも単語を口にした。食堂にも関わらず、目前の卓には水の入ったグラスしか載っていない。最初は氷が入っていたらしくグラスとその足下を水滴が覆っていたが、今は小さく水面に残った泡がその名残を留めるだけだ。

「ええ、任せてください」

「はい……」

彼の気掛かりを余所に、少年はそう断言すると目前のグラスから解けた氷で薄まった茶を飲み干した。少年の前には他にも料理の皿が二つ、ソースや小さなかけらを残して空になっている。特に不味そうな素振りも無く平らげていたので、料理が良くないという可能性は小さいか。

ソーヴルで役人から渡された出国許可証で、街道の国境検問は難なく通過できた。違う盟主を仰ぐ緩衝諸国同士の国境線が本当の前線であるため、王国とその衛星国家との間の行き来はさほど厳しく取り締まる必要などないのだと、少年は言っていた。

それについては、世話になった魔女から聞いている事でもあったが、偽造許可証でここまであっさりと通過できるとまでは思ってお

らず、少々拍子抜けではあった。

「ていうかグリさん、お腹空いてるんじゃないんですか？」

「え……いや……そんなことないよ」

こちらを案じたか少年が尋ねてくるが、グリュクには言葉を濁すことしか出来なかった。

「ならいいんですけど」

（惨めなり吾が主よ……）

マントに包まれて傍らに置かれた剣が、鞘の中から彼以外には聞こえない声で呆れたように呟いてくる。とある事件で彼の相棒となった霊剣、銘ミルフィストラッセだ。精神に直接語りかけるその声は、この場では魔女である彼のみに届いていた。

「それじゃ、もうそろそろ行きましょうか」

「あ、ちょ……」

「お勘定お願いしまーす」

少年が薄い紙に書かれた勘定書きを厨房前まで持っていくと、店の女給が出てきて勘定台の機械に数字を打ち込む。

「リンデル……先に出てる」

「どうぞ」

剣を帯び直して少年にそう告げると、グリュクは暖簾をくぐり、傍の壁に背をつき溜息を付いた。

「（ああ……どうやって切り出したものか）」

（素直に言えば良いではないか。”実はお金が無くて注文出来なかったんだ”、“昼飯奢って”、と）

「（言ったが最後出国を手伝ってくれなくなりそうで言えない……）」

（出国した後はもっと言い出しにくいというか、文無しが露見した際の追求がより厳しくなると思うのだが……）

「（……そうなんだよな）」

グリュクは一層うなだれた。

騎士団領は南北に長く、対“東部反乱勢力地帯”の最前線だった。有り体に表現すれば、王国とそれに連合する諸国が魔女や妖族と戦う際に盾を務める国家であり、その為なのか他の経緯があるのかは霊剣も知らないらしいが、騎士団一つに対して領土が与えられているのだ。

正式名称、聖堂騎士団領ヌーロディニア。

一応は独立国という扱いになっているが、非公式ながら緩衝諸国と呼ばれているとおり王国の一部のようなものである。小規模な国家ながら、一騎士団として見れば連合最大の軍備を誇る。

そんな物々しい言葉で語られるこの戦闘国家も、内を一つ歩けば鉄道もあり、人の入りの悪い食堂もあるということなのだろう。

支払いを終えたらしいリンデルが表に出てくると、

「グリさん、次の便で国境近くのダムまで行けるんで、もう乗っちゃいましょう」

「え……もう乗るの」

「出国したいんでしょう」

「そりゃ……もちろんそうだけど」

さすがに公道で平然と密出国の話などをする訳には行かないのだろう、リンデルは声を潜めてそういってきた。だが、鉄道を利用す

ると言うことは乗車料金が発生するということであり、さすがにこれ以上誤魔化しは効かないということでもある。
グリュクは決心した。

「リンデル、実は言わなきゃならないことがあるんだけど……」
「何ですか？」
「実は……」

重大な決意を込めてさらけ出したはずの事実を聞くと、少年は事も無げに答えてきた。

「ああ、それなら大丈夫ですよ」
「え」

見ると、リンデルは何か小さな紙切れをグリュクに差し出してきている。文面を見ると、乗車券と分かった。

「さっきのお店、うちの騎士団領支店でして……会計の時に行動資金を補充しました。余裕は持たせてあるんで、グリさんの分の乗車賃くらい払っておきます」
「え、えー……」
（出国幇助業者の活動拠点であったか。道理で客入りの少ない筈）
「……いいの？」
「その代わり、無事に旅が終わったらうちでしばらく働くといいです。割も悪くないし、僕が口利いて衣食住つけます」
「えー、しゅ……君の所の仕事をか？」
「ここで僕がグリさんを置いて手ぶらで帰るよりは、お互い得だと思いますけど」
「……まぁ、それでいいならいいか。ありがとう」

そこで、遂に腹の虫が声を上げる。

「……じゃあさっき何も食べてなかったのって」

「……はぃ」

「……何か買いましょうか」

「ありがとう……」

礼を言うと同時に再び腹が鳴った。

食堂の人の入りが少ない理由は予想外だったが、行動資金と言うことは、少なくともこれから彼に世話になった分については返済せねばならないだろう。早くも負債を抱えてしまったらしい。詳しく聞くのは場所柄避けた方がいいだろうが、少年の言う“うちでしばらく”の具体的な内容次第では、まずいことも覚悟しなければならないのかも知れない。

出国幇助業者、一部に呼ばれる“逃がし屋”とは、王国と王国に同調する国々から出て、それらに敵対するベルゲ連邦やその傘下の国々に入る行為を支援・補助することで収入を得る人々のことだ。逆に連邦から王国へと逃がす場合も無いではないが、需要の少なさから専門に行うのは少数だという。

何故そちらの需要が少ないのかと言えば、具体的には降水量に応じて掛かる税金や徴税機関の越権行為の常態化、祖先崇拝・精霊信仰などの土着宗教に対する苛烈な弾圧など、要するに住み辛いのだと云われている。グリュクも物心つく前とはいえ家族の多くが、啓発教義を推進する宗教政策の犠牲になっており、政争の煽りで十八歳まで過ごした故郷も出て行く羽目になってはいた。それに対して何も感じなかったということはないが、魔女になってしまうまでは出国などは想像の埒外だったと言える。

かのゾニミアは連邦出身でありながら王国へと移り住んだ奇特な部類に入るが、その彼女が手配してくれた業者がグリュクの許に派

遣したのが、彼より四つか五つは年下の、この少年だった。
グリュクは出国幇助業者の業務内容というものをよく知らないなりに想像して不安を覚えながら、券を受け取った。

（素直に明かして良かったであろう）
「（……こんな年下の子に世話になりまくりなのが情けないというか……）」
（情けないのは元より承知なり。今更何を気兼ねすることがあろう）
「（……何でそこまで言われなきゃならないんだ）」

グリュクは霊剣によって婉曲に罵倒された憤慨を何とか胸の奥にしまいつつ、歩き出した少年について行った。

2．ウェンナハーメンの異端

グリュクにとってここまでの大都市は数ヶ月ぶりで、まして王国外ともなれば人生初となる。十八歳まで辺境の教会で育った彼にとってはまだまだ新鮮でありながら、かといって全く経験が無い訳でも無い、少々複雑な印象を与えた。

総石造りの歩道に、今は灯が消えているがそれに沿って電灯が列を成し、今は種が埋まっているであろうレンガの花壇がその間を埋めている。

駅までの短い道すがらでも、通りに出れば電気式の信号機が点灯し、それによって人の群や自動車の列が制御を受けて、規則正しく蠢いているのが見えた。

駅の前の広場には誰がモチーフなのかは分からない銅像や、劇場公演の巨大広告、鳩の群がる小さな噴水などがあった。少し視線を外せば細い路地に雑然とした露天が軒を連ね、笛を吹きつつ一人で骸骨の操り人形を動かす路上パフォーマンスに小さな人だかりが出来ている。

擬古趣味で意匠を統一された喫茶スタンドで茶を啜りながら談笑する初老の夫婦、帯銃して歩哨に立つ壮年の警察官、神学校のきらびやかな制服に身を包んで他愛もない雑談にはしゃぐ少女たち……

「懐かしいとまでは言わないけど、久しぶりの雰囲気だなこういうの」

「こういう街にいたことあるんですか？」

「十八の時に故郷を出て……それからしばらく中部をうろうろしてたことがあって、その時少しの間だけ居着いたりしたことがあった」

「へー……」

（ふむふむ）

「（お前には話してないからな、言っとくけど）」

（良いではないか、思い出話に花を咲かせるのも、それは過去と現在とを改めて関連づけるということに繋がる。決して後ろ向きなばかりではない）

「（後ろ向きなことは否定しないのな……）」

（前を見失わない程度の懐古は有益なこともある、というまでのこと。行き過ぎた過去への拘泥は身を滅ぼすなり）

「（それって、昔の主人のことも指して言ってるのか）」

（やも知れぬ。知りたくば“思い出す”のだ。吾人に蓄えられた過去の主たちの記憶は、隠されてはおらぬ。吾人が御辺の心中を知るように、御辺も吾人のそれを、知ることが出来る）

「（日課の魔法術授業に加えて先人の思い出の覗き見……まぁ、分かった。必要な時にはやってみる）」

流石に街中で使う訳にも行かず、街に入ってからは霊剣による魔法術講座は無かったが。

そこまで霊剣と声を出さずに会話すると、リンデルが曲がって広い階段を上り、建物に入ったのが分かった。少し遅れていたので追いつこうとすると、少年も気づいたのか数歩戻って声を掛けてきた。

「グリさん、ここですよ。ウェンナハーメン駅」

「豪華だなぁ。今ってこんなお洒落な駅があるんだもんな」

既に駅の外観は遠目に見ていたが、近くで見ると異国風の背の高い時計塔と窓ガラスに覆われた駅舎の美観がより鮮明になった。騎士団領は啓発教義連合（けいはつきょうぎれんごう）の東端の一つだからか、中部で見た駅と比べてかなり建築の趣が異なっている。洒脱さを感じるのは、グリュクの見慣れない文化の様式に基づいて形作られているせいもあるだろう。

そういった駅舎の作りを見回していると、少年が苦言を呈してきた。

「グリさん、あんまり周囲を見回さないで自然に振る舞ってください……色々目立つんですから」
「あ、ごめん」
謝りながら改札員に乗車券を渡すと、小さな鋏のような器具で乗車券に角ばった切れ込みが打たれた。改札員に目を合わさないように小さく礼を言いつつ、先に改札を抜けたリンデルに続く。
そこそこの長身に、赤みの強い髪。帯剣しているのも併せ、隣の小ざっぱりした服装の黒髪の少年と比べると余計に際だっていた。マントの陰で腰に帯びた霊剣は然程目立っていないが、何か不審な行動をとれば銃を携えた歩哨に取り囲まれるかも知れない。
「うわぁ……」
グリュクが歩哨の一人と目を合わせないようにしてやや長い通路を歩いて歩廊に出ると、壮観が目に飛び込んできた。
天井は二十メートルはあるだろうか、天井を所々開口してガラスで陽光を取り入れられるように作られた広大な舎屋の下に、幾つもの発着歩廊（ほろう）が整列していた。右手には奥から数えて六つの平行した歩廊、左手には櫛状に繋がったそれが三つ。それがいくつかの連絡橋で繋がれており、それぞれに一本か二本の路線が付属し、更にその幾つかには車体を鮮やかな色で塗られた列車が停止している。
張り巡らされた電線に、広告収入を得ているのか無数の大型看板、各歩廊には路線の表示や時刻表に灰皿、更には簡素な売店まで備えており、常に人が寄って年配の女性販売員から何かを買い求めていた。
思わず、体が動き出した。
「すごいぃ！　これだよこれッ！　列車っていうのはホントはこう

いうのだよなー！？」
（おいッ！　御辺は子供かッ！？）
「いやー、これ、電気機関車っていうんだろ！　見たいと思ってたんだ、絵や玩具でしか見たことなくてさぁ痛いッ！？」

余りの感動に興奮し、霊剣の罵倒も無視して早足で歩廊を進んでいると、追いついてきたリンデルに痛烈に耳をつままれた。

騎士団領の有数の大都市であるウェンナハーメンでは、石炭や石油で動く列車の他に、車両上方に巡らせた架線から電力を得て稼働する電気機関車というものが普及しつつあった。軌道の他に発電所や送電網といった施設を整える必要があるため、騎士団領のような比較的狭い国土に経済力が集中している地域以外では未だに蒸気機関車が主流であることも多い。また実を言えば、彼は元々鉄道に興味があった。

だが、そんなグリュクの感動も苛立ちの元にしかならなかったのだろう、少年は指の力を緩めず、静かに詰問してくる。

「グリさん……あんた一体いくつですか」
「うぐ、すみません……まともな列車に乗るのは初めてなんです……電気機関車を見るのも初めてなんです……ていうか自然に振舞えって言ったのに……」
（あな見苦しや……）

グリュクが鉄道列車に乗るのは、実を言えば従士選抜会場への列車便が初めてだった。それ以前は目にはすれど乗ったことも、ここまで大きな発着場を目の当たりにしたことも無かった。建築の内部にここまで整然と並び、かつ天窓から陽光が降り注いでいる発着場などは連合全土でも数えるほどしかないのだが。

先ほどリンデルに食事を世話になり、空腹が解消されていたこと

もあって高揚してしまっていた。
　列車の停止していない線の歩廊ではそれぞれ多くの旅客が様々ないでたちで所持物と共に佇んで次の便を待っていたが、見苦しく言い訳する長身の赤髪の男を叱る黒髪の少年に、微妙に視線が集まっている。

「いいから早く乗りますよ！　十二番線！」
「はぃ……」

　リンデルに腕を掴まれ、力なく階段を登った。階段の段差に鞘の先が何度もぶつかって霊剣が抗議してくるが、その時、天井付近からゴトリと音が響く。駅の放送設備において、構内放送のスイッチを入れた際にマイクの位置を直した音だろう。

『ウェンナハーメン駅発着場構内の皆様にお知らせ致します。これより構内に、堕落した教会に代わって新たに啓蒙者を代弁する兵団が到着しますので、ご注意ください』
「は……？」

　場内の複数の大型スピーカーから男の声で発せられたそのような内容が発着場構内に響き渡ると、利用客たちが訝る間もなく、複数の銃声が響き渡った。霊剣の呼びかけと同時に構内に魔女の知覚を走らせ、状況を確認する。連絡橋の上からは構内が一望出来たので、その状況が知覚にも有利に働いた。空腹のままであったらここまで即座に出来たかどうかは怪しいが。
　鋭い悲鳴が構内のそこかしこで上がる中、構内に感知したほぼ全てが人間――一部が恐らく籠に入れられた犬か何かだ――で、そこから戸惑っている感情や強い恐怖を除外する。すると確信的な想念に緊張の入り混じったものが複数、それと同じ地点に死角を向けると、銃を持った、ただし服装がまちまちで、明らかに歩哨ではない

男たち。その足元にはそれぞれ、本来立っていた筈の歩哨たちが倒れていた。魔女の知覚を全面的に信じるなら、何人かは既に死亡している。

発砲から生じたどよめきが構内に渦巻いていたが、再びの放送と何度かの天井に向けての発砲でほとんど沈静化した。

『ご安心ください、“代弁者兵団”はこれに賛同する市民に危害を加えません。旅客の皆様は兵団員の指示に従う限り、例外を除き安全を保証致します』

既に多くの男たちが、武器を露にして他の旅客へと向けていた。服装から判断して恐らく、旅客を装って構内で合図を待っていたのだろう。

「グリさん、どうしましょうこれ……」

「……人死にが出てるみたいだけど……」

幾つかある連絡橋にも両端に二人ずつ素性を顕した武装者――兵団兵、とでも呼ぶべきだろうか――が立っており、橋の上から状況を監視しているらしい。発着場への出入り口は大小問わず全て、同じような兵団兵複数が固めていた。

リンデルは戦闘に関しては恐らく素人の上に完全な丸腰、グリュクも魔女と露見する可能性を考えると派手な魔法術は使えず、他の旅客の犠牲を厭わなかったとしても対抗のしようがない。

（放送を信じるならば恐らく、異端によるテロリズムであろうな）

「（こんな時にかよ……）」

啓発教義というものは教義がある程度厳格に定まっており、教義と異なること、また教義に対して批判的、ないし攻撃的な内容をそ

れと称して説く、広めるなどの行いを行う者は個人、組織を問わず、教会からは異端と呼ばれる。

魔女同様に異端も審問の対象とされており、こちらは生化学的な手段で検出できない分テロリズムの温床となる可能性が高まるらしい。異端とされた全てが暴力を信条とする訳ではないが、中にはこうして銃器やそれを扱えるまでに訓練を施した要員を保有するまでに大規模化し、かつそれを用いた実力行使に出るものもあるということだろう。

（扱う獲物が農具から銃に替わっただけで、いつの世にも暴力で要求を聞かせようという輩はいた。重税に苦しんだ近世の農民と違って、此奴等は飢えているようには見えぬがな。恐らくこれだけでは終わるまい）

霊剣の呟きと同時に、列車が構内へと突き進んでくる音が聞こえた。グリュクは事態を把握していない定時便が到着したのだと思っていたが、見れば進入してきた車輌は貨物列車だった。通過するかと思えたそれは、構内に入るや否や甲高いブレーキ音を響かせて、九番線の歩廊半ばで急速に停止した。

「……！？」

（あれは……）

到着した牽引車輌の後ろの積載車は五両、その全てに幌が掛かっていた。何人かの武装者がそこに駆け寄り車輌に積み荷を括りつけた鉄紐の鈎を外すと、幌の下の何かが騒音と共にゆっくりと突き上がった。

「自動巨人（じどうきょじん）……！」

幌が取り除かれて露になったその形を見て、リンデルが呟く。
鈍色をしており、形状としてはもっとも近いのは人間か。金属や配管などでやや不格好に人間を模して形を作り、その上から平面を主体とした甲冑を被せると、似たような物になるかも知れない。
ただし、高さは五メートル前後もあった。また、胴体部分には動力を生み出す機関が入っているのだろうか、前後に長かった。
霊剣によれば、以前の大戦時から市街・不整地戦闘に於いて使用される兵器の一つで、搭乗者を一名以上必要とする――胴が前後に長い理由にはそれもあるらしい――という。そちらの方面には疎いグリュクはこれまではただの巨大な鎧という程度の認識しか持っていなかったが、低い駆動音を発しつづけながら一般的な民家ほどの高さもあるそれが路線に降り立つ姿は中々に威圧的だ。
四体の鈍色の巨人がそれぞれに散開し、ある一体は電気機関車の電力源となっていた電線を、手に握った巨大な匕首のようなもので次々と切断していった。高圧電流が通っていた電線の切れ端が鈍い音を立てて千切れ、弱々しく火花を散らしながら鉄軌に垂れ下がる。
発進しようとしていた十二番線の電気機関車は電流を遮断されてたちまち停止し、高速で走り寄ったもう一台が、先頭車両の運転席を同じく手に持っていた巨大な匕首（あいくち）で叩き潰した。グリュクたちのいる連絡橋からではよく分からなかったが、その周囲でどよめきが上がっている。

『既にご存知の向きもありましょうが、代弁者兵団の希望は聖伐の再開であります。妖魔たちの舌先に丸め込まれて矛を収めた臆病な教士たちに代わって、ここに悪を許さぬ戦士たちの新たな王国を建設するための準備にご協力ください』

そう心がけているのか元からか、無機質な音声は続いた。どこから放送しているものか、妨害らしきものも入っていない所を見ると放送施設も完全に制圧されているのかも知れない。

声がまた途切れると、何人かの男が周囲の同じ武装者に指示を出し、構内の旅客たちに銃を突きつけて七・八番線の歩廊に集め始めた。突入してきた貨物列車が停車しているのは九番線なので、線路を一つ隔てたすぐそこだった。グリュクとリンデルも、迂闊に反抗する訳にも行かずに従った。

強制催眠の魔法術はその性質上武装した男たちと無関係の旅客とを選り分けて効果を発揮させられるほど器用な術ではないので、焦点を絞ってやや離れた武装者を一人ひとり地道に昏倒させる準備を整えた。無差別に全員を眠らせるという手も考えたが、グリュク自身と機体に守られて搭乗者に効果が及ばない自動巨人、そして発着場の外にいる武装者などだけが健在で残ることとなってしまう。魔法術は万能などではないとはいえ、歯がゆかった。

後ろから銃を向けられて連絡橋を降りながら見やると、四台の自動巨人は電線を切断し終えて路線の前後の出入り口に向かって二手に分かれて行った。突入を防ぐためだろう。

自動巨人たちは先ほどから走り回っているのに足が動いていないのだが、よく見るとどうやら、人間で言う足指の付け根と踵にあたる部分に車輪が備わっており、それで移動しているらしかった。

そして二人が他の旅客の集められた歩廊まで辿り着くと、五両目の幌が取り去られた。中身の外見は円筒の形状に梯子を備えた、一見した所は普通のタンクで、それを見たリンデルが呟く。

「他には自動巨人を乗せてたのに、あれだけ普通ですね」

騎士団領で一般的な鉄道輸送用タンクの様式は知らないが、確かに、動き出して両腕に抱えた機関砲や匕首で旅客たちに睨みを効かせない分親しみやすくはある。

だがそんな感想も次の放送で取り消された。

『尚、当局の対応次第ではこのタンクを破壊し、内部の神経剤を散

布致します。どうか構内の皆様、軽率な行いはお控えくださいませ。兵団員の指示に従い、行動をお願いします』

歩廊上の集団に悲鳴じみたざわめきが広がった。位置からして、本当に神経剤が入っていたならば量にも拠るが全員、死ぬか重度の後遺症が残る筈だ。

「……神経剤って、神経ガスのことだよな」

（ある程度閉鎖されたこの発着場構内で散布され、防毒・解毒措置など取れぬ旅客たちがどうなるか。告げるまでも無かろう）

既に武装者たちはどこに用意してあったのか、濾過フィルターを備えたマスクで顔面を覆っていた。脅迫者たちの顔が見えなくなり人間味が薄まったことで旅客たちの恐怖が増したのが、魔女の知覚でも理解できた。リンデルも、顔にこそあまり出していないようだが狼狽していた。

（主よ、ここは少年と別れ、彼奴等を倒すのみ。いかなる手段を使ってもだ）

「（……いきなりどうした）」

（常日頃の素性は知らぬが、生まれてよりそのような生態を持ち合わせたアヴァリリウスであればまだしも、彼奴等、最早畜生の以下のそのまた以下まで成り下がり果てたと言える。決して許してはおけぬ）

「（落ち着けよ……お前がどんなに優れた知恵を貸してくれても、魔女だってことを知られずに、周りの人にも被害を出さないで武力制圧をやるなんて無理だ。やるとしたら、俺の討ち死に前提で考えないと）」

（ぐぬう……）

巨人には効果が無いとはいえ、ここはやはり一人一人昏倒させてゆくという手順を取るほかない。あとは、魔法術を使用する時に必ず取らなければならない発声の手順を、どこまで怪しまれずに出来るかということだが。

今にも鞘から抜け出て飛んで行きそうな気配の霊剣を宥めつつ付近を窺うと、その時魔女の知覚に感があった。

（！！）

「！！」

魔女の持つ第六の知覚は、人間や動物ならばその体温や生体電流、呼吸に伴う微弱な大気の動きや化学物質の濃度勾配の変化、魔女や妖族であれば魔力線に反応する変換小体の活動なども加えてその存在を検出している。集中すれば人間の感情の流れ、熱や電気エネルギーの所在、物質の流れなども読みとることが出来るが、同じ魔女や妖族を相手には擦りガラスの向こう側のようにに霞んでしまう。更にその範囲と精度は反比例するが、闇夜でも蝙蝠のように相手の位置を特定したり、自然災害の予兆を感じ取ったりと、様々な応用が可能だ。

グリュクのその感覚に現れたのは、三つの大きなエネルギーだった。発着場の外で、それが弾ぜた。

「（……少し違う）」

同時に、鼓膜にも爆音が届いた。広大とは言え屋内である発着場の内側に響き渡り、周囲の旅客たちも耳を押さえていた。

爆音の出所と魔女の知覚で感じた大きなエネルギーの出所は重なる。その方向を見やると、そこにいた鈍色の自動巨人の一体が崩折れるのが見え、その向こうからその威力の出所と思われる新たな影が現れた。

「新しい自動巨人……？」

現れた影は、やはり巨大な金属細工に鎧を被せたような姿をしていた。先に現れた四台とは異なり色は明るく、主に灰白色で統一された全体の一部に、意匠のように明度の低い赤でアクセントが施されていた。そこから立ち昇る数条の硝煙と倒れた鈍色の巨人の破壊された機体で、外部から飛来した砲弾によってその爆音が引き起こされたのだろうと判る。鈍色の自動巨人に比べると全体的に幾分細身、動きは非常に軽やかで、かつ全体的に大きい。

東の出入り口から高速で進入してきた一台は倒れた鈍色の自動人形を飛び越えてそのまま構内を滑り――この明るい色の巨人も足に車輪を内蔵していた――、小さな駆動音を立てつつ左右への反復、時には大きな跳躍を駆使して機関砲を小出しに発砲するもう一台の鈍色の巨人に接近し、何と上段蹴りで頭部を破壊し、その勢いで以って転倒させた。そしてそのまま倒れた鈍色の巨人の腕を取って関節を極め、少々耳障りなものが混じった大きな破断音を立ててそこから折り取ってみせた。続けざまに残った片側も同様に処理され、頭部と両腕を失った自動巨人が損傷部から小さな電流火花を散らし、無残な残骸を横たえていた。

それを見たリンデルが驚いたように呟く。

「あ、あれ、聖堂騎士団の機体ですよ！？」

（何と……現代では彼らも巨人に乗るのか）

現れたのは、ウェンナハーメンが所在する半独立国家“聖堂騎士団領ヌーロディニア”を領有する、聖堂騎士団と呼ばれる戦闘集団だった。負傷を覆った包帯をモチーフとする、白地に赤という象徴色が使用している自動巨人にも反映されているらしい。

鈍色の自動巨人たちは全てが戦闘不能、もしくは操縦者を引きず

り出されて無力化されており、既に三台の灰白色の自動巨人は生身の抵抗者の一掃に移っていた。

『武器を放棄して投降しろ！』

スピーカーを搭載しているらしく、灰白色の巨人は代弁者兵団とやらにややノイズの混じった声で投降を呼びかけつつ、構内を巡って時には発砲した。

周囲を見れば、聖堂騎士団の制服――自動巨人同様、灰白色に深い赤色をあしらっていた――に身を包んだ生身の団員たちも続々構内に増えてきており、負傷者の容態を看たり、無事な旅客を発着場の外へと誘導したりしていた。既に外にいた“兵団”の構成員も無力化されているのだろう、他には散発的な銃声が響く程度で、死者と構内に生じた施設の被害を除けば事態は平常へと復帰しつつあるらしい。

『皆さん、賊は全て駆逐しました！　聖堂騎士団の誘導に従って保護を受けてください！』

（娘の声であるな……時代は変わるものだ）

「（思い出話か）」

（否、感慨なり）

どうでもいいことに反応した霊剣の屁理屈に溜息を付いていると、リンデルが辺りを見回しながら呟いた。

「何かあっけなかったですね……」

「あぁ……」

（犠牲が出てしまったことは悔やましいことだがな……吾人も、まだまだ手管が足りぬ）

歩哨の男たちや運転士の犠牲についてはどうにか出来たというものでもないだろうが、言葉にしてしまうことと何かを決定付けてしまうようで、グリュクは言葉に出さなかった。なまじ魔女として幾つか戦いを重ねただけに、何も出来なかった、しなかった後悔に暫し身を浸していた。彼が早期に行動を起こしていたら他の乗客に危難が及んだのだとしても。

「グリさん、発着場は一旦閉鎖するそうですから、早く出ましょう」
「あ、あぁ……」

リンデルの声に気づいて頷くと、突然魔女の知覚している範囲に大きな憎悪が飛び込んできた。その出所を見ると、先ほど腕を引き千切られた鈍色の自動巨人が立ち上がり、胴体の防護殻を開いて操縦席を曝け出していた。

席に座って左右の操縦桿を握り締めているのは、まだ若さを残した頑強そうな骨格の男だった。頭から血を流しつつ――頭部を守る防護具すらしていないのだから当然だろうが――、怒気に赤らんだ顔で、構内に勧告をして廻っていた騎士団の巨人の一台を睨んでいる。

「啓蒙者に取り入るクズ犬どもがぁ！」

叫ぶ声は、意外にも武装者たちが放送で流していたものと同じだった。あらかじめ録音しておいたのか機体の中から喋っていたのかは分からないが、どちらにせよ当初の余裕の溢れる声色は失われていた。

そしてそのまま無事な両脚を作動させて機体を突進させ、鈍色の巨人は丁度背を向けていた灰白色の自動巨人に体当たりを仕掛ける。金属の装甲が急激に変形して生じた重く甲高い音が炸裂し、鈍色の自動巨人は大きく吹き飛んだ。

「……グリさんっ！？」

リンデルがこちらを見て非難するように小さく叫ぶが、被りを振る。魔法術で鈍色の巨人を退けたのはグリュクではない。

吹き飛んだ鈍色の自動巨人は操縦者を吐き出し、反対側の歩廊に激突して止まった。見れば、操縦者は落ちて転がった拍子にレールに頭を打って、気絶しているらしい。

「無力化が甘ぇぞ、ナヅホ！」

そこに飛び込んできた白い影は、歩廊に仁王立ちして灰白色の自動巨人に語りかけていた。やや長く伸びた黒い髪を野性味を感じさせなくも無いスタイルで整えている三白眼の男だった。年齢はまだ若く、グリュクとさほど違いはしないだろう。聖堂騎士団の制服を着ており、機械の混じったような鍔の大きな両刃を肩に担いでいた。

その同僚か何かなのだろうか、自動巨人の操縦者もスピーカーを通して言い返していた。聞き間違いでなければ、ナヅホと呼ばれていたか。

『あのままでも反撃で鎮圧していましたッ！』

「非殺傷制圧をやるなら、ちゃんと移動機構までぶっ壊しときゃ意味が無ぇっつってんだ！」

『他にも敵がいたんですから無理言わんでください！』

「黙れーッ！　巨人を授かって五年と経ってねーヒヨっ子の癖やがってからに……おいコラ、そこのでかい真っ赤頭とチビ、見世物じゃねーぞ！　民間人はとっとと平和を享受しに行け！」

「は、はい……」

口論を中止したかと思うと、黒髪の騎士は不意にこちらを睨んで

乱暴な言葉を投げつけてきた。グリュクは少年を引き連れて歩廊を後にすべく、騎士たちの誘導に従って路線の敷地上に設けられていた非常用の歩道を歩いて発着場の外に出た。

騎士の言葉は意味だけ取れば“もう安心です”ということなのだろうが、リンデルなどは隠すことなく腹を立てている。

「何だよあいつ……」

「でもすごいな、自動巨人って、多分十トン以上はあるだろ。それを横殴りに急角度で吹き飛ばしたのはあの剣の効果なのか」

（あれが古来よりの聖堂騎士なり。現代では巨人に乗る者もいるようだが、本来はああいった者だけを聖堂騎士と呼んでいた。量産型の擬似魔法剣を使って、魔女と同等の戦闘力を持つに至った精鋭中の精鋭である）

「（えらく口が悪いけど）」

（精鋭中の精鋭である）

「（まぁ……実力はあるのかな）」

発着場の外は騎士団や警察関係者がひしめいていたが、その隙間を縫って、無事に脱出することが出来た。既に腕章を巻いた新聞記者やマイクを握ったラジオのクルー、野次馬なども来ており、そういった人々がやや難易度を上げていたが。

『繰り返します、聖堂騎士団及びウェンナハーメン警察は、ウェンナハーメン駅発着場を現場検証のために一時閉鎖致します。返金を開始しておりますので、旅客の皆様は駅窓口にて乗車券をご提示下さい』

改札を抜けると、復活したらしい駅内放送が、淀みない女の声でそう告げた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0160y/

霊剣歴程

2011年12月2日02時43分発行